流動

2月号

The Ryūdō

昭和55年2月1日発行(毎月1回1日発行)第12巻第2号
昭和44年12月3日第3種郵便物認可
昭和54年1月12日国鉄首都特別扱承認雑誌第4216号

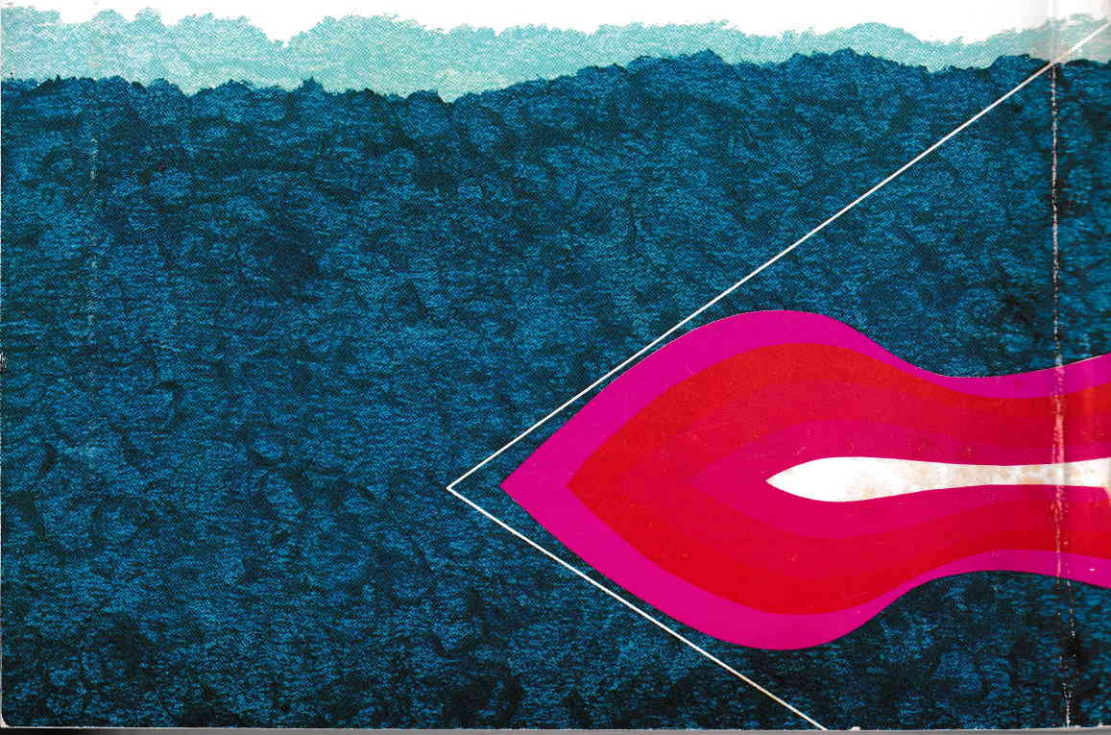
特集 **新左翼各派の80年代戦略**

〈危機〉の時代を迎え新左翼は何をめざすか。
各派が書き下ろす80年代革命論

＊特別討論=80年代情況への模索

転換期の時代と人類史の未来

いいだもも・津村喬・真継伸彦・武藤一羊



グラビア
マナ島 フィジー(Mana Is. Fiji)　堀田雅道
思考空間・行動空間　田中小実昌　宮内勝
カンヴァス'80　現代精鋭洋画家②　北村脩

編集地下室
「戦争ごっこ」の八〇年代的鑑賞法は？
福田恆存の一風変った朴擁護論　35
文学のキャバレー化に抗う有島全集

◆特別討論　八〇年代情況への模索
転換期の時代と人類史の未来
危機に直面する現代世界を変革する、生活革命―世界革命の新たな理論と実践は可能か。八〇年代を前に〈人民メディア〉の復権をかけて創刊された四誌の編集者による白熱討論
いいだもも（「クライシス」編集長）
津村喬（「80年代」編集委員）
真継伸彦（「使者」編集同人）
武藤一羊（「世界から」編集委員）　42

特集　新左翼各派の八〇年代戦略
（五十音順）
＊革命的共産主義者同盟全国委員会
八〇年代大激動と日本革命勝利の展望　66
＊共産主義者党
反帝闘争・労働者統制運動を闘いぬき工場占拠ゼネスト・ソビエト革命への展望をきりひらけ！―七〇年代の総括と八〇年代への展望　72
＊共産主義者同盟（全国委員会）
現代過渡期世界の止揚と共産主義者の任務　78
＊共産主義者同盟（全国委）マルクス・レーニン主義派
激動の八〇年代に向けマルクス・レーニン主義党を建設せよ　84
＊共産主義者同盟赤軍派（プロ革）
八〇年代革命的労働者の任務　90
＊共産主義者同盟蜂起派
自国帝国主義打倒＝プロレタリア国際主義の旗幟を鮮明にし建党建軍＝非合法体制の構築に勝利せよ　96
＊共産主義労働者党全国協議会
廃港決戦勝利を解放の〈根拠地〉の創造へ！　104
＊日本革命的共産主義者同盟（第四インターナショナル日本支部）
自民党政府打倒！アジア革命の勝利めざし八〇年代階級闘争の高揚をきりひらけ　110

＊日本革命的共産主義者同盟革命的マルクス主義派
激動する国際＝国内情勢と八〇年代の革共同・革マル派の基本路線 116

＊日本共産党再建準備会議
大武思想の旗のもと革命的前衛党を再建し日本革命を勝利させよう！ 122

＊マルクス主義青年同盟
思想の復興をかけ、肉体の死滅を辞さず、歴史創造へむけ戦時の人間的変革活動に起ちあがれ！ 128

＊マルクス主義労働者同盟
社共にかわる革命的社会主義党の建設をよびかける！ 136

＊労働者階級解放闘争同盟
現代帝国主義の体制内統合を突破し現代革命を組織するあらたな潮流建設へ 142

アフリカ文学の可能性 ―アフロ・サクソン文学から民族文学へ
出獄後、「今後英語では書かぬ」と表明したクキ・ワ・シオンゴ　アフリカ知識人にとっての民族的基盤とは何か
宮本正興 148

韓国「政変」と在日の間
「在日」の政治意識を呪縛している規範力とは何か。政治理念の背後に潜む近代社会の制度性を問い直す
竹田青嗣 168

今月の本　金達寿著「対馬まで」　金石範著「往生異聞」
戦後在日朝鮮人の苦難の歴史
中島誠 214

吉本隆明試論II ―戦後思想の超克
政治思想と「自立」論・考
六〇年安保の傷から自立へ。だが、その回路は吉本の戦争―戦後体験を風化せずにはおかなかった
神津陽 180

現代思想家論⑪
毛沢東 ―中華思想とマルクス・レーニン主義
毛沢東思想とは何か。中国伝統社会とマルクス・レーニン主義、儒教と道教からその本質をさぐる
太田竜 218

反時代的な考察 三島由紀夫をめぐって⑨
内なるナショナリティへの凝視
清水昶 238

出版社の運命を決めた一冊の本（第八回）
三一書房と五味川純平の「人間の条件」
塩沢実信 252

イベント情報 167
Ryudo Personal Space 178
編集メモ 266

100枚

表紙　とよたかずひこ
カット　赤瀬川原平　澤井憲治

◆特別討論　八〇年代情況への模索

転換期の時代と人類史の未来

危機に直面する現代世界を変革する、生活革命―世界革命の新たな理論と実践は可能か。
八〇年代を前に〈人民メディア〉の復権をかけて創刊された四誌の編集者による白熱討論

いいだもも
（「クライシス」編集長・司会）

津村　喬
（「80年代」編集委員）

真継伸彦
（「使者」編集同人）

武藤一羊
（「世界から」編集委員）

生活革命運動をめざして

いいだ　八〇年代なるものの始まりにあたって、それぞれ新しい雑誌を創刊したばかりの連中の語り合いということになるわけだけど、こうして顔を合わせてみると、ずいぶんと古くから知っている仲で、あまり変わりばえしない。（笑）

でも、真継さんなんかは木曾の山の中にこもっていることが多いそうで、こういう場でもないと近頃はなかなかお目にかかる機会がない。今ではなつかしい思い出に類するようになったけど、真継さんとは、四人組全盛時代に中国をいっしょに訪れて大寨にまわって一晩泊まり、大寨革命委員会と会談をやったことがある。その時、開口一番真継さんが「今朝、起きてみたら小鳥の鳴き声が聞こえないけれど、こりゃどうなっているんですか」と質問して、革命委員会の主任が予想外の質問だったとみえてへどもどした。（笑）つまり、あのあたりはまったく木がない所で、林もなく森もなく、したがって鳥も鳴かない、そういう不毛の地で大寨のコミューン運動が行なわれていたということについてもそれなりの感慨がありましたね。それから毛沢東死後、大寨人民公社も否定されるにいたる幾変転があって、そうした世紀末的状況の中から触発されて、こういう新しいメディアをのっぴきならずつくらざるをえないという面もあると思うんです。そこでまず、それぞれのメディアの固有性に即したかたちで、ざっくばらんに抱負を語ってほしいわけです。

まず、これから出る「80年代」誌、おめでたくも一月一日創刊ということで、三里塚の風車の絵がついているそのおひろめのスローガンを見ると、「自分の暮しを自分の手でつかむために」「宇宙へとひらかれる命をはぐくむために」となっています。そこでまず、津村さんから最近のメディア状況も含めて語ってほしいと思います。

津村　「80年代」誌の自己紹介を最初に言わせていただくと、この雑誌の中心になっている人たちはずいぶんいろいろな道筋をたどって来られた人たちなわけだけど、そのきっかけから言うと「緑のふるさと運動」というのがあって、これは山岸会だとか紫陽花邑だとかにいたことのある人たちが中心になって、しかも、これまでのような閉鎖的な、あるいは山岸会の場合でいうと企業化してしまったコミューンというのではなくて、本来のコミューンの名にふさわしいようなコミューンをどうすればつくれるんだろうということ、を議論した。いいかえれば、世の中を変えるために国家権力を奪取してそれをつくり変えていくというところから主として変えていくのではなくて、先に生活をつくり変えていく、ある

いは人間関係をつくり変えていくというところからやっていかなければいけないんじゃないかというふうに考えて、しかもこれまでのそういう試みに対して不満であり、新しいものをつくりたいということを願った人たちが「緑のふるさと運動」を一九七七年から始めてきたわけです。

ぼくはその前に「週刊ビーナッツ」を一年近くやっていた。民衆の側からの「情報政治」をブルジョワ新聞と張り合いながらやるという意味で大きな仕事であったと思うんです。しかし、やはりこの日本の状況に対して表層でしか、都市社会の上ずみの中でしか発言できていないような気持がずっとあって、とうていこれは越山会にかなわないというのが「ビーナッツ」の一面からの総括でもありました。そのことと、生活のただなかから政治をつくりかえていかなければダメだという問題意識とが重なってくるのは当然で、市民運動や全共闘運動の経験をふまえながら、もうすこし総体的で、しかも具体的な生活革命運動のようなことに踏みこみたいという気持が強くなったわけです。「緑のふるさと」そのものは七七年春にぼくと宇井純さんが問題提起をするかたちで、南那須のいなかでシンポジウムをして、そこからスタートしたんですが、南那須根拠地建設はすぐさま崩壊しました。その後、何個所か動きが出てきたんですが、実際には生産拠点にはなりえないということの中で、それが一種のコミューン主義というのか「主義」をかかげているところに限界がある。自家中毒があって、もっと現実的に、この市民社会の中でいろいろ苦闘をしているさまざまな面をつなぎ合わせていく、経験交流をして学び合っていくということの方がだいじなんじゃないかというふうになってきた。

そのあと、緑のふるさとの出版部のような形で、野草社という出版社をつくって、そこから七九年の三月に『しなやかな心とからだ』というタイトルの体操というか、からだ革命をよびかけた本を出しました。その時にこの本を読んでくれる読者と会いたい、いっしょにからだを動かしていこうという呼びかけをしたわけです。それで、半年あまりで全国二十個所集まりをもって……。

いいだ　コミューン主義行商伝道ですね。

津村　いや、伝道というなにか思い上がった感じが半面あるのだけど、真理を伝えに行こうという感じではなくて、むしろ学んで帰るところが大きいというのが実感なんです。その経験の中で、だんだんに人の流れができてきて、これは雑誌がやれそうかなという感じが出てきた。雑誌を作る主体より読者の不可視の共同体が肝心だと、ぼくは思うんです。人の流れがあってメディアがあるというのでないとダメだと思っていた。そのためには、あらかじめワク組をもっていくよりも、なるべく無内容な題にしようと「80年代」ということになったのですが、これは八〇年代で日本が完全に生まれ変わるというふうに思っているのではなくて、へたをすれば、かなり壊滅的に滅びるという感じをもっているけれども、八〇年代で全部つくり変えたいという意気込みではないんです。むしろ八〇年代いっぱいの十年はとりあえずがんばりますということなわけです。

ぼくらの気持としては、ページの半ば以上を生活欄にしたい、実用雑誌にしたいということなんです。これまで、ぼくが書き手として、あるいは編集者としてかかわってきた雑誌は、ほぼ全部報道や評論中心だったわけですが、世の中を変えていこうとすることが生活のディテールと直結していかないことにいつもいらだっていて、それをなんとかしたい。革命思想を説教しても日常生活が消費社会にゆだねられたままでは、これはこまる。他方で今の婦人雑誌、「暮しの手帖」とか「ミセス」とかのたぐいをぼくはよく読んでいるんですけれど、ちっ

とも実用的じゃないわけです。それは上流階級の人にだけ実用的であったり、ホンモノ志向をめざしている人にとって実用的であったり、いずれにしても若者むけカタログ誌も含めて商品の紹介でしかない。われわれが生活をイメージする時に商品を通じてしかイメージできないようになってしまっている、ということがたいへん不満で、それは今の根本的な転換点にあって少しも実用的ではない。だから、簡単に言えば商品社会から脱け出していくための生活実用雑誌にしようというのがねらいであるわけなんです。それは簡単ではなく、へたをすれば冗談になってしまうことであるけれども、生活の中で商品社会、企業社会に依拠しないですむ部分をどれくらいに広げていけるか、よけいなサービスをどうやって排除していけるか、それの行きつくところは結局、自力更生というか、自分の生活を自分でやれるという人間的能力を回復していくための相互教育と、自己教育の運動ということになります。

そういう動き、人のうねりをつくり出していくために活字だけではなく、視聴覚すべてにわたる雑誌にしていきたい。これまでぼくら自身経験のないところで、形だけ変えてみても旧態依然の中身を語ってしまうということになりかねない気もするんですが。

他方で媒体を拡張するというのは、それ自体、大事なことです。創刊号には喜納昌吉の「80年代」という新曲のソノシートがつく。二月にはいろいろクロスオーバーしての「発刊記念コンサート」を打ちます。あるいはまた、農業特集をやれば農業・食糧の連続講座をもってみるとか、都市解体計画が載ったら、水や住宅についてのシンポをもつとか、そういうやり方で売りたい。

もうひとつ、ぼくらの雑誌の特徴は、世代間の継承ということが柱になっていることです。編集委員は二十代から五十代まで分散していますが、若いメンバーがむしろ主力です。中に十六頁の「九〇年代」という欄があるんですが、これは、だいたい五五年生まれが作っていて、高校生が書いているところがある。このへんに非常に期待しているんで、名古屋の高校生グループが百部ひきうけてくれたりしています。本当は中学生まで狙いたい。一方で、八十四歳のご老人の聞き書きが載り、他方で常設欄には毛利子来の「新・児やらい」とか、あるいは斎藤次郎の「子ども語翻訳入門」とか、ごく若い世代とのコミュニケーションが追求されている、そこに少し違う流れができてくるんじゃないかと思ってるわけです。

いいだ　今ぼくの住んでいる藤沢の市政のスローガンが「緑と太陽と潮風のふるさと」というんです。三十万足らずの小さな市だけど、そういうところでもそれらがなくなっているという渇望の感じみたいなのがみんなあると思います。そこでひとつむずかしいのは、よく言われるように、緑がほしいけれども、落葉が落ちては困るから、落葉の落ちない木を植えてくれといったたぐいの住民の要求が非常に強いんだよね。潮風がもどってくるのはいいんだけれど、アルミ・サッシがさびては困るとか、だからそのへん、つまり、人々の生活価値規範がすっかり石油、原子力文明の高度成長に馴らされてしまっているというへんが、むずかしいなという感じをもつ。「魂を起こす旅」というのも、旅というのはディスカバー・ジャパンもあり、ジャル・パックもあるわけだから、それがただ宇宙版になってもしようがないわけで、どのへんのところで魂の中の歯止めを……？

津村　緑ということで言えば、それこそ緑シンボルを一番使ったのはヒトラーであるし……。

いいだ　デモクラシーの方は緑シンボルを使わないで、TVAみたいにどんどん緑を何かに変えちゃうというイメージだった面もあった

わけだよね。

津村　ハンガリーのグリーン・ラージングもあったし、ケネディのグリーン・リボリューションもあったし、だいたい緑というのは「赤」に対抗して使われてきたというところがあるんですね。そういう文脈で、七三年のオイル・ショックのあとに新日鉄までが緑の製鉄所と言いだして、緑シンボルがかなり吹き荒れたころがあるけれど、そういうことがシンボルとしてだけひとり歩きしてしまう、それこそ落葉は困るというのは、アスファルトだから困るのであって、本来ならば、土地の大切な栄養源なわけですよね。生活全体をどうつくり変えていくかのイメージがなくて、シンボルだけがひとり歩きしてしまうと奇怪なことになってしまう。

八〇年代には、「企業を守れ」ということで統合される部分と、そこから切り捨てられる農漁民や中小企業労働者や老人、こども、主婦層とが、次第にはっきり分裂して、しかも切り捨てられる部分がどんどん大きくなっていくと思うんです。その切り捨て部分が政府に別の回路で回収されるか、でなければ一種のファシズム運動になってしまうということをいかにして阻止するか。ぼくらの方から、企業に頼らずにどう生きていけるかを提起して、そこに企業内労働者も呼応していくという構想が立っていかないと、どうもまずい。生活をつくり変えることが、どう提起されるかが、同時にさし迫った政治課題でもあると思うんです。

モラリズムを中心にすえて

いいだ　真継さん、「使者」の第三号の特集が「水」ですよね。

真継　「水」を代表として文化、文明の記事かな。

いいだ　真継さんの場合、SF的なコスモロジーはともかくとして、地獄観だとか、あるいは菩提心みたいな、その裏側の罪障心でもいや、(笑)そういうものが深くあるように見受けてるんだが、そのへんも踏まえて「使者」がこの奈落の時代に何をめざしているか……。

真継　最初にお断わりしておきますけれど、ぼくらの雑誌は五人の編集同人が、明確な意思統一というものを作った上で雑誌を出したわけではないんですね。だから、今からぼくが言うことも「使者」の同人たちを代表してという立場ではない。あくまでも、ぼく個人の「使者」という雑誌に対する抱負であるということを了解していただきたいんです。でも、五人が集まった以上は、もちろん何らかの共通性なり友情というようなものがあるわけで、それをぼくなりにまとめてみたら、結局、単純な言葉で言ったら、同人のうちの四人の小説書きの特徴はモラリズムというものを文学の中心にすえているんじゃないかと思うんですね。小説というのがもともと何をどう書いてもいい、たいへん自由な世界なんだけど、四人はやはりいかに生きるかということが、いわば、自分の生き方と小説の内容の成長とが比例する、そういうことをやってきた人たちではないかなと思うんです。

いいだ　つまり、真継さんはモラリストなわけね。

真継　うん、なんでも単純な表現にすると誤解を招きやすいんだけど、いうならばヒューマニスティックに生きようとすればするほど、自分の中のエゴイズムというものを自覚せざるをえない。そうだから一般的な私小説の作家よりも、かえって行動することによって自分のエゴイズムと向き合う。野間宏さんでも井上光晴さんでも、むしろ共産主義者として生きてきて、かえって小説はまっ暗闇である、そういうような広がりとか深まりを……。

いいだ　今、名前の出た野間さん、井上さん、それに真継さんを加えると、モラリストということの深い意味なんだろうけれど、背徳者という感じが強いけどね。(笑)

真継　そうですね。よくぼくは親鸞のことを考えていますが、親鸞の末法観の根本というのは善と悪の概念が明確にできない、どう生きればいいと言え、どう生きれば悪いと言えるのか、そういう善悪の基準というものがわからなくなってしまうというのが親鸞の末法意識の特徴です。たしかにいいださんが昔からよく言ってらして、いくつか何度も読んだんだけれども、自分がよいと思ってしていることが結果として悪くなり、反対に悪いと思ってしていることがいい結果を生むとか、そういうことが現実の運動の中にどうしてもあるわけでしょう。「使者」は、そういうようなことの全体に向き合って、文学なら文学というものをする、という人たちの集まりだろうと思うんです。

でも、やはり、宇宙ということでは、仏教というのはたいへんありがたい思想だと思っている面がいくつかあるので、それをふたつばかり申しますと、まず、仏教というのは、徹底的なペシミズムなんですね。一切皆苦なんですね。そうだから、いかにわれわれががんばろうと、世の中というのはよくなりっこないという、そういう地獄の中での安心ということが仏教の安心、あるいは、自由という自覚の中にある。いま世界全体が危機的な状態であると思うんだけど、もともと人間存在というのはそうであると、そういう自覚というものが、反対から言えばキリスト教やマルクス主義的な福音論というものがぼくの中にないから、一種の安心ができていくということがひとつですね。

もうひとつは、宇宙ということで言えば、仏教というのは、とくに鈴木大拙から教わって、こんどの「使者」の三号に発表した、一月のWCCの大会で仏教についてしゃべった時もとくに強調してきたように、仏教には自然神秘主義という表現でまとまるんですけど、山川草木四海有仏性と言いますね。いわば人間だけが選ばれた高貴な存在ではなくて、いっさいの生命が平等に神秘的である。そうだから、いっさいの自然的存在すべてがわが師であると、無限に教えられる存在であるという自然全体に対する敬虔な態度があるわけで、それをとくに大拙が強調したんですけれども、それがきょうの話ではエコロジーという問題と関連して、仏教がわれわれに教えてくれることであろうと思うんですね。一切皆苦という絶望的な認識と同時に、いっさいがわが師であるという肯定、そういう否定面と肯定面の両方をもっている。私自身はなんらかの形で、ヨーロッパという日本とは全然別の文化の伝統を有する国々の人たちにもわかるような、合理的な仏教論をまとめてみると同時に、仏教的な生き方をなんとか実現してみたいと思っているわけです。

いいだ　八〇年代に人間のいのちを宇宙にひらいてみたら、真継さんに言わせれば、いっさいのものが仏性を有することになって、津村さんも先まわりされちゃった感じがあるんだけど……。

真継　もう少し簡単に説明しておきますと、華厳という思想がそうなんですね。一輪の野の花の中にも宇宙全体が含まれていて、そういう個別的な存在がお互いに照らし合っているという、そういう思想ですね。

いいだ　ぼくはいつも「リスは危機と鳴く」というある詩人の言葉の通りの一匹のリスであるわけなんだけれど、大寨に行った時、真継さんが「いいださん、あなたはいつもそうやって危機危機と言って、何回若い人たちをだましてきたんだ」と言ったことがあって……。「80年代」のスローガンにあるように、一方では「自分の暮しを自分の手でつかむ」、その意味ではちょっと脚下照顧的である。他方では、それからポンと「宇宙へとひらかれる」、コスモロジーになってしま

って、その先には一切の衆生は仏性ありということになってしまう。その足もとにコスモロジーの問のところで、われわれは歴史を生きていて、なんやかやガタガタやっている。

そうした歴史的現実の第三世界から、第三世界の現場主義に即して世界というものを見てみると、あるいはそこに働きかけてみると、そして働きかけられてみると、どういうことになるかということでの、すぐれたメディアとしての「世界から」が出された。武藤さんどうですか？

第三世界との連帯めざして

武藤　メディアが続々出てきて、それ自身がひとつの時代を示しているんじゃないかと思います。実は雑誌を出そうというつもりはあまりなかったんですね。「世界から」の発行主体は、アジア太平洋資料センターというもので、ぼくらの手作りの研究機関ですが、このセンターを七年間やってきたわけですね。その中でわれわれは、アジアの民衆運動の方に情報のネットワークを広げていった。そして、その結果、出さざるをえなくなった。つまり、水際から外に広がったネットワークを日本の人民的な運動につなげていく手段を新しくつくらざるをえなくなった。このいわば強制力みたいなものがあるわけですね。ですから、最初は資料集みたいなものを年に何回か出していこうというつもりだったんですが、それが雑誌のかっこうをとるようになったわけです。

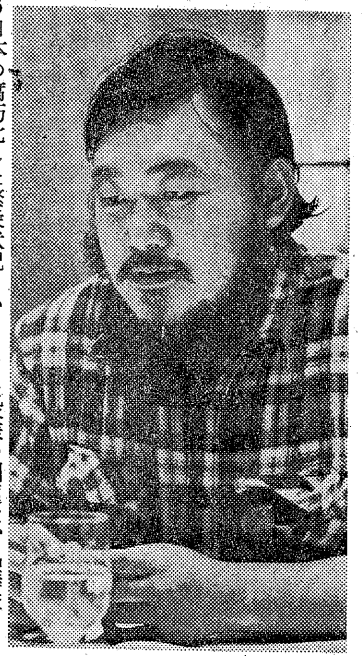
たとえば、東南アジアでも韓国でも、そこを、観光で歩くんでなくて、解放という問題意識をもって歩いてみる場合に、日本の現実、日本の常識というもの、左翼の中の常識もそうだけれでも、それとアジアの現実のあいだにある、ほとんど絶望的なぐらいのギャップにぶちあたる。「世界から」の二号でもとりあげたんですが、医療を近代医療の手から自分たち自身の手に取り返していく、自分の体を自分で自力更生的に直していくという、労働者の運動があって、その中の労働者の活動家のひとりが昨春フィリピンに入った。そして、ミンダナオの農村で鍼のトレーニングをやったわけです。彼は帰ってきて方々の報告集会に呼ばれて、ミンダナオ農民の生活と闘いについて話をするわけだけど、そのうち報告集会をやること自身にものすごく苛立ちを感じ始める。あまりにも大きいギャップで、伝えようがないというわけですね。たとえば農民の生活で言えば、一日三ペソとか六ペソとかいうものですよね。一回百円ぐらいなものです。それだけ稼ぐのがやっとなわけですから、人びとは圧倒的に栄養不良なわけです。たたかいというものがそういう現状のさなかから組織されてゆく。そこで出てくる考え方は外から工場を入れてきて近代化するとか工業化するとかということとは、まったくなじまない別のしかたで自分たちが生活をつくっていく、つまり津村さんの言う生活のパターン自身を生きていくために自分たちでつくり出し、守っていく。それをやらないかぎりは死ぬか追い払われてスラムへ行くしかないという現実があるわけです。その中で日本というのはそれと無関係じゃなくて、韓国でもどこでもそうですけど、日本の資本が乗り込んで行って上から近代化する。その過程で農民をふみつぶす。だからギャップの向うは無関係な現実じゃない。ところが、そこでのたたかい、そこに形成される世界というものと日本の中につくられてきているものとの間に共通の言葉がない。このギャップに言葉が出なくなる。ところが、そういうギャップというものが、実はたまたま日本とフィリピンの間だけにあるというものでなくて、今日の世界が、実はそういう具合にできているということです。

ところが、その問題を抜きにして、日本の国内でいろんな運動が行なわれる。そして日本の運動は、もちろん津村さんのやっておられることも含めて、日本の現実の中にしっかりした根拠があると思うのです。しかし、そのことが日本の自足性という了解の中にとじこめられていては、これはどうしようもない。日本の現状と第三世界の現状とのギャップを乗り越えてゆくという方向を持たないかぎり、日本の運動はやはり普遍的解放というものにはつながらない。もちろんその先はどうなるかということについては軽々にバラ色の未来は描けない。私は真継さんの言う福音論者かもしれないけれど、いくら福音論者であっても、それほど楽観的には見ることができないですね。先は十分には見えないけれど、にもかかわらず、解放闘争というものが実際問題として革命なしには生きてゆけないところから起こってくる。実際問題として、革命という言葉自体が日本では浮いてしまうわけです。新宿の駅頭で革命について演説したって誰も聞かないしね。けれど世界全体を見た場合には、革命ということが生活の必要になっていて、革命しなくては生きていけないという現実が圧倒的多数の人民の間にあって、しかもそれがひとつの世界として編成されているわけだから。

イランで革命が起これば、すぐに日本に響く。その意味では世界はひとつみたいなことは常識化している。しかし、それは資源問題というふうにしかつかまえられない。日本の資源、エネルギーをどうするかという角度に流されてしまう。しかし、まずなによりもイランの何千万もの人民大衆が、立ち上がらざるをえないという人間的、階級的現実がある。これが基本的なわけですね。それが資源、エネルギー問題という日本にも響くような問題をつくり出す。何よりもこれは人間的な現実だと思うんです。一般的に言えば、多国籍企業ができてくるような資本の世界化の段階、つまり世界市場の完成状況のもとで、世界がひとつに結びつけられてきている。しかしこの同一の過程が日本のような、いわゆる先進国の人民と、第三世界の人民とをひき裂く、分裂させる。この同時進行的な過程が非常に速い速度で進行した。

日本の場合には、その上に更に戦後日本国家固有の一国主義的な幻想、資源その他を外国に依存していることがこれだけ言われながら、実は日本国家内意識は、日本が自足し、完結しているという幻想の体系になっている。それを全部そのままにしておいて、日本の人民が日本社会を根本的に変えるということは、私の考えでは不可能だ。さっきの鍼をやっている労働者の言葉を借りれば、日本に帰ってきて、カルチュラル・ショックを受ける。話してもしようがない、日本人が全部、生活スタイルを含めての帝国主義者であると見えるわけですね。しかし、翻って考えてみると、そういう本人も例外ではないわけだ。そういう状況にあるわけだから、そこを言葉がないと言ってしまったらどうしようもないわけで、少しずつそこを打開していくしかない。それを打開するささやかな流れを外から内へ向かってつくろうということで「世界から」という名前をつけたわけです。山川暁夫さんの命名です。そして、目標として第三世界と日本の民衆の「連帯」ということを、困難をあえて承知で掲げた。連帯はすんなりできるとはとうてい思えませんが、しかし、そういう目標を立てずには何事も始まらないという主義なわけです。

いいだ　真継さんが連載している「華厳」という長編小説を愛読しているんだけど、あれを読むと、延々として修羅の巷だよね。真継さんはよほどサディストかマゾヒストか……。浄土が見えるとすれば修羅の巷の中で見えるんだろうから、今、武藤さんが言われた第三世界の状況と、革命すらも一種のぜいたくの形になっているような、こうい



う日本の腐朽化した繁栄状況というような段差の問題は、「華厳」の世界――あの戦国下剋上の世界にもあるのだろうと思いますね。津村さんが最初に出された問題というのは、一九三〇年代のアンドレ・ブルトンの言葉で置き換えて言えば、世界の変革と生活の変革の統一という夢なんだろうと思うけど、「クライシス」も第一号特集が「人類史の現在」、第二号が「生き方・死に方を変える」、数万年の尺度の変革と、今、この日常点の変革を同時に出さなければならない危機状況なんだが、(笑)その場合、いまの武藤さんの出した問題にひっかけて言うと、第三世界では世界の変革と生活の変革が無限に近いというか、直接性をもって合体できるような、そういう「奇跡」が起きるような場だと思うんです。それを日本に段差を含んだ連帯として戻す場合に、「世界から」も日本語のメディアだから日本人を読者にして想定しているわけだけど、北側の「先進国」の仲間入りしている日本のような場合には、そこが直接的な合一性になかなかならないから、そのへんの媒介というか、そのへんの工夫というのは、さっきの労働運動のベテランたちを、アジア、第三世界との国際連帯ということで協力してメディアをつくっていくという場合にも、いろいろな貴重な諸経験が出ていると思うんだけど、そのへんはどうですか。

武藤　まだまだ序の口ですね。実際に空白のところに何かをやるのじゃないわけれ。すでに、労働運動なら労働運動の文化があるわけです。戦後の労働運動というのは、アジアの人民と連帯するということの意味がすわっていないわけです。

いいだ　ある意味じゃ、明治以来の文化自体がアジアの人民を踏み台にして形成されてきていると言えるからね。

武藤　そう。その上に、戦後的な特徴がある。戦前の場合には日本帝国主義が直にアジア民衆を踏みつけたわけですね、軍靴で。だから対決は戦後より直接的です。そこでは敵か味方かどっちかを選択しなければいけないわけで、思想的には日本共産党が選択軸だった。それを選べば、つかまって殺されるかもしれない。ところが戦後国家の場合は日本帝国のアジア支配にはひとつクッションが入っていて、一見手荒なことをしていないかの如き幻想、一国主義的な幻想が生じる余地が生まれた。つまり、アジア民衆との戦争はアメリカがやって、日本はそのあとに経済的に出て行くということだから。この構造の中に国内の政治・イデオロギー支配がはめこまれているわけだから、ヨーロッパやアメリカやオーストラリアの労働運動のもっているほどの国際的な行動半径を、日本の労働運動がもてない。むしろ、左派ほどもたない。右派は資本が出てくるのに従って出てきますから、右派ほど行動半径という点では国際的です。それが条件としてのむずかしさですね。

積極的な経験で言うと、交流ということの大切さですね。相手の顔も見ないで連帯することはできないわけです。六〇年代のベトナム反戦闘争は歴史的意義のある闘争だったと思うんですけれど、やはりそれはある理念――反帝国主義という理念を媒介にして、そこからベトナム人民を逆に捉える。だからベトナムが同様に理念化されるというところを抜けることはできなかった。交流から共同闘争へという今ぼくらが立てている筋道――六〇年代の連帯の抽象性を乗り越えようという意図がある。交流を通じて生身の人間としてのキズナをつくり上げる意味は非常に大きいだろう。ただ、すでにそこに問題が出ている。実際に現場を見てきた人が、日本に帰って来ると、逆に孤立してしまう。それで結局、おまえも行って見てこなければわからない、口で言ったって説明できないということになる。運動として、日本国内の闘いの根拠と外の世界の解放運動の根拠とが、何かを共有し合えるようなところにどういくかというのが課題ですね。解けてないです、まだ。

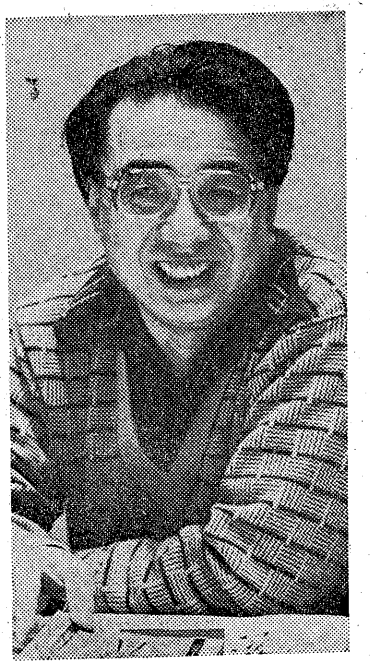
真の「連帯」とは何か

いいだ　津村式食い方――飲み方かな(笑)――を、ぼく流に要約すれば、焼酎はアジアに通底する、ということになるが、そこは「トリスを飲んでハワイに行こう」というCMとスレスレのきわどいところがある。そこで津村さんとしては、今、武藤さんが言った問題を、足もとのコミューン、市民社会がらみのコミューンのところで、日常の生活を変えるということから宇宙へ通じていこう、という立場から、どういうふうに考えていますか。

津村　たとえば、公害の問題にしても、前から言いつくされていることではあるけれど、第三世界の側から言えば、公害がイヤだなんてぜいたくだと、われわれは公害を欲するという……。

武藤　それは間違いなんだよ。それはアブデル・マレクが京都にやって来て、第三世界の代表という顔をして喋ったところから、たくさんの人が飛びついたテーゼなんだが、実はマレクのは第三世界の政府テクノクラートとエリートとの代表的見解にすぎないんだ。第三世界はマレク式の言い方を通じて、日本のメディアで代弁をさせられてしまったんだ。これはどえらい間違いのもとだよ。公害なんかかまわずに工業化をしたいというのは第三世界の政府とテクノクラートだ。その政府というのはすでに世界銀行の借款から多国籍企業からのあがりまでふくめて、世界資本の中に吸いとられていて、いったい誰を代表しているのかわからない状況になっているんだ。だから、第三世界からすれば、と言う時、第三世界の誰からか、ということをはっきりさせてほしいね。そこは階級概念をもう一回はっきりさせてほしいわけね。第三世界とは第三世界の人民大衆のことなんだ。それは農民と都市貧民と労働者ですよ。この尨大な人民大衆は、今の輸出志向工業化とまったく利害の対立する大衆なんだ。

いいだ　そのマージナル化した第三世界の人民大衆と、政府とか官僚、ブルジョワジーというのは、もちろん歴史の未来の選択が異なってくるんだろうけれど、さしあたり、アブデル・マレクが言っている

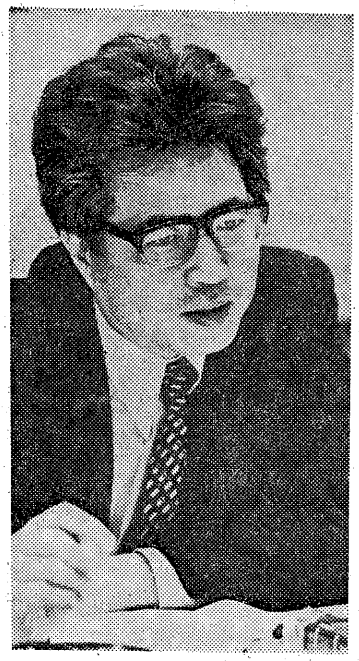


意味でということに限定して話をすすめると……。

津村　つまり、それと同じレベルの言い方で第三世界が現に飢えていると、だから、ほかのことはともかく食糧援助してやらなくちゃいけないという論法が一方で成り立っているわけでしょ。その場合に、極端なことを言えば石油たんぱくはインド人のためにやっているんだというふうな議論が一方にあって、それは、ぼくは今、武藤さんが言われたことにまったく賛成なんで、公害でいいから、いったん豊かになるべきだということは、これは成り立たないわけです。第三世界人民がどう自立していくかという内部での闘争も含めて自前で食える、闘いによって自前で食える状態をつくり上げていくということを見ないで、国際関係なるものを設定してしまうと、そこに陥っちゃうと思うんですね。右も左も。

だから、その場合に現に飢えている第三世界の人々に向かっては日本の工業力をもって何でもしてあげるべきではないかという論法に対して、ぼくらが言うべきことというのは、まずぼくら自身がどういう食い方をするのか、つまり現に世界の輸出される穀物の一二%を日本が独占しているという状況の中で、そのことを通じて一方に飢えがつくり出されて、一方に過剰がつくり出されている中で、ぼくらがどういう食い方をするのかというところを変えていかないと、連帯の前提になる立場が見えてこない。連帯したいという善意なり、政治スローガンなりを媒介にしてでなくて、いわばお互い生活する者として付き合っていけるというためには、つまり、彼らの抑圧の上にわれわれの繁栄が現に成り立っているということですね。単に道徳的に苦しむんじゃなくて、実際にそういうことをしないですむ生活スタイルをつくっていけるのかが前提になる。もちろん具体的に顔を見るというような武藤さんの言われたことはすごく大事なことで、逆に、それによって自分の生活が見えてくるという、相互の問題もあると思うんです。

もうひとつは、第三世界では、社会を変えることと人生を変えることが一致しているけれども、日本ではそうはいかないというふうに言われたけれども、ぼくは、そこのところは、これまでの日本の変革の思想がそういう抽象性をもっていたんじゃないかという気がするんです。たとえば、戦後の革新と保守の分かれ目というのは、乱暴に言っちゃえば安保是か非かというところにあった。ところが安保というのは、日米安保条約なわけですよね。その時の発想というのはまさに、一国主義的な幻想の上に立っている。しかも、安保の中身というのはまったく抽象化された軍事条約としてしか、捉えきれなかった面がある。現実には、安保がつくられていく過程でMSA小麦による日本再占領があって、それが現にぼくらの食生活をメチャクチャに破壊していく。それから六〇年安保というのは石油による日本の再占領だったわけで、そのへんのところが、少なくともこれまでの革新勢力の大勢としては少しもイメージされていなかった。それは現実には安保体制のもとで見かけは豊かになり便利になることを通じて生活が破壊され



ていったわけだけども、そのことの、生活の現場に実は安保の問題の焦点があるんだということは、今になって始まったことじゃなくて、ずっとそうだったと思うんですね。

だから、そのことがお互いにはっきりしてきたから、自民党の安全保障調査会も食糧安保を言うし、大平も総合安保を言う。そして生活全体をいわば総動員化してくる、という形で安保を捉えてくる。そこのところが、もう一度生活そのものの現場に政治の焦点があるということを組み立てなおさないと、どうしようもないんじゃないか。そのことが、一国的と言われたところをとっぱらう前提なんじゃないかという気がするわけです。

いいだ　ここで真継さんに今までの議論の総括でもいいし、その中でするどく感じられたことを。ぼくはひとつだけ注文を出せば、「使者」という題は神からのメッセンジャーというかな、神のメッセージをとりつぐ者という感じがするわけね。ぼくはマルクス主義者として当然無神論者だから――仏教も無神論でしょう。ここでは神ということを抜きにして言うと、未来からのメッセージをいわば予言するもの、語るもの、そういうイメージがあるんだけど、そういう予言者として背徳者的モラリストは何を語ろうとしているのか……。

真継　ぼくは先ほどからの、特に津村さんの連帯ということについての模索の話はたいへん共感するんですけれど、やはり「80年代」の編集委員の中では新島淳良さんの人生そのものが、世直しですか、そういうことに挺身されたひとりの人の典型的な人生コースを歩んでいらっしゃるんではないかなと、かねがね考えているんです。というのは、まず大きく共産主義運動からヤマギシズムという共同体、小さなほんの千数百人の共同体の運動に入り、そういう小集団の中での自由と平等とが同時実現されているような共同体運動の実験を志されて、そして、それにも幻滅の体験があって、今は、そのふたりだけの共同ですな、共同ということを非常に誠実に模索しておられる。それゆえに、かえって男女ふたりの共同体の実験を今からおやりになる、あれにも、いかにも新島さんらしいするどい主張がたくさんあるんだけれども、愛のない結婚生活はありえないと、そういうふうに主張されて、前の奥さんと別れられて、今の奥さんと結婚して、そして、ふたりだけの愛というものが実現できるかどうかというのは、新島さんのまだまだ今後の問題なんですよね。

共産主義運動というものは、いわば普遍的な原理というものがあるから、武藤さんの言い方を借りれば、地球上の五十億弱の人間がひとりひとり顔を合わせるということはありえないので、やはり普遍的な原理の上での連帯ということが信じられている。その信仰が崩壊して、日本人の中の小さな千数百名の中でのどんな理想的なコミューンがありうるかという実験をされたんですけれども、山岸会の場合は資本主義体制の中の共産主義社会という根本的な矛盾があるわけで、どうしても鶏肉を売って共同体が食っていかなきゃならん。そうすると注文

が多ければ一日十数時間みんなが猛烈な労働をしてようやく共同体が支えられる。そうすると、文化的な生き方は新島さんの主張によれば山岸会ではできなくなっているわけです。山岸会の最初の理想としては、まだ新島さんが入っていた頃に、ぼくがある新聞の取材で会った時に、働かんでも一生ブラブラできるという、非常に理想的なスローガンを彼自身が言ったんです。現実にはまったく資本主義的な労働による自己疎外の共同体でしかなくなっちゃったんですね。だから脱退せざるをえない。そして、いうなれば、ふたりという人間関係のまったくの核からやっていらっしゃるというところになにか普遍的原理の崩壊にもかかわらず、人間は関係存在であるから、なんらかの理想的な共同体というものを追求せざるをえない、そういう矛盾を新島さんの人生全体が体現しているという感じがしてしようがないですよ。そうだからこそ「80年代」に、今から何が見えてくるのかということをハラハラしながら待っているという感じがあるわけです。

ところで、われわれの方は率直に申しますれば、小学館という日本で三番目に大きな出版社、毎年莫大な収益をあげているブルジョワ出版社に乗っかってやっているという間違いのない前提がある。その上で、たとえば井上さんは文学伝習館をやり、野間さんは狭山だとか公害だとかをやるとか、小田さんは日韓だとか、代々木ゼミナールの教師をしながら、高校生をどうするか、高校生の解放というようなことをやっているけれども、そういう各編集同人の実践というものに関しての連帯というものはいっさいない。結局、現代のさまざまな問題と直面している人たちの模索を、全部というか、ぼくらの雑誌の場でとにかく出していこうと、いわば、どこまで問題というものを深く広く認識できるか、そういうことを出していこうということではないかなと、私は個人的には考えます。

必要が生む第三世界革命

いいだ　「使者」第三号の「私の記録」玉川与志子さんの応募作なんかは、事実の壮絶さと表現の壮絶さと両方かねそなわっていると思うんだけど、進行性筋萎縮性側索硬化症である夫の肛門からの最後のシグナルが途だえるところまで書いてるんで、あそこまでいっちゃうと、ディスコミュニケーションの中で、どう連帯をつくっていくかという主題になるが、たった二人だけの最後のコミューンの連帯で実にたいへんな主題がこもっていると思ったな。新島さんのふたりだけという最後のコミューン、子供が生まれりゃ、そこからまたほぐれてくるところもあるんだろうけど、(笑)その話を聞いて、多少冗談を言って場を軽くしますと、ぼくの人生観察では既成のマルクス主義からコミューン思想をとりもどして離脱した時に、多くの場合、起こるのは離婚ですね。新島さんの場合は、今度逆にヤマギシズムの幻滅の総括過程を通して、それがふたりの愛をはぐくむ総括になってるんで、それはそれでたいへんユニークなところがあると思うんだけど。

社会主義論は、これまでの話の中で実際にはその核心がもう出始めているわけで、人類史が資本と労働という形で大分裂するだけじゃなくて、中心における資本と労働の分裂を基軸にしながら、世界大で地球的規模で中心と周辺という形に大分裂をする。戦後の現在ではその大分裂の現代的発展が多国籍企業による生産の国際化、世界開発等、極限にまで達していることから、類的存在としての人間の本来の連帯が求められているわけで、本来社会主義とかコミューンというのは、そういう生き延びるためにも必要不可欠な、必至の連帯の再建だったと思うんです。だけど、言うまでもなく今日の現実の社会主義というのはまったくそうでない。そのへんのところを論じたいと思うんです。

ここに「第三文明」を持ってきてるんだけど、「マルクスを葬送する」という座談会があって、マルクス主義というものが、いかに悪いものであるかということが四つにタイプ分けされていて、まず「延命型」というのがありまして、それは、代表はいいだもも氏なわけです。(笑)それから「救済型」「護教型」とあって、第四番目に「思考停止型」というひどいのがあって、この代表が武藤一羊氏。(笑)そして四つのタイプのいずれもが七〇年代末期に露呈しつくしたマルクス主義の否定的現実から引き出すべき結論を回避している、と。現実の社会主義の否定的現実というのは四つのタイプの誰しもが認めているわけだけども、この座談会のキメつけでは、そのこと自体マルクスの「原罪」からきてるんだという立てかたがあって、津村さんはその座談会で人民戦争的な防衛を行なっていて、「思考停止型といわれると、ぼくもそのへんにはいっていて、(笑)半分ぐらい延命型にはいっていて」、(爆笑)ちょうどこの場で、ぼくと武藤さんの間のところへはいっているのと同じ感じで三角形をつくっているわけなんだけど。ぼくは、この座談会を論じようというのではないけれど、ひとことだけイヤミを言っとくと、葬送するというのはおとむらいだから、本来は再生のためですね。死者の再生のためでもあり、送る生者がもう一度共同体なり市民社会なりにもどっていくための再生の儀礼なんで、そういうことがわからずにおとむらいをやってても、おとむらいとしての心がこもっていないなという感じがある。それはそれとして、そこで出されているような、アクチュアルに言うと中越戦争後の現在の社会主義がはらんでおる問題性について、武藤さんからやっていただけますか。何が問題か、を。

武藤　ロシア革命を論じ始めるとたいへんなのでワキにのけておくと、世界におけるその後の革命は第三世界革命なんですね、本質的に。なぜかといえば、革命というのは起こさなきゃ生きていけないから起こすわけだよね。最も単純な出発点は、人民大衆が革命を必要としているから革命を起こす。そして今回の世界の現実は第三世界の人民大衆の置かれた状況からすれば、変えるしかない、革命しかないということになる。それを押しとどめることはできない。マルクス主義がダメならばイスラムでやるという。

いいだ　必要は発明の母ということで言うなら、必要は革命の母ということだな。

武藤　その明白なことをちゃんと見る必要がある。これまで失敗したから、時期尚早な革命はやらない方がいいんじゃないかと言ってみたところで、言うことは自由ですけども、そうはいかないわけですね。マルクス主義理論にしろ、イスラムや仏教やキリスト教の宗教理論にしろ、この批判に直面しうるかどうかが試金石だと思うんです。

いいだ　やむにやまれぬコミューン魂というやつだな。(笑)

武藤　そして、革命を必要としている世界的現実に直面するためには、コミューン＝イズムとしての普遍的な解放という目標がないと直面はできない。もうひとつ、それはさまざまの形をとるわけだが、いずれにしてもロシア革命以来の経験を総括しなければ、どんなうまいことを言っても結局、空手形に終わる。現代空想的社会主義というのは、現実のものがダメだからこっちへどうぞということだ。オレがやればうまくいくという話になる。一番典型的なのは、前に「朝日ジャーナル」のやった社会主義論争ですね。実際問題として、必要によって起こった革命がうまくいかなかったら、そこを切開して、どこでつまずいて、どこで乗り越えるべきだったかということを出さなけりゃいけない。

その観点から問題を出してみますと、ひとつはロシア革命以降の革命が、第三世界革命だったということの意味に対して二つの解釈があって、ひとつは後進国革命だから、ある程度以上には行けないという議論がある。もうひとつは、後進国であるがゆえに未来をはらんでいるという意見がある。後進国という意味は、もちろん資本主義はヨーロッパから起こったわけで、ヨーロッパ的なものを先進的と考える。そして社会主義をこの先進性の延長上に構想する。この意見は古典的な意見としてあるだけあって、今でも非常に根強いですね。カンボジアみたいな後進国だからやり方も後進的だ。だから、アメリカや日本で革命が起これば、本当にすばらしい社会主義ができるんじゃないかとなる。

後進国であるからすばらしいという議論は、一定の条件の中で成り立ったと思うのです。

毛沢東が極限まで追求したと思う。中国は一窮二白であるから、すべての資本主義的な汚染をまぬがれている。そこからすばらしい社会主義ができて共産主義に行くんだというわけでしょ。毛沢東はそれでやってみた。毛沢東がどこまで行って必然的につまずいたのか、あるいは、必然的につまずいたんじゃなくて、四人組が悪かった、あるいは走資派が強すぎたのか、そういうところがまだ解明されずにあると思います。

インドシナの事態ですが、カンボジア革命は農民戦争である間はほんものの大衆的な農民戦争であったと思うのです。プノンペンを解放して勝ったとたん、そこにもうおかしくなる要素があって、そしてついにすさまじい全体主義的共同組合国家みたいなものになって、解放の大義を裏切ったと思う。しかし、そこにあったものは、従属国の完全自立の思想ですね。つまり、従属国は帝国主義とのキズナを全部断ち切らねば必ずそれにからめとられてしまうという考え方だったと思う。サミール・アミンの初期の考え方にちかい。ところがそれは失敗した。カンボジアの経験は後進国革命といわれるものの完全無欠性あるいは純粋自立性のテーゼを極限のところで疑問に附したと思うんです。そこで大きい問題は都市の問題で、プノンペン二百万の強制退去というものがつくり出した社会的な矛盾というものはとうてい正常な矛盾解決の手段では手に負えるものじゃなかっただろう。この客観的社会的矛盾をイデオロギー的に強引に抹殺しようとする。それが自己回転を始めてああいう結果になっていったと思います。ですからカンボジアの悲劇といわれるものは、主観的にただ恣意的に起こったのではない。そこには客観的な根拠がある。タイだって、タイの農村ゲリラは一番進んでいて、タイの農村解放区の話を聞くと、「世界から」の二号に出しましたけれど、カンボジアの農村の解放区時代の組織のしかたとそんなに違わない。つまり自給自足で貨幣というのはほとんどない。ところが、いざ勝利してバンコク五百万をどうするか。そこに国際資本が全部入りこんでいて、そしてタイの近代化の中枢になっている。これをどうするかという問題は、やはりタイの革命でもぶつかると思う。

そこから問題は、いわゆる先進国の革命と後進国の革命とがひとつ先のゴールにおいて統一されていくような、そういう国際革命というものを構想するしかないということではないか。アジア、アフリカが全部団結する形の国際革命ではなくて、先進国と第三世界との間に共通綱領が共有されるようなことは試みられたことはない。現実の発展もそういうふうにはならなかった。先進国革命論が虚妄であるのは、革命は必要によって起こるということから直接に出てくる。中心の周辺にたいする搾取構造が安泰に続いているかぎりそうだ。世界的な危

機の中で、それが初めてぶちこわされてくるわけです。そこからのひとつの教訓は、いずれにしても、世界が必要によって変革されざるをえないとすれば、その変革の内容は近代世界における人類の大分裂を止揚していくという中身をもたないかぎり、世界的解放にはなりえないですね。たとえば今の国際分業をそのままにして、世界共産主義になっちゃったなんていうのはありえない。世界大における富の再分配は避けがたい。その場合に日本には生産力があるから、この生産力をアジアに向かって解放しろと単純に言えるのか。そうではないと思います。そうではないという根拠は津村さんなんかが言っていることとつながると思う。つまり、中心部における生産力の質、そこから規定される生産関係と社会的関係というもの自身が、ぼくの言葉で言えば、すでに前方の壁にぶつかっている。原子力の問題がいちばん先鋭に出てきているけれど、エコロジーの問題に出てくるすべての問題にぶつかっている。これは再編成をせざるをえない。内的根拠をもってせざるをえない。そのためのたたかいや運動というのも、現に起こっている。そのことと、しかし、第三世界の人民が革命をせざるをえなくて起ち上がっている問題性とは結びついていない。エコロジー運動がおそらく第三世界問題と一番結びついていないという非常に奇妙な現象がある。ぼくに言わせれば、まさにそこの問題のところで革命の共通な道筋というものが立てられるべきではないか。

コミューン型国家の問題

いいだ　たとえば真継さんが一端を担われている日韓闘争の八〇年代におけるゆくえ――朴大統領が射殺されるというハプニングならざるパブニングが起きたあとのゆくえというのを考えてみても、武藤さんが言われた先進国革命と後進国革命とのありうべき合流というのが、玄界灘を隔てて現実化しなければ、現在の米・日・韓の支配体制側の癒着体制そのものから言っても、南北の革命的統一の展望はなかなかむずかしいだろうという問題がたしかにある。北のいわゆる「社会主義」である金日成体制と南の「朴なき朴体制」がいったいどういう形をとおして、鄭敬謨さんがよく言う世界史の大分裂のいわば十字架にかけられた象徴としての三十八度線を越えて南北が統一されていくのか、ということを考えてみると、これまでのような北と南のそれぞれの国家が話し合うという形での国家レベルでの統一という域を乗り越えざるをえないんじゃないかという感じをもつわけです。韓国問題というのを一つとってみても、今ロシア革命以後の第三世界革命の全面的な総括に立脚して先へ進む必要があるといった問題も端的に出ざるをえない。武藤さんがふれたプノンペンの問題――サイゴンの問題があり、タイのバンコクの問題があり、現在でも、イラン革命のただ中のテヘランの問題というのはパーレビ体制の上からの「白色革命」の中で、人口は百五十万から今の四百五十万へ増えたわけだから、三倍に都市貧民が集積している。多国籍企業と結託した近代化が農村を奇型的に解体しながら、こういうマージナルな大衆を肥大都市に吸い寄せてきたわけですね。こうした第三世界のマージナルな大衆の問題は、農村に依拠した人民戦争がやがてぶつからざるをえない問題としてある。いまの第三世界問題は、メジャーはじめ多国籍企業なり、いわゆる統合開発帝国主義なりとのグローバルな関係性において、その問題をとらえないととらえきれなくなっているのが現状なんですね。

そこでぼくはいつも一種のジレンマを感じるんだけど、一面から言うと自力更生路線をとる場合、津村さんのコミューンにしたって山岸会的な擬似コミューンではないものをめざしているわけなんですけれ

ど――国家による自力更生というのは自己矛盾で、場合によっては収容所コミューンになる、しかし他方においては自力更生的なコミューン志向がこういう多国籍企業が支配する世界市場の現実的な関係というものを前提にして考えてみた場合、世界市場→世界革命という一挙反転にはならないから、過渡的にはたして第三世界が国家的に自己を凝集しないで、ある意味ではカンボジアがやったような世界市場から自己を遮断する一種の鎖国状態、そういうものを抜きにして、どういうふうにしてありうるのかということです。グローバルな先進国革命と後進国革命の一挙同時的な世界からの出会いというものを想定すれば、その問題は最初からないわけだけど、それは出口の目標であってそこへと向かう入口の代用にはならない。人民の主体的解放はおそらく長期に渡る過程を通るのだろうが、長期に渡る過程の中での自力更生というのは第三世界の地に呪われた者にとって、いわばコミューン型の国家というものへの自己凝集力なしに、はたしてありうるんだろうかということを、津村さんの提起に対してひとつ思うわけね。

われわれ「先進国」はもう管理国家というものの桎梏に、それはどんなに柔構造であっても、柔構造であればあるほどじわじわとした桎梏にほとほといや気がさしているからね、そりゃもう国家なんていうものはどめんだという形で、足もとのコミューンにしろ、世界なり宇宙なりにひらくなりにしろ、そこのところはポーンととびこえたところで、人民自体が権力になるという言い方で自己表現をするわけだけど、現実に世界的近代化路線に抗して、自力更生ということを第三世界の局部が始めた場合には、そこのコミューン型国家論というのは、いったいどうなるんだろうというのがひとつの問題意識。ソ連邦社会主義の変質以来の最大の総括主題である「人民の綱領」としての共産主義的基準から逆に過渡期社会なり過渡期国家なりをふりかえって、いかに自己規定するのか、という問題に通ずるアクチュアリティを第三世界の自力更生路線はもたざるをえない。

もうひとつは、それと関係があるんだけれど、多国籍企業を代表する資本の力能が「革命」や「社会主義」をも回収しながら第三世界を同化していくなかで、一種の企業内分業としての資本の直接支配が第三世界をとり込んでくるわけで、『資本論』の第一巻が、そのままあてはまるような面が出てくる。西ドイツの新マルクス主義派なんかは「世界資本」の原理的貫徹としてみてくるくらいでしてね。別な照明を当てると、そこに介在して部品の加工貿易にあたる「中進国」の問題も同じ根拠から出てくる。その中でさっき言ったプノンペンとかサイゴンとかバンコクとかテヘランみたいな第三世界都市の異常肥大化現象なんかも出てくる。

現在の多国籍企業のグローバルな企業内分業というのは、さらにその第三世界の同化的接合の域をも越えて、社会主義国との接合関係をもつに至っているわけなんだけれど、そうするといわゆる社会主義国は「堕落した労働者国家」と規定するにせよ、あるいは「国家主義的生産様式」と規定するにせよ、それはそれなりの若干資本主義と異なる特色をもった生産様式なり国家編成をしてると思うんだけれども、多国籍企業の企業内分業がそうしたいわゆる社会主義国なりに組織している社会的分業みたいなものを部分的にせよ、いわば内部化するわけでしょ。ますますそういうふうになっていった場合には、いわゆる国家主義的な社会主義体制なるものも、八〇年代にはこれまで予想もつかなかったような事態に、いろいろと直面するようになるだろうと思う。

そういうグローバルな企業内分業がこれだけ生産の国際化という形で腐朽化しながら進んでくると、それをただ反転すれば世界革命という

わけにもならないし、世界革命の物質的準備がすすんでいるんだというふうにだけにもとらえられないと思うから、いつか津村さんが問題にしたことがあるスティーブン・ハイマーの「グローバル・ヴィレッジ」という形でそこの反転を想定する主体の形成を想定するということになると、そこは逆に、国家をこえたコミューンのイメージこそが、多国籍企業が支配する現在の世界資本主義からの人民的解放には適合的であるという面も出てくるんでね。さっき言った第一の問題と第二の問題は若干の矛盾をはらんでいるものとして同時的に八〇年代に出てくる。武藤さんが言った社会的分業の現在の人類史的な分裂の克服ないしは揚棄なしには革命的解放というのはありえないというのは、その通りだけど、その現実の条件というものは、多国籍企業がそういう形で企業内分業の中に第三世界をも社会主義国をも、ある程度外側からにせよ部分的にせよ、自分の中にとりこんで内部化している実状の中で、それを変革する主体というものは止むに止まれぬ自分の解放をめざして起きてくると思うんだよね。そこで解放途上国ははたしてコミューン型国家として自己を凝集させずに、自力更生ができるのかという問題と、今度グローバルにはグローバル・ヴィレッジということで多国籍企業をある意味では逆に主体的に内部化して多元化してしまわなけりゃ解放にはいかないんじゃないかという感じと、両方がいっぺんに出てきている感じがするわけだ。

スウィージーの「革命後社会」論

いいだ　「クライシス」創刊号にポール・スウィージーが論文をくれて、そこでいわゆる社会主義というものについての理論的総括を彼なりにして、「革命後社会」という概念を提起したわけです。彼は今度日本に来ての、東大でやったわれわれの比較社会主義学会のシンポジウムでも、「社会主義論シンポジウム」という形でわれわれは案内を出したんだけど、それも厳密に「革命後社会」のシンポジウムにしてくれと。だから彼にとっては社会主義という概念はもうなくなっちゃったわけで、プロレタリア革命後になんらかの形に変質した社会があって、その変質した社会は、にもかかわらず資本主義に逆もどりしたわけではない。したがって新しいマルクス主義的カテゴリーとして「革命後社会」が必要だと言うんです。その論文をくれてから日本に来たわけで、当然われわれもある意味では何十年間いろいろなことを経験して、苦しんでもいるし、すれてもいる(笑)から「革命後社会」といったって、そんなことはわかりきったことで、いわば無内容な概念規定では困るんで、具体的な歴史的な中身は何なのだという概念規定を迫るから、スウィージーの方も日本に来ての講演がたび重なる中で、結局ソ連にみられるような革命後社会というのは「ステート・ソサイアティ」であると、「国家社会」であるという規定をうち出した。そこでは支配階級があるというふうに彼は論断をして、かつてのベトレーム―スウィージー論争の結着をそこでつけて、その支配階級とは「ステート・クラス」であると、「国家階級」であるという規定になったんで、その意味ではサミール・アミン、ベトレーム、スウィージーというのは、国家階級という新しい支配階級が革命後社会を編成しているという、いわばその限りでは共通了解に達してきていると思うんです。そこのところは「クライシス」でもずっとこれから追求していきたいと思います。

国家社会というのはそうはいっても生産手段の国有との関係ではどう規定できるのかとか、階級として再生産されなければ階級にならないわけだから、ヘリテッジの問題というのは具体的にどうなっている

んだということで、議論は少しずつ展開されていってるし、「クライシス」としてはそのへんはインドシナ、パレスチナ、イラン、ニカラグア、韓国などの人民的実践を系統的に総括して学ぶことはもちろんのこと、世界の社会主義論の理論的動向とにらみ合わせながら系統的に追求していきたいと思ってます。社会主義論だからどうしても国家論が重要な問題としてはいってくることになるわけで、国家論の問題というのは、これまでのマルクス主義においては必ずしも解かれている問題ではないわけで、『資本論』というのは隠示的にはカッコにくくられた国家論をはらんでいるのだという強引な言い方をすることもできなくはないけれど、しかし、『資本論』はあってもマルクスは初期の断片とボナパルティズム論をのぞいては国家論は残さなかったということもまた、平たく言って自明の事実なんでね。過渡期階級闘争と国家の問題ですね、プロ文革の挫折後に依然として残されている社会主義論の核心は。

津村　その国家論が問われてくるという場合の中身ですけれど、つまり、国家社会というのも何か変だけど、ぼくがしばしば引用してきたところでは、フーコーなんかの「過剰な権力」というか、権力が、マルクス流にいえば「市民社会」の中に浸透していって日常性総体が国家化していくという、そういう過程を考えていった場合に、むしろそれのひとつのモデルを与えていったのが社会主義だったというところもあるわけで……。

いいだ　そうだよね。だからそれはスウィージーにとっても否定的概念になったよね。

津村　その場合に、じゃあ、それはマルクスの本来の発想の中にあったことなのかどうか。非常に初期の言い方で、マルクスが「わが身と宇宙」というのに近い言い方をしている文面がいくつかあって、個体が個体のままで類的本質を実現するというような解放のイメージが一方であったわけです。それは国家という外側の普遍性に身柄を預けないということを意味しているんだけど、でも、現実の政治の問題としては、やはり国家権力奪取ということが中軸となってきたわけですよね。

いいだ　それは現実の政治闘争の問題としてだけではなくて、個体性が直接にいわば普遍性になるという初期マルクスのコミューン主義のガイストではあると思うんだ。それはさっき真継さんが言われたように普遍的原理が崩壊したあと、千名ぐらいの山岸会の鶏を飼っている、顔がひとりひとり識別できるようなフェイス・トゥ・フェイスのなかまでしか個体性即普遍性ということはスケール・メリットとしてはなかなかありえないでしょ。だから、そこのところの直接性だけでは解けない問題が、人類史的な大分裂を歴史的に止揚しようとする場合には出てくるんではないか、というのが社会主義論のもうひとつの問題だと思うんだ。

ついでに言うと、たとえばプルードンみたいな人も当然、近代社会において経済力が過剰になってきて剰余生産物が生ずるだけじゃなくて、社会力、本来人間の関係から生まれてくる力である社会力もプルードンなんか過剰で余剰になると考えているわけだ。そいつが疎外されると国家という形に結晶するわけだけど。近代で過剰になっているのは経済力だけじゃなくて社会力もそうだとすると、その社会力を国家のような疎外態でない形に、その余剰社会というものをもどすにはどうすればいいのかが問われているんだと思う。だから単に、これまでの政治革命主義ではダメだというだけでは、そのことの一面を照射しただけにとどまるんではないかというのが、ぼくの率直な印象なんだ。

自力更生と国家の関係

津村　さっきの自力更生と国家という問題ですけれど、自給自足というのはひとつの状態であり、システムだけれども、自力更生というのはむしろ、ひとつの方向性であり、また過程だと思うんです。自力更生というのは変な言葉で、悪い人が良くなるという感じだけど。

いいだ　ぼくはベトナムとカンボジアの関係ではポル・ポト支持なんだけどさ、それでもポル・ポト共産主義というのは、なんとなく更生施設的な共産主義のイメージで現実にはあるわけね。

津村　都市と農村の分裂を解決して農村コミューンをつくっていくみたいなことというのは、国家としてやったらたいへんなことになるということの、ひとつの典型的なあらわれという気がするんです。国家が自主管理を強制するみたいな変な形になった。自力更生の主体は、自立した諸個人の連合であって、国家ではありえません。

いいだ　典型的な例なんだけど、ぼくはそれについて、たとえばサミール・アミン理論というのも今ではアカデミズムで市民権を得るようになったものと思うけれど、現実にはそれは実践の試練にカンボジア問題で決定的にさらされていると思う。自力更生をやるためにはどうしても世界市場との連関を断ち切って、そこを一種の鎖国状態にもっていくほかないという理論に立って、ああいう国を閉じたわけでしょ。そしてそこで出現したものは、いま津村さんが言ったように、国家によってそうやった場合にはいかなることになるかという、つまり更生施設の共産主義ができちゃうと。そういう問題につながったと思うんだよね。そのふたつの問題というのは、つながりがあるんじゃないかという感じがしてるもんだからね。

武藤　ふたつというと何と何？

いいだ　アミンの理論を実践化した、カンボジアの国家建設の方針と、国家的な更生施設にポル・ポト共産主義がなったこととの間にはね。

武藤　それはもちろんある。もっともアミンの全部断絶説というのは一番初期の議論ですね。アミン自身は少しずつ修正してきている。最近グンダー・フランクが長い論文を送ってきた。次の次の号ぐらいの「世界から」に載せますが、これは極限的悲観論なんですね。「ひとつの世界、ひとつの危機」という論ですよね。現象的には三つの危機、つまり資本主義中心部の危機と第三世界の危機と社会主義の危機があるようにみえるが、実はそれは一つの危機だという。それは全体としては「蓄積の危機」だというのが彼の問題の立て方です。そしてこれは、それが現実の危機であると同時にイデオロギー、理論の危機だ。そのなかですべての理論は破産したという。その中に従属理論と新従属理論もはいっていく。どうして破産したかというと、従属理論は前提としてなんらかの形でのナショナルな自律性が、国民経済として自律性が可能だという主張をはらんでいたけれど、この仮定はどこにおいても成立しなかった。カンボジアのことが頭にありますよね。理論が破産したがゆえに宗教とナショナリズムが猛威を振るう。これは、全部ダメだというわけ。ナショナリズムと宗教に対しても、ほとんど百パーセント否定的ですね。

いいだ　宗教としてコミューン運動が進んでいるということは全然……。

武藤　そういうふうには言わない。結局このフランクの説には革命という観点があまりないわけ。危機を革命的に乗り越えるという可能性や手がかりについては何も示唆していないわけね。国家とナショナ

リズムの問題が出てきたけど、たとえばインドシナ革命にしても、民族解放運動としては、民族国家の獲得をもって一段階を画するという革命の性格を不可避にもっているわけですよ、もともと。中国革命もそうだよね。もしそれだけ考えるならば、戦争が起こったって、別に不思議はないわけですよね。民族国家としての独立の後、国益の対立で戦争をするということは定石なわけだ。なぜ戦争が衝撃を与えたりするかといえば、それが共産主義運動の名において行なわれたい戦いだったからですよね。国家の問題以前にインターナショナルな問題、国家をもこえるところの主体の形成というか、それができるかできないかというところに帰着するんではないかという感じがする。これはまったく主観的な過程とは言えないけれど、いわば実践的な能動的な過程です。それなしに国家だけできて、その国家が国家の名において、インターナショナルに連携するということはないだろうと思うね。そこにひとつの要素を入れて考えなきゃ。

連帯なしに自立はない

いいだ　津村さん、中断した形になっちゃったけど、時間もないのでさっきあなたが出した問題点の続きを総括的に発言してください。

津村　国家をこえる主体をつくっていくことが先であって、国家権力をとることが先ではないという、あるいは民族国家をつくることではないということですよね。結局、今までの革命というものは国家と国民をつくるというところに行っちゃったわけで、フランスのエコロジストの言いまわしの中で、「新しい国家と国民の創出を願うのでないすべての人たち」というのは、非常に原則的なことだという気がする。さっきのハイマーの言い方を使えば、グローバル・ヴィレッジの村人みたいなものがそれに代わるものとして想定されていると思うんですが。

いいだ　その場合、「世界から」という題名をもじっていうと、国家を世界へ向けてこえるというイメージと、自分の足もとのフェイス・トゥ・フェイスのコミューンに向けて内側にこえるというイメージと両方あると思うんだよね。その両者の関係が、今の人類史の分裂状態の中では非常にむずかしくなっている。

津村　だから、ハイマーなんかはそこの間をかなり楽観しているところがあって、つまり多国籍企業が生み出されたというのは、国家をこえる意思決定のシステムが実質的に生み出されたことであって、反―多国籍企業というべき人の流れがつくり出されてきていて、そのことが国家をこえたグローバル・ヴィレッジの前提になっていくであろうという、そうはたして楽観的に行くのであろうかというのは疑問なんだけども、原則的にはそうだと思うんです。多国籍企業による第三世界支配ということをむしろ逆手にとって、インターナショナル的情報流通をつくっていくような外側の条件はできている。その外側の条件というものを主体化していく根拠というものは、やはり自力更生の方向しかないんじゃないか。

自力更生というのは過程だとさっき言ったのは、自給自足で外を排除するというふうに立ててしまったら、すでに自立でも連帯でもなくて、連帯なしに当然自立はない。むしろぼくのイメージはアミの目なんですよね。ある閉ざされた制度としてのコミューンではなくて、ネットワークとしての生活者の連帯が生活のあらゆる領域で作られていくこと。

たとえばいま都市近郊の消費者グループがだんだんそうしたネットワークをつくっていって、近郊農民と結びつき、また東北農民まで結

びついていって、自主流通をつくる。あるいは農業に参加する食品流通に関しては新しい冷凍技術の発達によって、ここ数年で大商社に押さえられちゃったわけだけど、それに代わる食の流通を人民の側がつくっていけるかということは、かなり切迫した問題です。そういう具体的な生活物資のネットワークが生活の局面ごとにできて、それがまた情報の流れであり、相互教育の流れでもあり、資本や権力を包囲していくネットワークでもあるものとして、からみあっていくのが自力更生ということなんではないかと。そのことが第三世界との連帯を可能にする、グローバル・ヴィレッジの基本単位ではないですか。

前に武藤さんが『保革対抗軸の崩壊』を書かれたわけだけど、その崩壊のあとにどういう対抗軸が出てくるのかということは必ずしもはっきりしていないわけだけど、それは高度成長の過程でというか、あるいは大きく言えば近代百年の過程でつくられてきた企業社会の既得権のワク組を防衛する方向と、そこから切り捨てられていく方向の二つに分かれていくんじゃないか。そのことが、農業問題、食糧問題では非常にはっきりと企業社会を守ろうと思えば、農業を全部切り捨てるしかないという方向に極端な形で進みつつあります。そのことが政党政治の領域で言えば自民党だけでなくて、中道諸派が既得権擁護の大部隊として登場する、共産党まで含めてね、大部隊として登場してくる。それに対して非常に小さな動きではあるけれども、旧青嵐会グループなんかが農村青年あたりを基盤にして高位当選をしていて、その場合の論拠というか、選挙のポイントというのは、今までのようには生きていけない、今までのように企業社会擁護じゃやっていけないというのを右の側から出してくるという動きがある。じゃあ切り捨てられた部分が、「左」から出てこれるかというと、それはどうも政党政治の姿をとらない気がするんです。

これは農民とか、いわゆる弱者というふうな階層のことではないんです。あらゆる職業の労働者が、労働をする立場と生活者の立場が分裂している。生活者の実感というと、自分の仕事が意味あるものと思えない。

仕事をしているということと生活をしているということとの間に、本質的な対立が出てきてしまう。企業社会の既得権を守ることと、そこから切り捨てられることの対立軸が、個人の中にも生じてくるというところが、今のようには生きていけないということの非常に現実的な根拠になってくると思う。ひとりひとりが自分の労働の意味を問いなおしていくことも含めて、切り捨てられていく部分が、企業社会の掲げてきた、あるいは実際に組織として形成してきた普遍性に代わる新たな普遍性をかちとっていくことができるはずだ。エコロジー運動というのはそういうものだと思う。

真継　話がたいへん広範囲になって、そのすべてについてぼくなりの感想を述べるということはできないんだけど、それを「使者」という雑誌の明確化できない理念、共通の理念ということと関連して、一面的にしゃべってみます。やはりぼくらの雑誌の編集同人は文学者ですので、文学運動を中心とする文化運動は、とくにまったく危機に陥っている現代文明というものをまずどれだけ深く認識して、問題提起できるか、解決なんていうのは武藤さんのお話のかぎりではまったく見えっこないので、むしろ認識の深化ということがだいじだと思うんです。津村さんは、もちろんそういうことを意識して言われたんではないだろうけれども、きょうのあなたのお話はむしろ計量的な危機という面の主張が多かったように思うんです。人口とエネルギーとの間のアンバランスが生じれば、当然これは危機ですね。そういう言い方と関連して言えば、ぼくらの場合は形質的な面の危機の認識というこ

とを、どこまでやれるのかということになるのではないかと思うのです。

「使者」の第四号の中で「文学の危機」ということをテーマにして、野間宏さんに問いかける形で、編集同人だけの延々たる対談をやったのです。

そこで、井上光晴さんが言うには、これから井上さん自身がやりたいことは自分の原体験というものがなんであったのかを問いなおしたい、いわば人間というのはどういう方面の模索でもそうですけれど、体験からしか出発できない。ぼくらの場合だったら、やはり戦争体験というものから、なんとしても戦争だけはなくしたいと、あるいは一生反対の声をあげたりとか、それはもう、やはり自分の体験の必要というようなことだけど、原体験そのものが何であったのか、非常に相対的なものでしかなかった。そういう、いわばあらゆる模索の出発点である原体験それ自体を問いなおすのと、そういうことを井上さんが言っているというのも、ぼく自身はたいへん共感を持つ。

また、新島さんの例を代表的なものとして出したのは、同じように自分の存立そのもの、あるいはふたりの人間の関係への問いという、無限に根源へと帰っていかざるをえないようになってきている、と思うんです。

ぼく自身は仏教になんで魅かれたかというと、大きくいえば学生時代に朝鮮戦争という体験があった。日本人と革命ということを考えれば一向一揆というものがある。一向一揆の指導原理としての仏教というものがある。そして仏教とは何かを考えて、結局インドまで帰ってしまうと、時間的に無限遡及してしまっているんです。どうしようもなくそういうふうに遡及してしまうんですね。

ぼく自身はそういう仏教の目から、日本人というものは何かという、日本人におけるナショナリズム、民族主義の問題ということを、みていく。

日本文化というものを賤と職、天皇制と被差別部落を代表とする賤民と、両方の文化の葛藤としてとらえることができるとすれば、ぼく個人としては両方ともきらいなわけです。日本人って何だろうということを考えれば、三島由紀夫さんが非常に強調した。彼は「みやび」と言いましたが、神道というものは、尊くって強くて美しいものですね。そういうものに対する崇拝だとすれば、それの反対の卑しくって汚れていて醜いものの中にこそほんとうの文化がある、と、そういうふうに「賤」の文化が対極としてあるんだったけれども、ぼくは両方ともいやなの。その対極の両方が私自身も含めて、われわれ日本人の非常にあいまいだけれども、無意識的なさまざまな行動原理になっていることはまちがいないけれど。

日本仏教史というのは、まったく日本化され、歪曲化された堕落の歴史ではないんだから、もう一回原始仏教に帰って、そういう目で日本史の精神というものを照明する、無意識的な深部にまで光を当てて、たとえば何で今でも神社の前を通ったら柏手を打ちたくなるのかとか、そういう無意識なクセになってしまっているものをなんとか革命したいと、結局ぼくの場合はそうなってきたと思うんです。

ぼく自身はとうてい「使者」の五人の同人の意見を代表することはできませんので、そういう個人的な志だけ言わせてもらいます。

いいだ クセまでなおすということになると是、命を革(あらた)めるというのもますますたいへん(笑)ということになりますね。

というところで、時間もつきましたので、今日はこの辺で。どうもごくろうさまでした。

(一九七九・一二・三)

特集

新左翼各派の八〇年代戦略

〈危機〉の時代を迎えて、新左翼は何を目ざすか。各派が書き下ろす八〇年代革命論——

革命的共産主義者同盟全国委員会
共産主義者党
共産主義者同盟（全国委員会）
共産主義者同盟（全国委）マルクス・レーニン主義派
共産主義者同盟赤軍派（プロ革）
共産主義者同盟蜂起派
共産主義労働者党全国協議会
日本革命的共産主義者同盟（第四インターナショナル日本支部）
日本革命的共産主義者同盟革命的マルクス主義派
日本共産党再建準備会議
マルクス主義青年同盟
マルクス主義労働者同盟
労働者階級解放闘争同盟

（五十音順）

八〇年代大激動と日本革命勝利の展望

革命的共産主義者同盟全国委員会

朝鮮、イランをはじめ全世界的な激動の高まりのなかで迎えた八〇年、八〇年代は、まさに世界戦争の危機と世界革命の時代、プロレタリアート人民の人類史的解放に直結する大激動の時代である。わが同盟はその偉大な時代の関頭に立って、全日本のたたかう労働者、農民、学生、人民に熱烈な連帯をこめて、八〇年代革命と八〇年決戦の道を提起したい。

われわれは、この一九八〇年において現代のファシスト＝反革命カクマルの完全打倒をかちとり、三里塚二期工事阻止決戦の六〇年、七〇年をこえる大爆発をかちとり、もって日本革命の扉を荒々しくこじあけることを声を大にして宣言し、この旗のもとにすべての人民が総決起することを呼びかけるものである。革命的共産主義運動創成以来二十余年、日本プロレタリアート人民は、ついに世界史的大激動のはじまりのなかで、「第二の四・一九革命」にむかって英雄的にたたかう朝鮮人民とかたく連帯し、ともにたたかうなかから、日帝打倒―日本革命勝利を現実のものとする展望をつかみつつあるのである。

一、戦争と革命の時代としての八〇年代

八〇年代を戦争と革命の時代たらしめている最大の要因は、帝国主義とスターリン主義の戦後世界体制が崩壊的危機を深め、とりわけ戦後体制の主導的基軸としての帝国主義世界体制が、アメリカ帝国主義の圧倒的力量の喪失と没落によって、その擬制的統一性を失い、完全に解体的危機の局面に突入しているということである。

帝国主義戦後経済のゆきづまりと分裂化・ブロック化の危機が深刻化するなかで帝国主義間の利害対立が顕在化し、このなかでアメリカ帝国主義・カーターはスターリン主義の矛盾に介入し、スターリン主義間対立を利用すること（連中対ソ政策など）でスターリン主義を封じこめつつ、帝国主義間の争闘戦に全力をあげてきたのであったが、それはスターリン主義間の矛盾を極限的に激化させ、世界危機を激化させ、ひいては帝国主義間の矛盾を激成するのみだったのである。

米帝の危機の根底にあるものは、アメリカ経済の停滞と没落にあり、インフレの昂進が

不況化を生みだし、深刻な景気後退の危機に逢着しているのである。そしてそれが世界経済全体を長期不況にひきずりこみ、帝国主義間の分裂と抗争をいっそう激化させるのである。

また、こうしたなかでイラン、朝鮮をはじめとして新植民地主義体制の崩壊的危機が、世界危機―米帝危機をいっそう促進している。釜山・馬山の暴動的決起を発火点とする朝鮮の未曾有の政治危機は日帝、米帝を激しく追いつめており、米・イラン対立の激化は中東（石油）支配体制の崩壊的危機を鋭くつきだすものである。こうしたなかで米帝はますますむきだしの軍拡と軍事外交政策に走り、それがまた他帝国主義の対米対抗的な軍事大国化の衝動を促進しているのである。

帝国主義の絶望的危機にたいし、スターリン主義は、本質的に受動的にしか対応できない無力性を自己暴露し、パワー・ポリティックスの論理で対抗的、積極的に軍事行動をつよめ、一国社会主義論のもとに世界革命を裏切り、世界戦争の加担者、促進者としての本質をますます露呈しているのである。

こうした米帝危機―世界危機の深まりのなかで、最弱の環としてその危機を深めているのがほかならぬ日本帝国主義である。日帝は帝国主義間争闘戦の激化のなかで、その二流帝国主義としての、「持たざる国」としての脆弱性を全面的に暴露し、とりわけ米帝の対日争闘戦と内における矛盾と闘争の爆発にゆるがされて、絶望的凶暴化の道を歩み、朝鮮情勢への帝国主義的、植民地主義的支配の強化を基軸にしつつ、軍事大国化・アジア侵略・天皇制ボナパルティズム化の道にのめりこみつつあるのである。昨今の日帝政治危機はそれを促進するものとなることは明らかであり、あらゆる兆候がそれを示している。だが、それは日帝打倒―日本革命の条件の成熟を告げ知らせるものにほかならない。

こうした現代世界の崩壊的危機の深まりは、革共同の基本戦略―反帝国主義・反スターリン主義プロレタリア世界革命の綱領的正しさを圧倒的に証明するものである。世界危機―米帝危機―日帝危機に世界革命をもってたえ、帝国主義の侵略と戦争の攻撃を内乱に転化するというわが革共同の戦略と総路線のみが、現代世界危機にたいする最もプロレタリア的革命的な回答である。つまり、戦後体制の危機を革命に転化することによって、現代が抱える全問題を、人間の人間的解放の事業として解決することができるのである。

わが革共同は、この反帝・反スターリン主義世界革命の綱領的立場をすでに二十有余年前に明らかにし、そのもとにうまずたゆまず革命的闘争を展開してきたのである。六〇年安保闘争に先だって創成されたわが革命的共産主義運動とその党は、六〇年安保闘争と六二、三年カクマルの脱落逃亡を経て、いっそう強化・純化され、六六年秋第三回大会において「戦後世界体制の解体的危機と日本帝国主義の体制的危機」という革命的時代認識を他の誰よりも早く、鮮烈に提起し、世界史的激動期の到来にたいする確固たる確信に立って六七年十・八羽田闘争を突破口とする階級闘争の内乱的武装的発展をきりひらいてきたのである。

そして、革共同は、たたかう朝鮮・アジア人民への血債をかけた七〇年安保・沖縄決戦の先頭に立ち、二度にわたる破防法攻撃（六九年四・二八沖縄奪還闘争にさいし本多延嘉書記長らに、七一年十一月沖縄返還協定批准阻止闘争にさいし松尾全学連委員長＝当時にたいして）をはねかえし、合法非合法、公然非公然の問題を正しく解決しつつ、内乱的死闘の七〇年代に突入してきたのであった。

七〇年代は、まさに七〇年安保・沖縄決戦にふまえ、その地平を守り、階級闘争の革命的、内乱的、武装的発展をきりひらく血みど

ろの過程であったが、その中心にあったのは七〇年決戦にたいする二重の反動——日帝権力の破防法弾圧と反革命カクマルの白色襲撃と対決しこれを粉砕するたたかいであった。二重対峙・対カクマル戦の革命的貫徹こそ七〇年代を一貫してつらぬいた太い基軸であった。

二、反革命カクマルせん滅戦争の偉大な価値創造的意義

それでは、わが革共同は七〇年代の二重対峙・対カクマル戦をとおして何をきりひらいてきたのか。ブルジョア・ジャーナリズムが悪宣伝するような「不毛な内ゲバの季節」とはまったく逆に、それはプロレタリア革命の実現を真剣に考えるならば決して避けて通ることのできない不可欠のたたかいであり、革命にむかっての最良、最短のコースだったのである。一言でいってそこには偉大な価値創造的意義がはらまれているのである。

カクマルは現代のナチス、正真正銘のファシスト反革命である。まず、このことを一点のあいまいさもなく確認しなくてはならない。カクマルは「二つの十一月決戦」が内乱的死闘の時代をきりひらいたことに死の恐怖を感じ、権力の破防法弾圧と結んで、「権力は（中核派の）首根っこを、カクマルは下の急所を」と叫んで（そうだ、彼らは自らの機関紙上でこのように公言し、八年間ただの一度も撤回していないのだ！）、権力とたたかう革共同——中核派の背後から白色襲撃をくわえ（七一年十二・四反革命）、さらに決定的なことに、日本革命運動の最大最高の指導者・本多延嘉書記長を卑劣な手段で襲撃し、手斧を振りおろして目的意識的に虐殺するという未来永劫許すことのできぬ犯罪を凶行した（七五年三・一四反革命）白色テロリスト集団である。

カクマルはたたかう労働者、学生、人民に白色テロルおよびその脅迫（ナーバス作戦）をもって革命を阻もうとする左翼の仮面を被った民間反革命である。そのうえ、彼らはわが正義の復讐戦争に追いつめられると、それを「やったのは中核派ではなく権力の謀略部隊だ」などという荒唐無稽なデマをねつ造し、みずからは謀略的手段に徹底して依拠しようとする、ナチス的ファシストなのである。彼らの目的が革命運動と革命党の破壊にあることは一点の疑う余地もない。問題は、ではこの反革命組織との血みどろの戦争をあいまいにして、革命を語ることができるか、ということだ。反革命との戦いをあいまいにすることは、現実には反革命の襲撃によって革命がじゅうりんされつくすことを意味している。

一九三〇年代の国際階級闘争の血の教訓は、反革命との内戦を位置づけられなかったゆえの敗北の歴史を示しており、現代革命の勝利のために不可欠な課題を提起しているのである。

まさに、反革命カクマルとの戦争は、反革命を倒すか、革命が倒されるかのギリギリの絶対戦争であり、階級闘争の最先端、最基軸をなすものである。われわれは防御—対峙—総反攻の段階的戦略をとって反革命を打倒する戦争を発展させてきたのである。

そして、われわれは三・一四復讐戦のなかで先制的内戦戦略を確立し、革命をきりひらく観点から二重対峙・対カクマル戦を位置づけることに成功したのである。それは、革命的情勢の接近のもとでのレーニンのいわゆる「三つの義務」（革命的宣伝の組織化、革命的行動の組織化、革命的組織の組織化）を今日的に解決するものであり、武装と武装闘争の準備と移行を先制的に解決し、敵権力に先んじて内戦—蜂起の陣形を構築するという戦略である。

われわれはこの先制的内戦戦略のもとに二重対峙・対カクマル戦争を戦いぬき、それによって帝国主義の革命党絶滅攻撃に一歩も二歩も先んじて武装をかちとり、帝国主義本国

における武装闘争の発展という困難な課題を突破してきたのである。人民革命軍・武装遊撃隊の今日的確立こそ、その革命的精華である。

かくして、わが革共同は対カクマルの総反攻完遂段階を同時に対権力の戦略的対峙段階の戦取としてかちとりつつあるのであり、そうした意味で対カクマル戦争はいまやわが革共同が権力奪取にむかううえでの跳躍台となっており、カクマルはわれわれの絶好の餌食なのである。

三、八〇年三里塚決戦の勝利で日本革命をきりひらけ

こうした二重対峙・対カクマル戦争の七〇年代をとおしての偉大な前進にふまえて、われわれは八〇年と八〇年代が日本革命的共産主義運動の爆発的発展期となる主客の条件が完全に成熟していることを断言してはばからないものである。

帝国主義世界経済の危機は、いまや七四、五年恐慌より深刻な八〇年世界同時不況の情勢を不可避としており、帝国主義間の争闘戦のつよまりと新植民地主義体制の矛盾の爆発は世界危機を帝国主義の侵略戦争、帝国主義間戦争、スターリン主義間戦争、帝国主義とスターリン主義の一部または全部をまきこんだ国際戦争—世界戦争の情勢をますます煮つめてゆくのである。

こうしたなかで、日帝はその最弱の環としての本質を露呈し、危機からの脱出のために対米対抗的なかたちで軍事大国化・アジア侵略・天皇制ボナパルティズム化の道に絶望的にのめりこまざるをえないのである。

さて、日帝の絶望的凶暴化というとき、その中心に位置する攻撃こそ三里塚空港の二期工事着工攻撃であることをしっかりと確認しなくてはならない。日帝はそこに危機脱出の突破口を求めており、三里塚二期決戦が八〇年における階級決戦の中心になることは疑いない。

二期攻撃が日帝にとって切迫しているのは、第一に国際的争闘戦に対処して航空宇宙産業を最重要の一環とする高度先端技術産業における立ち遅れを克服し、また軍需産業—自主技術開発を推進してゆくために、その基礎としての航空路拡大と空港建設が大々的に要請されているからである。その中心たるべき成田空港がいまだに滑走路一本の欠陥空港であるのは由々しき事態となっているのである。つまり、日帝は帝国主義的争闘戦に勝ちぬくためにも、軍事大国化と朝鮮—アジア侵略に突進するためにも、いまや三里塚二期攻撃の成否に体制的死活をかけているといっても、まったく過言ではないのである。

第二に、日帝が二期強行に走るもうひとつの理由は、三里塚闘争の存在が日帝にとってアキレス腱であり、八〇年治安対策の第一級の対象であるということである。日帝は人民のたたかいの天王山、共闘と結集の砦である三里塚闘争を破壊することなしに八〇年をのりきることができないのである。三里塚闘争こそ、こんにちの日本で最も非妥協的に日帝と対決してたたかいぬいている戦線であり、日帝と人民の激突の最前線である。

そして、この三里塚闘争をだれがたたかっているのかは、きわめて自明のことがらである。社会党、共産党、総評民同は三里塚闘争の最も初期の段階から闘争とまったく無縁であり、今日その反動化と総屈服は目をおおうばかりである。いまや社共既成左翼は体制の左足であり、労働者階級人民のたたかいにとって桎梏以外のなにものでもない。総選挙後の日帝の政治危機にたいする社共の無力性と反動性は、人民から幻想をはぎとるに十分だったといってよい。しかしながら、社共がいかに転落しようとも、人民はたたかわなくては生きてゆけなくなりつつあり、出口を求め

てたたかいはじめているのである。明らかに八〇年と八〇年代の主導権は、社共にかわる闘う労働者党をめざしてたたかいぬいてきたわが革共同の掌中に握られているのである。三里塚二期工事をめぐる決戦が日本階級闘争の基軸となることによってそれは圧倒的に証明されるのだ。

三里塚闘争は七〇年安保闘争と一体となって開始され、七〇年代を通して営々とたたかいつづけられてきた。その十四年間の歴史は、日帝の体制的危機の深まり、侵略と反動と暗黒の攻撃の激化、延命のための農民切り捨てと農地強奪、問答無用の機動隊支配の歴史であり、日帝の本質の最も凝縮された歴史であったとともに、その日帝にたいして三里塚芝山連合空港反対同盟をはじめとしてたたかう農民、労働者、学生、人民が人民の正義を高くかかげ、徹底的に非妥協をつらぬいてきた歴史であった。たたかいのなかで小川明治副委員長、三の宮文男氏、大木よねさん、東山薫氏、そして今また戸村一作委員長の生命を失い、あるいは奪われながら、その血と汗と涙のたたかいを一貫してつらぬいてきたがゆえに、三里塚闘争は人民の魂をゆるがし、支持と関心をひきおこしてきたのだ。これほど人民を鼓舞激励し、たたかう人民を生みだしてきたたたかいがまたとあるだろうか。

それでは八〇年三里塚決戦の勝利の路線はなにか。われわれは以下の諸点を真剣に提起するものである。

第一に、二期工事阻止・空港粉砕の路線を徹底的に鮮明にさせることである。日帝は前述したとおり二期工事強行に体制的延命をかけており、これと真正面から激突して粉砕することこそ三里塚闘争勝利の唯一の道なのである。カクマルが反革命的目的をもって宣伝し、戦列内部にも一部存在するところの「二期工事凍結論」は、完全な誤りであるばかりでなく、二期決戦を回避する屈服と敗北の道である。

第二に、百万人民の三里塚総結集をかちとることである。三里塚ほど人民の正義を体現した闘争はなく、また三里塚ほど日帝の暴政、非道を露骨に示すものはない。われわれの大胆で、着実で、熱烈な宣伝、扇動、組織化の活動が展開されるならば、巨万の人民の三里塚闘争にたいする共感をひきだし、行動に転化することはまったく可能である。人民の怒りとたたかうエネルギーは決定的に高まりつつあり、まさに的確な指針をこそ求めているのである。三里塚は個別課題だから人が集まらないとか、農民闘争だから全人民化しないなどという日和見主義と敗北主義、人民の革命的エネルギーにたいする不信と絶望を吹きとばして百万動員へ突撃しなくてはならない。

第三に、労農連帯の堅持である。動労千葉が松崎＝カクマルの「三里塚と一線を画する」という反革命的路線を敢然と蹴って組織の独立をかけて三里塚反対同盟との血盟を誓い、ジェット燃料貨車輸送阻止のストライキを二波にわたってうちぬいていることは、三里塚闘争の勝利にむかって労働者階級本隊を総決起させてゆく砦をなすものである。反対同盟と動労千葉を中軸とする労農同盟こそ勝利の保障である。われわれは階級本隊の決起をねばりづよくかちとっていくことに敵対するいっさいの小ブル的焦りを粉砕しなくてはならない。

第四に、三里塚闘争十四年の歴史を赤々と貫く実力闘争を堅持し、いっそう強化することである。その第一の柱はゲリラ的パルチザン的戦闘である。わが革命軍は昨年三月以来空港管制機能破壊をはじめとして数かずのゲリラ戦を敢行し、空港粉砕・飛行阻止の先頭

に立ってきた。われわれは、人民革命軍・武装遊撃隊の必勝の戦略・戦術をもってさらに日帝支配階級の度胆をぬく無制限無制約のゲリラ戦争を次つぎと貫徹することを宣言するものである。第二の柱は、百万動員を基礎にした大衆的実力闘争である。三里塚現地への巨万の人民の結集は、それ自体空港にたいする巨大な実力闘争への転化をはらんでいるのであるが、われわれは大衆闘争の武装的、暴動的発展の観点からこのたたかいを推進するものである。第三の柱は動労千葉のジェット燃料貨車輸送実力阻止闘争である。鉄路を武器に労働者がストライキをはじめとする実力闘争に起ちあがり、もって輸送を止め、燃料備蓄ゼロ化にむかって前進することのうちには、革命のヒドラ、武装蜂起のヒドラが宿っているのだ。

第五に、反対同盟を中心にかたく団結し、革命的統一戦線を圧倒的に強化することである。八〇年をどうたたかうかを広範な人民が真剣に考え、たたかう運動と組織をもとめて流動化しているとき、三里塚闘争の全人民的爆発の大衆的水路、大統一戦線を形成し、実行委員会としてそれを結実させることこそ百万動員の道なのである。

第六に、三里塚闘争の敵カクマルを徹底弾劾し、せん滅し、一掃することである。三里塚闘争を「政争の具」などといい、あろうことか戸村委員長以下反対同盟幹部を「スパイ」呼ばわりし、いままた「二期工事凍結」デマをふりまくカクマル、動労千葉のジェット闘争に反対し、公然と「スト絶対反対」を叫んだカクマルとたたかわずして三里塚闘争の勝利をかちとることはできない。反対同盟と全支援勢力はカクマル追放声明（七七年五・二九声明）を発し、全国の全戦線からカクマルを一掃することを宣言したが、いまこそその立場を鮮明にしなくてはならない。

この勝利の路線はまた戸村一作委員長の遺志でもある。戸村委員長はその遺言的三文献（『前進』九六三号参照）のなかで話しあい拒否を、労農連帯を、たたかう団結を血を吐くような言葉をもって綴っているのだ。この戸村精神をひきつぐのかどうか、それが勝敗の分岐点なのだ。

以上のような路線のもとにたたかいぬくならば、八〇年三里塚決戦の勝利は確実である。このなかで決定的に重要なことは、八〇年三里塚決戦と二重対峙・対カクマル戦争を一体的に推進するということである。カクマルと戦うことなしに三里塚決戦の勝利をかちとることはできず、また逆に三里塚闘争の巨万の高揚はカクマルに致命的打撃を与えるのだ。カクマルが今日かくもあからさまな三里塚敵対、動労千葉破壊の暴挙を強めていることは、カクマルの階級的本質の表白であり、きわめて鮮明な対決陣形をつくりだすものである。カクマル完全打倒はこの面でも決定的に前進することは疑いないのである。

八〇年は、三・一四復讐戦貫徹＝総反攻完遂、カクマル完全打倒を達成する年であり、たたかう朝鮮人民とかたく連帯し三里塚二期決戦の六〇年、七〇年を越える空前の大爆発をかちとる年であり、そうしてそのなかから日帝打倒―日本革命への水路をきりひらく偉大な年となるであろう。

一切は、この内乱・内戦―蜂起に勝利する革命党としての革共同―中核派の強化にかかっている。すべての人民は、革共同の旗のもとに結集せよ！

反帝闘争・労働者統制運動を闘いぬき工場占拠
ゼネスト・ソビエト革命への展望をきりひらけ！
―七〇年代の総括と八〇年代への展望―

共産主義者党

一、帝国主義の没落期としての大不況時代

苦難に満ちた七〇年代をとおして、われわれが闘いながら模索し、予見してきた事象はどこまで明瞭なものとなって現われているだろうか。

最初にまず、われわれが六〇年代の後半いらいとらえてきた「戦後政治経済体制の危機」について確認しておこう。

「核の傘」「ドルの傘」による、アメリカ帝国主義を頂点とした戦後世界体制は、その崩壊の危機を加速化させてきた。そして、七四年の破局を契機に、世界資本主義は、いわば新たな「大不況期」へ突入している。周知のように、百年前一八七三年に始まった大不況期は資本主義の自由主義段階から帝国主義段階への移行を準備した。そして、帝国主義こそ、資本主義の最高の発展段階であり、同時に、その矛盾を経済過程においてもはや処理しえず、戦争と両階級の激突という政治的・軍事的矛盾へ外化せざるをえない、最後の資本主義にほかならない。

今日の「大不況期」は、その帝国主義の没落期における大不況である。二つの大戦をとおし、いまや帝国主義は、単直に世界戦争や大恐慌に訴えることができないまま、局地戦と小破局をくりかえしながら、一歩一歩危機を深めている過程にある。経済的には、インフレと不況の振幅を拡大しつつ、その同時進行による破局が断続的に生ずるという、スタグフレーションの危機が深化している。また、政治的、軍事的には、アジア、アフリカ、中南米、南欧などで、産油国、非産油国、工業化路線を突走った国、走れなかった国を問わず、帝国主義の侵略戦争および革命と反革命が拡がっている。

アメリカ帝国主義の卓抜した生産や、金融や、軍事力によって、いったん帝国主義時代始まっていらいの「安定」を誇ってきた第二次大戦後の世界体制は、こうして、帝国主義相互の不均等発展、国際通貨制度の破綻、軍事支配の後退によって、なしくずし的な形をとりながらも、着実に崩壊しつつある。この事象の確かさと具体的な発現形態が七〇年代をとおしていっそう明らかになった。

問題は、すぐれて、労働者階級人民が、その危機を主体的にとらえ革命に転化しうるか

否かにかかってきており、われわれもまた、そのための準備、戦略配置の形成を急がなければならない。

と同時に、これまた周知の事態として、六〇年代から七〇年代にかけての中国における文化大革命の展開と林彪・四人組事件、実権派の復活、近代化路線への転進をみた。そして、インドシナ三国の解放革命戦争の勝利と、ベトナム・カンボジア戦争、中国・ベトナム戦争という社会主義国家間の戦争を眼前にみてきた。これらの事態は、過渡期社会における社会主義建設の進め方、民族解放と社会主義革命の結合における民族主義的限界の克服の課題、総じて、共産主義思想の現代的再生と過渡期における社会主義運動・階級闘争の総路線を明らかにする問題をわれわれに投げかけた。われわれが、資本主義体制下にあり、現実には資本家階級との階級闘争を闘いながら、しかも、こうした社会主義をめぐる諸問題への解答を迫られ、それなくしては、現在の階級闘争を革命的に率いる前衛党たりえないという状況がある。七〇年代の世界階級闘争は、帝国主義の没落が深まるとともに、資本主義世界から社会主義世界への大過渡期にある現代がかかる問題の切迫性を与えていることをわれわれにさし示したのである。

二、七〇年代における日本帝国主義の攻撃方向

七〇年代における階級的攻防をとおして、日本の労働者階級人民は、どこまで力量を蓄積してきたであろうか。

帝国主義支配階級は、六〇年代後半から再び高揚した街頭実力闘争と学園占拠・都心ターミナル占拠闘争に対し、国家権力を総動員した学園ロックアウト・全都ロックアウト体制をしくことによって、七〇年安保攻防を乗り切った。

これにより日本帝国主義は、日米安保体制を東アジア全域を対象とする反革命体制へと再編する道を開いた。同時に、国際的にはすでに六〇年代末、フランス「五月革命」・イタリア「暑い秋」でみられたような巨万の労働者の工場占拠闘争の爆発や、ドル・ポンド体制の瓦解状況に直面しており、彼らはそれらに突き動かされながら先制的に国内支配体制の全面強化に着手していった。

すなわち、支配階級は、七〇年、基幹産業中の基幹産業である鉄鋼業において新日鉄の合併をはかり、従来の独占間競争の時代に終止符を打ち、協調的寡占体制への移行をはかった。同時に、JC支配の確立・拡大をはかるための労戦統一策動が全民懇の結成、統一連絡会議、二二単産会議と進められていった。また、公企業では、国鉄・郵政の長期合理化計画が打ち出される一方、マル生攻撃が全面化したこと、および、全労働戦線で反戦派パージという形でのレッド・パージ攻勢が追撃的にかけられたことを確認しておかなければならない。

だが、このような攻撃は、単直には進みえなかった。

一つは、「二つのニクソン・ショック」を契機とする外からの衝撃が加わったことによる。アメリカ帝国主義は、テト攻勢の敗北以降、そのアジア戦略の再編に入り、対中接近・デタントによる新たな支配の構築に着手した。頭越しの米中接近という事態に直面し、日本の政府支配階級は、ギクシャクしながらも、急遽「日中国交回復」に踏み切り、日米安保の再々編成に対応したのである。また、同じ七一年のドル・金兌換の停止は、世界的なドル・インフレを巻き起こし、一時的に戦後最後のブームをもたらしたが、第四次中東戦争とOPECの対抗的な石油輸出停止措置・原油価格四倍化により反転して、戦後最大の不況を導いた。日本の資本主義経済

も、列島改造ブームから一挙にスタグフレーション危機に陥った。これに対しても、政府支配階級は、不況下の新たな政治経済攻撃で延命を図っていったのである。

もう一つは、七〇年代初頭に、国労・動労・全逓を中心とした反合反マル生闘争が爆発的に展開され、折からのインフレ進行ともあいまって、労働組合運動への結集力が一時的に回復し、春闘もまた高揚したことである。

だが、こうした流動化は、世界スタグフレーションを機とする支配階級の周到な攻撃によって、抑圧されていった。すなわち、日本帝国主義の世界危機に対する基本政策は、国内労働者階級人民への政治経済攻撃の強化とそれを背景にした世界市場全域に向けてのなぐり込み的輸出攻勢であり、また、アジア後進諸国への帝国主義的侵略の強化であった。

日本の強力な輸出競争力を可能とした第一の要因は、その徹底した合理化と賃金抑制攻撃の内に存在している。

七五年から展開された「日本型所得政策」という名の賃金抑制攻撃は、七〇年代後半期全体をとおし貫徹されてきた。それは、一方で企業危機を煽り、不況合理化・倒産攻撃をかけながら、他方で企業内労資関係に依拠してきた日本の労働組合の弱点を衝き、労働者の資本に対する従属意識を強めさせ、低賃金を強要していく政策にほかならなかった。

また、「減量経営」化と称される合理化攻撃はいっそう徹底して進められてきた。最初は不況産業の大企業における本工労働者への一時帰休実施、臨時工・社外工への首切り、中小・零細企業では親企業・金融機関による選別で倒産・解雇、縮小した上での系列化の攻撃としてかけられた。つづいてそれは、全産業に波及し、大企業においても、伝統的な「日本的労使関係」の柱である「終身雇用制」にさえ抵触する雇用合理化や不採算部門の切り捨てが一般化されるに至ったのである。そして、この過程をとおして、日経連会長(当時)桜田のいう「労使安定帯」、すなわち、企業における資本の専制支配が全面的に強化され、さらに八〇年代に向けて、右翼的労戦統一と公企体合理化攻撃として現在ひきつがれている。

このような資本攻撃は、帝国主義の政治体制全体の再編攻撃と一体のものである。支配階級は、世界危機の深化とともに激成されつつある帝国主義間、および後進諸国との対立と矛盾に直面し、そこから労働者階級人民に対する全面的な政治攻撃に着手している。それは、かの桜田発言がもう一つの「安定帯」とした官僚、警察・検察・裁判所、そして軍隊など、広義の官僚執行権力の独裁的強化として現われているであろう。

危機の進行により世界的に経済への国家統制が強まる中で、中央経済官僚の支配が強化されているだけでなく、先の統一地方選の結果が示すように、財政危機に立つ地方自治体に対し自治官僚や他の高級官僚が首長として大量に進出する事態も生まれている。

さらに決定的に重要な点は、七〇年代後半以降、国家の暴力装置そのものである警察・検察・裁判所・軍隊の強化が一段と遂行されたことである。七〇年安保後も弾圧体制は着着と強められてきたが、三里塚闘争を頂点とする全国の農民・漁民・住民運動に対する強権的な弾圧、労働争議への公安警察の介入、東京サミットにみられた事実上の首都戒厳令体制、非常治安出動の示威などがみられるに至っている。また、自衛隊も、急速に現実の政治過程へ浮上してきた。奇襲対処に名を借りた有事立法策動、制服を主体とする「防衛協力小委員会」の設置や朝鮮半島を対象とする日米共同作戦行動計画の策定など対外侵略体制の強化と、大地震対策特別法の制定など治安出動・部分的軍政の法的整備が国内反革命体制への布石として推し進められてきた

のである。さらに、こうした政治攻撃の一環として、支配階級は、「元号法」の制定、A級戦犯の靖国合祀、教育勅語の礼賛など、一連のイデオロギー攻撃を強め、既成野党をも巻きこんで国家・企業の危機に際しては国家・企業を防衛しなければならないという国家主義・国益主義を煽ってきた。

三、労働者階級の現状と闘い

このような日本帝国主義の政治的経済的攻撃によって、日本の労働者階級・人民は、どのような状態におかれてきたであろうか。

すでにみてきたように、この間の資本攻撃は、戦後体制成立以来はじめて「日本的労使関係」の支柱とされてきた終身雇用制や年功賃金制さえも掘り崩すものとなっている。

それにもかかわらず、いぜんとして日本の労働者の多くは、企業の蔭に寄りかかり、集団として抵抗する動きをつくりえていないこと、そればかりか、個人として、あるいは排他的グループとして、弱肉強食的な負の競争主義に陥る動きさえみられている。同じ職場にありながら、一方の労働者が解雇攻撃を受けているにもかかわらず、他方の労働者がせっせと残業に励むといった否定的現実は、残念ながら例外的ではない。こうした上に、造船重機・住重労組のように、第一組合員の該当者をリスト・アップして解雇要求する動きや、日産労組のように、資本に替わって組合除名=ユニオン・ショップによる解雇を担うような動きが出ており、同盟・JC支配が企業内暴力装置としての運動をともないながら、いっそう強化されているのである。

こうした状況に対する主な責任は既成指導部である社共・民同指導部にある。彼らは、七〇年代をとおしてついに、労働運動・大衆行動の組織化に取り組みえなかった。たしかに七〇年代初めの超インフレ時代に、一時期組合への結集力は高まったかにみえたが、彼らはその力をむしろ制度・政策をめぐる政労交渉の枠の中に抑えこんでしまった。そればかりか、合化のJAFへの結集や、全電通の総連合への癒着など、JC型労働組合への変質がみられてきている。

だが、全体としての労働運動のこうした停滞の中にあっても、階級的な運動の萌芽が着実に広がっていることも確かな事実である。この力に依拠し、かつ、これを発展させない限り、主体の危機を克服し、階級的力関係を根底から変革する展望を立てることはできない。

第一は、中小戦線における階級的闘いの発展である。全金や全国一般傘下にあって地域合同労組型の運動を切り開いてきた戦線では職場闘争と地域統一闘争を積み重ねながら、その内部に工場占拠・自主生産(労働者管理)の闘いを包んで新たな発展を遂げている。また、独立争議組合や争議団の闘いも広がり、地域共闘のねばり強い展望をとおしていくつかの拠点で勝利的な争議解決をかちとるに至っている。

第二は、全逓や国労・動労など公労協戦線における大衆的職場闘争の発展である。政府・当局の反動的労務政策と「減量経営」型合理化に対し、実力行使をともなう闘いが、七〇年代の初めと終りにそれぞれ爆発的に展開された。順法戦術・減速闘争、業務規制などとして知られるこれらの闘いは、内部に、当局側の労務指揮権や管理運営権を部分的にせよ労働者が統制する質を内包しながら発展してきている。

第三は、民間重工業における反資本・反JCの闘いが、下請・社外工労働者の闘争とともに、本工労働者の中にも広がってきていることである。それは、不況合理化との攻防をとおし、全造船や全金傘下などの少数組合や自立的な種々の組合・運動体の形成によって発展してきている。

このような階級的労働者の諸闘争は、未だ

有機的に結びつけられていないし、既成の地区組織の変革と十分に結合されるにも至っていない。だが、労働戦線の後退を、反撃から攻勢へ転回させる確かな足場を築いてきたことを確認しておかなければならない。

第四に、七〇年代の攻防の要衝の位置に、革命的な農民・漁民・住民の運動が存在してきたことをふまえなければならないであろう。

政府・資本は、経済危機の深化と通商戦争の激化によって、社会開発投資の強行・第一次産業切り捨て政策の遂行をさらに進展させてきた。これに対する農民・漁民・住民の闘いは、全体の運動の停滞の中でいくたの困難と矛盾を抱えながら、むしろ鋭く攻撃と対決し、同時にみずからの生産のあり方、自治のあり方をとらえ返す質をつくり出し、三里塚農民をはじめ国家権力との長期にわたる対峙関係を築いて、反体制運動の中の重要な位置を占めるに至っている。

最後に、われわれは、革命的左翼の現状について確認しておく必要があろう。

党派闘争をこそ第一義とする路線は、長期的・全体的視点からすれば、すでに破綻し、腐食しつつあるといわなければならない。また、この間、労働戦線に力を入れようとする試みもなかったわけではないが、その多くは中途で放棄されてしまった。日本の労働者階級の主体的危機に対する第一の責任は社会党、民同、共産党の既成指導部にあるとはいえ、革命的左翼を志す運動が開始されて二十年、七〇年からみても十年を経ているいま、われわれに主体的責任が問われないはずはない。われわれは、とくに労働者階級の運動において革命的左翼の力量が現実の階級関係の変革に不十分であることを共通の認識とすることから出発しなければなるまい。そして、「革命的空語」のうちに党派性をもてあそぶのではなく、実際の階級的な労働者階級の運動の内部に政策を提起し、組織をつくり、統一戦線を形成し、影響力を飛躍的に強めていくことを、みずからの革命的試練として課していくことが問われているのである。

四、八〇年代に向けた課題

以上みてきたような七〇年代の階級関係の総括をふまえるならば、われわれの八〇年代に向けた課題はおのずから明らかであろう。

（一）日本帝国主義は、危機の当初においては、合理化や賃金抑制によるその強力な国際競争力で輸出攻勢を展開し、経済危機の延命をいったん図ることができた。だが、しだいに資源国のナショナリズム、ECのブロック的政策、アメリカの保護主義的政策への傾斜など、固有の原材料・エネルギー資源の制約と輸出市場の狭隘化の双方から締めつけられ、みずからの存立基盤そのものを脅かされる危機へと向いつつある。

支配階級は、そこから一方で、帝国主義的侵略政策、アジア反革命体制のいっそうの強化へ向うにちがいない。また彼らは、他方で、法体系の全面的再編をはじめとする執行権力独裁強化の攻撃と「部分連合」型の新たな体制内統合政策の展開、および、合理化、レッド・パージなどによる企業専制の強化と右翼的労戦統一による労働運動の新たな体制内統合化の政策を進めようとしている。

われわれは、それがゆきつく究極の反革命体制として、軍・公安警察・官僚による軍事独裁と上からの「翼賛運動」「総動員体制」をみてとることができよう。

（二）労働者階級人民が没落期にある帝国主義の究極的な反革命への動きからみずからを革命的に救う道は工場占拠ゼネスト・ソビエト革命以外にない。そして、その階級決戦に至る前段階攻防戦として当面する敵の政治経済攻撃と対決し、革命的な主体の形成をはかっていかなければならない。

第一の柱は、三里塚闘争をはじめとする反帝闘争の大衆的実力闘争としての発展を追求する課題である。三里塚闘争は、空港既成事実化を阻止する連続的な闘いによって、新たな焦点を形成してきている。そして、それは、全国の闘う農漁民・住民運動の結節点であり、敵権力を包囲する人民の革命的大連合

への橋頭堡である。また、日増しに政治的軍事的危機を深める韓国における人民の闘いは、西のイランとならぶアジアの東の焦点である。われわれは日米帝国主義の反革命的策動と対決する闘いを構築して、韓国人民との連帯を強化していくことをますます強く問われている。さらにわれわれは、危機の深化と「翼賛運動」の台頭が、敵階級の被抑圧階級人民内部への差別・分断政策の強化の過程であることをとらえ、狭山闘争への結集をよりいっそう強めていかなければならないであろう。われわれは、これらの反帝闘争に対する職場・学園・地域からの結集をとおして、労働戦線における階級的統一戦線の政治的核をつくり出し、工場占拠ゼネスト・ソビエト革命の戦略配置の構築を目的意識的に担う部隊の結合をはかっていく必要がある。

第二の柱は、同盟・JCによる右翼的労戦統一、労資協調的経営参加路線の策動、公企体をはじめとする大合理化攻勢との対決を追求する課題である。われわれは、階級的な職場闘争、地域闘争を再構築することをとおして、労働者統制・労働者管理運動を組織していかなければならない。たしかに、現に闘われている工場占拠・自主生産にせよ、順法・規制闘争にせよ、倒産、合理化や反動的労務政策に対する抵抗の手段、争議戦術として存在している。しかし同時に、われわれは、この闘いの中から、資本の支配を労働者が積極的、攻勢的に統制し、その運動を基礎に労働者管理が可能となっていくことを展望づけていかなければならない。それは、工場・職場における闘争体を地域的に結合した労働者の権力組織（ソビエト）構築への道すじを明らかにすることにつながるからである。また、われわれは、日本の労働運動の現状が、危機の下での資本攻撃に対する抵抗さえも（全体としてみるならば）組織しえていない事実をふまえ、職場・地域の段階を中心に、既成の組合運動内部の戦闘的部分との統一戦線も真摯に追求していかなければならないであろう。労働者統制運動はその統一戦線におけるヘゲモニーを発揮するものである。

（三）われわれは学生戦線の大衆的再構築を追求しなければならない。全般的にみた現在の学生層の意識の後退は、著しく実利主義的マイホーム志向、排他的な企業主義、競争主義、あるいは、かつての〝進歩的文化人〟たちのナショナリズムへの転落といった社会全体のイデオロギー状況が最も端的に投影されたものといえる。それゆえ、今日の学生戦線にあっては、反帝闘争、学園変革の闘い、地域闘争への結集などの基本的行動を組織するとともに、最も、密度の高いイデオロギー的、思想的な闘いの場としていくことが問われているであろう。

（四）以上のような諸課題と同時に、われわれは、党の独自的な課題として、とくに社会主義論、前衛党論を綱領的に確立する必要に迫られている。これまでわれわれが明らかにしてきたように、現代「社会主義」における官僚「社会主義」への逸脱と対外政策上の誤りは、一つの問題の表裏の関係にある。すなわち、世界革命の挫折と労働者権力（ソビエト）の空洞化＝中央集権への一面化である。

われわれは、革命後の社会主義建設における階級闘争の継続とソビエト・コミューンの活力の増幅をめざし、また、それを普遍的基準とした社会主義諸勢力との連帯と路線闘争を進め、世界革命の前進のための国際的統一戦線を形成していかなければならない。ここにおいても、労働者統制、労働者管理運動の追求は、ソビエト権力の空洞化と闘う綱領的・思想的に重要な位置を占めているのである。

また、われわれのめざす前衛党は、工場・職場細胞を基礎として全国的に集中した有機的統一機構をもち、革命的な自発性と集中性によって運営され、階級闘争の最前線で党の政策と方針をもって牽引し、綱領的思想的に労働者階級の意識の変革と主体の形成をはかっていくものでなければならない。八〇年代は、かかる前衛党の建設を、階級的な統一戦線の基礎の上に、党的な交流をとおして、大胆に進めていかなければならないであろう。

現代過渡期世界の止揚と共産主義者の任務

共産主義者同盟（全国委員会）

(一)

現下の階級闘争を革命へと領導すべき革命的プロレタリアートにとって、樹立すべきプロ独権力の性格と、実現すべき政治的内容の基軸の確立とはなれてはいささかの政治的立場もない。こんにちに生きるマルクス・レーニン主義者の実践は、これを革命的政治闘争へと物質化するとともに、そのいっさいの成果を直接的に党建設へと総括することにはっきりと定めねばならない。このたたかいこそが資本主義の危機を革命的危機へと転化し、権力奪取と権力樹立の革命の根本問題に、実践的革命的に回答してゆく道である。

(二)

一九一七年のロシア革命によって樹立された労働者権力は、ヨーロッパ革命との結合を条件に、世界プロレタリア独裁への進軍を当面の目的とすることによってはじめて、自己をプロレタリア独裁権力として規定した。

それはレーニン・コミンテルン＝世界党の建設のもとに、全世界の階級闘争を武装蜂起―プロレタリア独裁の単一の基軸をもって組織し、この世界的任務の絶えざる遂行を物質的条件にして、ロシア社会主義革命の完全勝利を展望してゆくというレーニン主義世界革命路線に支えられたものであった。ヨーロッパ革命の敗北と世界帝国主義の反革命干渉戦という重圧下で、ロシア革命の一歩の後退はレーニン死後、正しく総括されることはなかった。スターリン主義は、コミンテルン＝世界党とロシア革命のいったんの後退を、反動的に固定することによってその実践的性格をあらわした。

スターリン主義は、コミンテルン世界革命路線を「総和革命路線」に転落させ、一国の革命権力を世界プロ独へと飛躍させてゆく歴史的任務を、一国社会主義建設可能論にもとづく「連邦制共同体の建設」に歪曲した。そして共産主義は各国の「社会主義的生産力」の増大とその総和の結果であるという路線をもって、自己の右翼日和見主義を反レーニン主義として純化させた。スターリン主義は、マルクス・レーニン主義党の唯物史観の哲学化、弁証法的唯物論の機械論的唯物論化、および「生産関係は必ず生産力に照応する」なる定式化のもと、プロレタリアートの革命的実践を「階級闘争の発展法則の認識」に解消し、前衛党を「発展法則の認識者」としての

党」に転落させた。そうすることでスターリン主義は、プロレタリア内部にしのびこむあらゆる右翼日和見主義潮流を助長する根拠を形成したのである。以降のスターリン主義と右翼日和見主義の結合はただ、現代過渡期世界を止揚せんとする革命的プロレタリアートと革命党にたいする、「過渡期世界の維持」を基本的立場とする反革命いがいのなにものでもなくなった。

スターリンによるコミンテルンの解体以降、スターリン主義のもつ根本的な誤りは、帝国主義心臓部の革命運動と、被抑圧民族の解放運動にたいする敵対をつうじて増長され、スターリン主義は社会帝国主義へと成長した。いまや全世界の帝国主義下階級闘争にとって、そして反帝民族解放闘争にとって、自己の闘争を社会主義革命の勝利へと発展させる道は、ソ連共産党をはじめとするこの社会帝国主義との闘争なくして、まったく不可能であることがますます鮮明となっている。全世界の革命的プロレタリアートは、社会帝国主義との国際的党派闘争の前進のただなかに世界党を建設し、各国の革命党をその一支部に改組し、一国の革命権力を世界プロ独の一構成要素に発展せしめる壮大な事業への本格的着手によってはじめて、八〇年代を革命的にきりひらいてゆくことができるのである。

六〇年代、七〇年代世界において「社会主義の展望と革命の正義」の実態的基準を構成した中国とベトナムの現状（中国＝ベトナム戦争）は、民族国家間戦争という閉殺された外皮の背後に、世界党建設・世界プロ独のための新たな国際党派闘争の噴出としてとらえきられねばならない。革命的プロレタリアートは、ブルジョアジーの反社会主義的宣伝から大衆を奪還するために、この事態にたいしてプロレタリア国際主義の実践的原則を対置せねばならない。

現代過渡期世界における国際階級闘争の最高の問題として噴出した中国＝ベトナム間国際党派闘争を、その民族国家間戦争形態という外皮のなかでとらえ、これに驚天し、みずからの反レーニン主義、小ブル民族主義を暴露し、中国支持やベトナム支持という立場をひそかに自国帝国主義の免罪にむすびつける反プロレタリア国際主義者たちとの闘争が重要である。ソ連社会帝国主義との闘争を放棄するものは批判されねばならない。同時に反ソ社帝の名分のもと、米日欧帝国主義との闘争を放棄するものは批判されねばならない。また反スタトロツキズムの立場から、現実の国際党派闘争のなかに世界党・世界プロ独の実践的基準をとらえきることができず、したがって国際階級闘争の進撃路をふみはずし、世界革命を空論化し、日本階級闘争を一国主義にとじこめる反スタ主義者との原則的党派闘争が組織されねばならない。

中国＝ベトナム戦争にしめされた国際共産主義運動の新たな大激動を、民族国家間対立のなかに終息させてしまうのか、あるいは公然たる社会主義の勝利をめぐる国際党派闘争へと発展させてゆくのか、これが問われている。そしてこの国際主義の実践的基準としっかりと結合して、当面する日本プロレタリアートの政治路線が鮮明にされねばならないのである。

(三)

日本帝国主義は資本主義の根底的危機に直面した。それは生産の無政府性の増大、市場の狭隘化、市場再分割戦の激化という資本主義の不可避的結果であるとともに、全世界の反帝民族解放闘争の爆発的前進、そして強搾取強収奪にもとづく国内人民の反撃の増大というきわめて今日的な情況によっておいこめられた支配の危機である。帝国主義にとってこの危機からの脱出の道は、帝国主義間市場再分割戦にかちぬくこと、反帝民族解放闘争を圧殺することといがいにない。この目的のた

めのゆいいつの手段は、侵略反革命戦争と国内人民の排外主義的組織化、民族解放―社会主義勢力の包囲・社帝化の策動にある。ここに現下の日帝の攻撃はその姿をあらわす。

それはまず侵略反革命戦争遂行体制の完備、国家暴力装置の独自的強大化、階級闘争の要たる革命党建設の破壊、およびありとあらゆる手段を駆使しての排外主義の育成、ファシズムの育成である。そしてこれへの同意を条件に、社会帝国主義者たちを政府権力内にむかえいれる可能性をちらつかせる。かくして帝国主義の本性は、中間連合政府という幻惑のベールをまとおうとする。完成された社会帝国主義党と、これを補完する現代カウツキー主義者としての右翼日和見主義党派の共通する政治的任務は、この中間連合政府の幻惑に人民をひきずりこみ、資本主義とブルジョアジーを擁護し、帝国主義国家権力と帝国主義主要路線への忠誠を誓うことにある。

だから問題はこうなる。こんにち革命的プロレタリアートは、中間連合政府攻撃をプロレタリア独裁のための社帝・右翼日和見主義との党派闘争の問題としてとらえ、これと路線的に対決してゆくことなしに、自国帝国主義打倒にむけたいかなる革命的政治闘争をも組織できないこと、これである。

危機にあえぐ日帝にとって、中間連合政府攻撃の一時代がファシズムの準備としての一時代であることは、三〇年代をふりかえるまでもなく、こんにちの西独帝などの動向のなかにはっきりと見てとれる。中間連合政府攻撃との闘争は、ファシズムとの闘争の今日的な要でもある。ファシズムとのたたかいは帝・社帝の中間連合政府攻撃との闘争という政治攻防のただなかに、プロレタリアートを中央集権非合法党の建設、武装蜂起―プロレタリア独裁の路線のもとに組織することにある。このようにたたかうことのできぬものは、直面する権力をめぐるたたかいからかならず逃亡し、好むと好まざるにかかわらず中間連合政府の補完物へと転落するのである。

(四)

現下の階級闘争を革命へと領導すべき革命的プロレタリアートが、建設すべき前衛組織は、赤軍とソビエトを準備しきる中央集権非合法党であり、「正規の攻囲軍」―「武装せる革命の伝導路」へとプロレタリア大衆を組織する非合法細胞である。

それは「党建設と階級形成の二元、党組織と階級組織の二元的分離」の立場からこれを否定する右翼日和見主義との、断固たる闘争の遂行をつうじてうちきたえられる。この「二元論、二元的分離」なる日和見主義は、スターリン主義組織路線とトロツキー・ソビエト組織論という同根の誤りに発生の根拠をもち、それは経済主義の組織への反映なのである。この同根の日和見主義組織論の根本的性格は、「階級闘争の道具としての党」論、したがって階級闘争の主体としてのプロレタリアートが、階級闘争の道具へと転落し、階級闘争の道具としての労働者の国家が階級闘争の主体へと自己目的化するところの反レーニン主義である。

レーニンの党は、右翼日和見主義との党組織と階級組織をめぐるたたかい、およびトロツキー主義とのこの面でのたたかいをとおして、その組織路線をあきらかにしてきた。それは右翼日和見主義の、自然成長性に党組織建設をゆだねようとするくわだてとの、そして階級の最高の団結の質と形をソビエトにもとめ、党をその指導機関におしとどめようとするトロツキー主義との闘争であった。

ソビエト的団結に階級の最高の団結を下落させ、プロレタリアートの党をその道具・指導機関であるとするトロツキーのプロレタリア組織論にひそむソビエト主義は、戦術上の差異をのりこえて、結局はスターリンによるプロ独のソビエト主義的定式化にのみとまれてしまう。それはいかに同情的にみようとも、プロ独をソビエト的団結の発展である一国の労働者権力の政策の問題にきりちぢめ、プロ独への現実の大衆の参加をしゃ断し、権力奪取後、その権力を道具として組織されるもっとも激烈なプロレタリアートの階級闘争を否定することに帰結する。プロ独は、革命への準備期と権力奪取後をつらぬく、ブルジョアジーと資本主義の暴力的打倒をかかげたプロレタリア階級闘争の内実である。それは権力奪取前後をつらぬいた前衛党とプロレタリア大衆との直接的結合を組織する、革命党の目的意識的な階級闘争指導の内実である。

建設すべき前衛党は、プロレタリア階級の階級的団結の最高の質と形として戦取されねばならない。それは階級闘争の前進を物質的条件として、階級の最後的死滅という歴史的任務を終了するまで変革され前進させられてゆくであろうが、八〇年代の党建設の進路は武装蜂起の条件を階級の能動的実践によって戦取するという基準で確立されていかねばならない。それは党による赤軍とソビエトの建設への原則的着手を意味する。

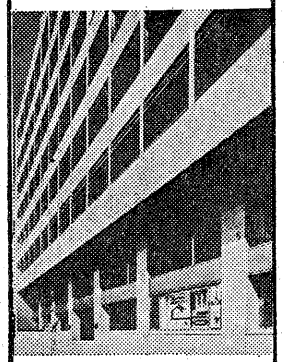
こんにちのソビエト主義者たちは、労働組合のなかにソビエトを転落させ、赤軍をソビエトの武装に転落させる。それは計画された全国一斉武装蜂起と内戦を、その一補完戦術にしかすぎないゼネストと、大衆的高揚の自然発生的状況にすぎない暴動に転落させる彼らの政治戦術の別側面である。

ソビエトが革命家によって発明されたものでも、共産主義者の組織でもないことは当然である。ソビエトは革命のるつぼのなかから発生する革命的大衆の団結であり、その内部に武装蜂起とプロ独の機関としての質と形を自然発生的に内包する、大衆の「革命のための組織」である。だからそれは労働組合とそのたたかいの外部に、先進的プロレタリアの革命的政治的決起の成果としてはじめて組織されるのである。

だがしかし、ソビエト的団結の自然成長のうえに武装蜂起とプロレタリア独裁の勝利が可能であると夢想することはできない。スターリン主義は、一七年革命によって樹立されたソビエト権力を世界革命の機関へと発展させるのではなく一国権力の国家体制のなかに閉殺した。それはソビエトのもつ地域的階層的保守性、防衛主義的限界にたいするスターリン主義の拝跪、反動的定式化固定化の帰結にほかならなかったのである。

「革命軍と革命政府、これは一個のメダルの

東関東を地盤に
関西・東北を
ネットする



常陽銀行

本店　水戸市南町2丁目
頭取　青鹿明司
店舗数　108か店

両面である。これは蜂起の成功のために、そして蜂起の成果の確立のために同じように必要な二つの機関である」。一九〇五年の大激動にさいしレーニンは「革命軍と革命政府」を「ゆいいつの徹底的な革命的スローガンである」といった。それは激動へとたちむかう、こんにちの革命的プロレタリアートにとって、ソビエトの建設にくわえ赤軍の建設が同じように革命的実践問題としてかかげられなければならないことを教えている。しかし赤軍と革命の軍事をめぐる問題は、歴史的にも大きな党派的分岐をはらんで存在しつづけてきた。

右翼日和見主義のいく割かは、たくみにもプロレタリアートの武装を口先では認める。だが革命的プロレタリアートは「プロレタリアートの武装」という一般スローガンを、赤軍の建設に関する自己の任務としてしかあつかわない。武装蜂起をまじめに考えるものにとって、プロレタリア大衆の武装、そのもっとも成熟したものであるソビエトの武装は、蜂起の成功のための不可欠の条件である。にもかかわらずあらゆる革命の教訓は、近代的なブルジョア国家暴力装置の打倒のための階級の武装が、ソビエトの武装にとどまるかぎりはかならず惨敗することを教えている。ソビエトのもつ組織的本性そのものの限界ゆえに、「ソビエトの武装」がもたざるをえない軍事的限界をこえて、もっともかたく階級的政治的団結を内包した革命の正規軍＝赤軍が建設されねばならない。

レーニン主義党の軍事は「権力奪取のための政治闘争の最高の発展としての武装蜂起」「ブルジョアジーにたいする世界的追撃戦としてもっとも激しい階級闘争の一時代であるプロレタリア独裁」という原則的見地にもとづいて、プロレタリア階級の政治的団結を階級的暴力として組織し発動するために必要とされる赤軍の、階級的任務を定めることにその基礎がすえられる。それはスターリン主義の立場、「軍事は政治に従属する。赤軍は政治目的遂行のための技術的・物理的機能である」という、革命の軍事と赤軍から階級闘争という性格をぬきさったブルジョア軍事理論と真正面から対立する。それはクラウゼビッツ軍事理論テーゼ「戦争は他の手段をもってする政治の継続にすぎない」のマルクス主義的批判摂取とは無縁な、ブルジョア軍事理論としてのクラウゼビッツへの解体である。スターリン主義のこの見地は、階級闘争としての革命戦争と、階級闘争の最高の部隊として党によって組織される赤軍を、一民族国家の民族的利害のための戦争とその物理的手段に解体することにいきつく。

スターリン主義を根本的に批判しえないがゆえに、軍事を主張する日本のいくつかの党派、革共同中核派に代表される部分は「プロレタリアートの武装」という点においても、また厳としてスターリン主義の枠内にあることが批判されねばならない。中核派はいう。「ブルジョア国家権力、さらにスターリン主義国家権力、または、革命的労働者国家においては、軍隊は国家権力の実態的構成部分として軍隊としての軍隊を形成しうるのであるが、革命党における軍隊は権力奪取にいたるまで、建党を基軸的媒介としてはじめて形成しうるのである」と。ここではまず、結論的に赤軍そのものが階級闘争の主体であり、革命の継起する諸段階、蜂起―プロ独―共産主義の全過程において、赤軍は階級闘争の総体をもっとも主体的ににないきる先進的プロレタリアートの階級部隊であるという、他の軍隊とはことなる政治的性格が否定されている。中核派のいうごとく、赤軍建設を権力奪取までは党が媒介し、権力奪取後はそれを国家権力機構化するのではなく、権力奪取後こそますます党の直轄指導する赤軍として、革命の軍隊として指導されねばならないのだ。

われわれのなすべき中央集権非合法党の建設戦は、プロレタリア階級の赤軍とソビエトを準備する組織の建設を、その実践目標に定めてはじめて、資本主義の危機を革命的危機に転化し、武装蜂起―プロレタリア独裁の勝利を実現しうる前衛党建設戦として前進することができる。その第一歩は、人民の戦場のただなかに送りこまれた非合法細胞と、先進的プロレタリア大衆のかたい結合を環として形成される「武装せる革命の伝導路」の建設をもって、はじめて着実な前進をなしうる。

「武装せる革命の伝導路」は、大衆の決起、大衆の経済的民主主義的決起のいっさいを、ねばりづよく系統的に、帝国主義・社会帝国主義の支配への真正面からの反撃へと領導する、大衆の政治的前衛として組織されねばならない。またそれは、公然たる領域を最大限に活用しうる非合法組織として、さらに大衆の軍事的要請にこたえうる軍事組織としてみずからを建設しなければならない。

プロレタリアートはこうして、自己の前衛党建設と八〇年代階級闘争の政治的任務をになう武器を、しっかりとその手に握りしめてゆくであろう。

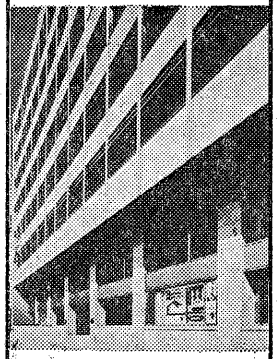
(五)

革命的危機への移行の時期―いま八〇年代が幕をあけようとしている。この全時期にわたる革命の根本的準備をただちに開始しよう。帝国主義・社会帝国主義の中間連合政府攻撃による階級闘争の制圧をうちやぶり、侵略反革命を内戦に転化する鉄のレーニン主義党建設の歴史的事業に全プロレタリア人民は結集せよ。人民の自然発生的な決起と流動と分解、このただなかに革命の伝導路をうちたてよう。大衆の内部から革命への鮮明な水路をきりひらこう。

八〇年代階級闘争の成否をかけて、八〇年安保粉砕、三里塚二期工区決戦勝利、労働運動の産報化粉砕の全人民的たたかいに、ともにたちあがろう。

八〇年代を共産主義者同盟（全国委員会）とともに進撃せん。

東関東を地盤に
関西・東北を
ネットする



常陽銀行
本店　水戸市南町2丁目
頭取　青鹿明司
店舗数　108か店

激動の八〇年代に向け
マルクス・レーニン主義党を建設せよ

共産主義者同盟（全国委）
マルクス・レーニン主義派

戦争と革命の要素の増大

一九七九年は、まさに八〇年代を暗示する年であった。二月にイランにおいてパーレビ体制が打倒され、七月にはニカラグアでソモサ政権が打倒された。そして十月二十六日には、アジアの「韓」国において朴が倒れたのである。これらのことは、八〇年代が、各国の独裁者、そしてそれを支える帝国主義のうち震える時代であることを示している。

七〇年代は、「相対的安定期」の終焉をもって開始された。それは、七一年の「ニクソン声明」をもって明らかになったのであった。いわゆるＩＭＦ体制、ドルの世界支配は、アメリカ帝国主義の圧倒的な力量の上ではじめて可能であった体制であり、アメリカ帝国主義への尨大な金の集中をもって構築されたものであった。それは、決して第二次帝国主義戦争以前のような「ブロック経済」を止揚する永久的な体制ではなく、前述したような条件の下でのみ存立しえたのであることを「ニクソン声明」は明らかにしたのである。

アメリカ帝国主義のドルたれ流しによるインフレの高進は、石油価格の大幅引き上げを惹起し、「石油ショック」として各帝国主義の「スタグフレーション」構造を露呈せしめた。すなわち、各帝国主義は、もはやその進歩性を喪失し、頽廃期にはいっていることが明らかになったのである。それ以降の長びく不況は、その証左に他ならない。

ドル危機は、いうまでもなくアメリカ帝国主義の世界支配の後退によってもたらされたものである。ドル危機は、アメリカ帝国主義をして一層新植民地支配の強化へとかりたてたのであったが、それは民族解放闘争の前進によって苦況へと陥ったのであった。ドル危機と民族解放闘争は、相乗的にアメリカ帝国主義の世界支配を揺り動かしたのであった。

インドシナでの革命の勝利とアメリカ帝国主義の敗退は、アメリカ帝国主義を〝憲兵〟とした戦後世界体制、いわゆるヤルタ・ジュネーブ体制を突破した意味で画期的であった。民族解放闘争は、アジア、アフリカ、ラテンアメリカにおいて前進し、アメリカ帝国主義を筆頭とする帝国主義に痛手を与えたのである。

また、帝国主義の原料供給地として「モノカルチュア経済」を強制されてきた諸国においても、帝国主義に対する反応が開始されてきた。それらは、エネルギー資源の豊かな国と乏しい国、民族ブルジョアジーの性格の相違などによって分化を不可避としているが、帝国主義の横暴に対しては反対しているのである。

そればかりではない。帝国主義本国においても、長期化する不況の中で労働者階級の状態は悪化し、闘いへと決起し始めている。イギリスでは七八―七九年にかけて、自動車、運輸・港湾労働者などの大規模なストライキ、西ドイツでの五〇年ぶりの大争議となった鉄鋼労働者のストライキ、フランスでの工場占拠、アメリカでの炭鉱スト、等々、帝国主義諸列強の労働者の闘いは燃え広がりつつあるのである。

アメリカ帝国主義は、イラン、ニカラグアの革命に直接介入することはできなかった。だが、このことは、帝国主義と被抑圧民族の対立が緩和したことを意味しない。否それよりも、一層巧妙なかたちで帝国主義による新植民地支配は強められるであろう。ソ連社会帝国主義は、民族解放闘争をある意味では利用して再分割戦へ乗り出し、攻勢をかけてきている。国家的独占に依拠するソ連社会帝国主義は、独占固有の矛盾を強め、それ故にまさに帝国主義と同じような衝動にかられ、再分割戦に参戦してきているのであるが、このことは帝国主義をして、まき返しと対立・抗争を強めずにはおかない。

経済対立は、資源確保、先端技術、資本輸出などをめぐって一段と激しくなっている。資源の独占は、（社会）帝国主義にとって不可欠のものであり、その力を最も左右するものに他ならないからであり、先端技術は、わずかばかりの可能な生産諸力の発展をもたらすものであるからであり、資本輸出は、過剰資本のはけ口として必要だからである。

更にまた、民族解放をかちとった諸国間においても階級闘争が発展し、対立をもたらしている。ベトナムのカンボジア侵攻、ベトナムのソ連との協調と中国との抗争など、これらは社会主義建設をめぐる路線上の争いであり、広い意味では、修正主義と反修正主義の闘いに規定されているものである。

以上のことは、まぎれもなく戦争の要素が増大していることを示している。このような情勢下で、軍事的怪物へと肥大した帝国主義や社会帝国主義の軍縮交渉は、現存する巨大な軍備を追認し、「平和」的ポーズをもって世界の労働者、被抑圧民族の隷属を強いるものでしかない。

世界的に革命闘争が前進する一方、他方で帝国主義、社会帝国主義の抗争が激化し、戦争の要素が強まってきているというのが、今日の世界情勢の根本的な特徴である。七〇年代は、このことをもののみごとに示してくれた。八〇年代は、このことが一層明らかとなり、決戦的時代となるであろう。

日本帝国主義の現段階

国内の情勢もまた、世界的な戦争と革命の時代ということに規定されていると同時に、日本帝国主義自体が戦争と革命の時代の一要素である。

日本経済は、七〇年代初頭の世界的恐慌とそれ以降の不況のなかで、「高度経済成長」の破綻を如実に示した。「総需要抑制策」は、日本経済の危機が過剰生産にあることを明らかにし、それはインフレ政策と「総需要抑制策」のくり返しによってしか推持しえない段階に到っていることが明白となったのである。このことは、日本資本主義が、まったく進歩性を喪失し、頽廃を深めている時代へと突入したことを意味している。

ブルジョア・エコノミストが口にする「産業構造の転換」とは、第二次産業から第三次

産業への資本の移動と、過剰資本そのものの整理と統合をその主な内容としているのであるが、前者は、拡大再生産の構造の不調、すなわち、寄生性、腐朽性を反映しているものであるし、後者は、不況カルテル等、それ自体腐朽性を意味するものであり、それらが国家主導によって遂行されているということで国家への依存を通じて資本の寄生化が進行しているのである。そればかりではない。大型赤字財政による資本の救済は、寄生性、腐朽性を一層強めざるをえず、さらに、「一般消費税」の導入など、資本のツケを労働者大衆にまわそうとさえしているのである。

未曾有の不況の下で、労働者階級の状態は、相対的にも絶対的にも悪化してきた。政府統計によってすら「完全失業者」は一貫して百万人台にあり、半失業者をふくめるならば六百万人をこえる状態にある。資本は、これまで、つねに最低限の労働力をもちいて剰余価値をむさぼってきたのであり、今日の「過剰」労働力は、とりもなおさず資本の過剰によって形成されたものである。

失業をまぬがれている労働者にしても、地獄からぬけだせたわけではない。合理化のなかで労働は強化され、不況を口実に賃金は引き下げられているのである。しかも、公共料金などのあいつぐ値上げ、さらには増税攻撃と労働者大衆の生活は、もはや耐えられない段階まできているのである。

日本資本主義の頽廃はまた、資本家階級の腐敗としても露呈している。この間の航空機疑獄、一連の汚職は、金融独占資本家階級に不可避のものであり、日本資本主義の頽廃を反映しているのである。

このような状態のなかで、ある意味ではこのような状態であるがこそ、日本帝国主義は侵略と反動、抑圧を強めている。レーニンは、「もし資本主義が、現在いたるところで工業よりもおそろしく立ちおくれている農業を発展させることができるならば、またもし、めまぐるしい技術的進歩があるにもかかわらず、いたるところで半飢餓の状態にとりのこされている住民大衆の生活水準を資本主義がひきあげることができるならば――その場合には、もちろん、資本の過剰などということは問題となりえないであろう。そしてこのような〝論拠〟は、資本主義に対する小ブルジョア的批判者たちによってたえずもちだされている。だがそうしたときには資本主義は資本主義でなくなるだろう。なぜならば、発展の不均等性も、大衆の生活の半飢餓的な水準も、ともにこの生産様式の根本的な不可避な条件であり、前提であるからである」（『帝国主義論』）と述べているが、日本帝国主義においても過剰資本は輸出へとふり向けられている。それは、「韓」国、ASEAN諸国の新植民地支配を形成しているのである。

そして、このような新植民地支配の強化は、軍事力の増強を不可欠としている。日本帝国主義は、沖縄での「フォートレス・ゲール」などに顕著なように、日米安保体制を強化し、また、独自の有事体制を構築せんとしている。侵略、他民族抑圧の強化は、国内での反動、抑圧の強まりと一体のものであることはいうまでもないであろう。

七〇年代にはいって形成された田中―三木―福田―大平と続く政権は、ことごとくその無能さをさらけだした。

このことは、今日の日本帝国主義の状態に対して、資本家階級が何ら根本的な解決策を有していないことを示している。各政権は、労働者大衆を犠牲にして資本を救済し、労働者大衆の憤激を抑えるという一点において共通した任務を持っていたのであった。それは、これまで通りの体制ではやっていけないということを意味しているのであり、八〇年代は、まさしく階級激突の時代とならざるをえないのである。

諸政党の動向

自民党は、いうまでもなく独占資本家の政党であり、広汎な中小企業家、商人、農民、寄生的な官僚、ブルジョア・インテリゲンチャ（学者、知識人、医者等）、地主などをもその支持基盤とするものである。自民党は、「農地改革」による自営農の産出とその保守性、土地所有者意識に依拠するとともに、「高度経済成長」によってその支配を支えてきた。つまり、独占資本の利益を代弁し、独占資本の利潤の一部をばらまくことで、小ブル階級やおくれた労働者の幻想をかき集め、自らの支配を推持してきたのであった。

だが、資本主義の発展とともに労働者はもとより、小ブル階級は不可避に分解を余儀なくされ、自民党の支持層たりえなくなってきた。自民党の傾向的低落は、このことを示しているのであり、日本資本主義の頽廃に伴う金融独占ブルジョアジーの腐敗は、それに拍車をかけているのである。自民党は、ますます独占資本家だけの党へと純化する傾向を避けることはできず、しかも支配の方法をめぐる対立などによって、一層後退せざるをえないであろう。

新自由クラブは、自由主義的な資本家階級の政党として形成されかけたが、自民党の別動隊としての本質が明らかとなり、内部分裂によって衰退しつつある。

公明党は、中小零細企業、小商人、一部のおくれた未組織労働者を基盤とする反動的小ブルジョア政党である。公明党は、独占資本の専横に反対する限りで「反独占」であるが、自己の存在がおびやかされるとして、それよりも一層労働運動の前進に敵対する小ブルジョアジーの反動的側面を代表している。「現世利得」を説く創価学会に加入している未組織労働者は、自己の肉体的、精神的摩滅のためにそれにすがっているのであるが、中小企業を中心とする幹部連中に従属し、組織的かせのなかで政治的立場の「解消」を強いられているのである。

民社党は労働貴族の政党である。民社党が「高度成長」下の六〇年に結成されたことは同党の性格を的確に示している。「高度成長」のおこぼれによってブルジョアジーに買収、育成され、その尖兵としてブルジョア的労働者政治を駆使して、労働者を堕落させることのみをその使命として民社党は存在してきたのである。

民社党と公明党は、独占資本の専横には反

対するが、資本主義の改良しか考えず、労働者階級の革命を恐れ、しかも双方とも階級対立を「超越」したいと望んでいる層に依拠しているという点において同盟しうるのである。

社会党は、小ブルジョア的改良主義の政党であり、その基盤は、小ブルジョア化した労働者、ホワイトカラー、知識人、文化人である。社会党は、その構成からいっても、そのイデオロギーからいっても、民社党と共産党の混合物である。それ故に離合集散をくりかえし、自壊を進行させてきたのであるが、最近の「社公」路線は、社会党が一層民社党よりになってきたこと、すなわち、労働貴族、小ブルジョアジーに追随する方向に進んでいることを満天下に示したと言える。

共産党は、小ブルジョアジー＝農民、中小企業、一部の労働者、医者、弁護士、学者を基盤とするブルジョア修正主義、改良主義の政党である。共産党は、ブルジョアジーに承認される政党になるために「マルクス・レーニン主義」「プロレタリア独裁」を放棄してきた。共産党は、「中道」を批判はするが実際上はそれと変わらず、「よりましな政府」構想などをもっていよいよブルジョア化せざるをえないであろう。

七〇年代、とくにその後半の政局と、諸政党の動向を見て明らかなことは、第一は、「相対的安定期」の体制、いわゆる「五五年体制」（それは政党的には、保守および社会党の合同、そして共産党の六全協によって画される）が崩壊したことである。

第二に、自民党が没落しつつあるにもかかわらず、各既成政党がこぞってブルジョア独裁の支柱にならんとしていることである。「連合政権構想」こそその指標に他ならない。

このような政党の動向と足並をそろえて、ブルジョア組合主義が主導する労働戦線の統一が進行している。これは一言で言えば、労働運動の「産報化」の途と言って過言ではない。労働者が多かれ少なかれ、公明党や民社党、そして社会党、共産党にひかれているという状態は、労働運動の前進によってのみ克服することができるし、それはブルジョア組合主義と闘うことを通してはじめて可能である。

今日、経済的危機に伴う階級対立の激化のなかで、端緒的にではあるがブルジョア組合主義からの先進的労働者の離反が進んでいる。それは、全造船鶴見のような新組合結成による同盟からの離反と闘争や組合大会での執行部批判という形で、総評においても当局に屈伏する民同への反発と闘争という形で、さらには下請・臨時工組合の結成という形で、等々、様々な形をとって八〇年の労働運動を創出する基盤ができつつあるのである。

労働運動は社会主義と結合されなければならない。経済闘争は政治闘争と結びつかなければならない。新たな政治闘争の時代に向け、プロレタリア革命党を建設せよ！

革命政党の任務

革命政党の国際的任務は、帝国主義、社会帝国主義のあらゆる支配に反対し、革命勢力の闘いを支持し連帯することである。国内的任務は、ブルジョア独裁を打倒し、プロレタリア独裁を樹立することである。それは、日本に常駐している米（帝）軍をも一掃することを含むであろう。

革命政党は、この任務の遂行のために、全国的、全人民的政治新聞を基盤に、徹底した宣伝、煽動、組織化の活動を推進しなければならない。そして、そのためには、真のマルクス・レーニン主義者の団結が必要となるであろう。

現在、構改派や毛派のみならず、共産同系のなかにおいても党派の再編、統合が進行している。それ自体は、いわゆる新左翼といわ

れるなかから、労働者人民の闘いに真向から敵対してきている革マル派はもとより、それ以外でも第四インターのように社共の尻押し団体化した部分などを生みだしており、多くは小ブル急進主義を克服しえていないことを考えれば、それなりの評価をしうるものである。

だが、共産同系の再編、統合は、共産主義者同盟の全組織実践をいかに総括し、その小ブル的弱点を止揚するのかという点を中心軸にしなければならず、それを基底とした綱領上、戦術上、組織上の統一によってはじめて組織的統合がかちとられるものである。

そのようにして見た場合、今日の統合の動きは、特にその総括論議において御都合主義的なところが見うけられるであろう。

共産主義者同盟の総括は、〇〇がなかったとか、あるいは、〇〇は正しかったが〇〇が間違っていたとかいうような部分的、かつ一面的なものたりえない。少なくとも、中央集権主義を口にしていた共産同が何故に分裂に分裂をかさねなければならなかったのか、労働者大衆の戦闘的エネルギーをひきだし、牽引したにもかかわらず何故その成果を組織的に蓄積しえなかったのか、これらの点についてより一層煮つめなければならないのである。

わが同盟は、単一党建設へ向けたこのような努力を惜しむものではなく、積極的に推進するつもりである（『鉄鎖を砕け』№3参照）。

八〇年代は、文字通り、戦争と革命の激動の時代となるにちがいない。南朝鮮労働者の闘いは、まさにその先鞭を切ったと言えるだろう。

そのような時代に、あらゆる火花を集中し、革命の炎として燃え広げなくてはならない。そのためには、あらゆる事態にたいする準備をもった革命政党こそが必要なのである。

すべての先進的労働者は、わが同盟に結集し、革命党建設の事業に身を投ぜよ！

一月十五日発売!!
マルクス主義の運命
竹内芳郎 著
■A5判上製・函入／三二〇〇円
二十数年にわたるマルクス主義論研究の全貌をマルクスにおける人間の問題を中心としながら集大成しマルクス主義の運命と未来を論ずる畢生の論攷

鶴見俊輔論
菅孝行 ■四六判上製・カバー装／一八〇〇円
コミュニケーション論を中心に、戦中のアメリカ体験から現在にいたる鶴見俊輔の思想的営為を、詳細な補註を付しながら克明に論評する

戦後世代の風景
1964年以後
松本健一 ■四六判上製・カバー装／一六〇〇円
六四年以後確実に変貌していった戦後社会の文化状況について、時代感性を豊かにたたえた戦後生まれの著者がみごとにえがきあげている

第三文明社 東京都千代田区猿楽町二-五-四 ☎〇三(二九四)八七三一

八〇年代革命的労働者の任務

共産主義者同盟赤軍派（プロ革）

79年は、73年石油危機以後の米帝等の〈景気浮揚〉のための政治経済政策が大きく動揺頓挫し、停滞的な景気の上昇局面が終り、新たな景気の後退―スタグフレーションが極度に深刻化するなど、資本主義世界の全般的危機を一層発展させた。

この動揺の主因はイラン・ニカラグア革命の勝利等中国・第三世界人民の反覇権〈民族独立〉〈平和擁護〉の戦いの前進である。

とりわけ日本資本主義にとっては、経済的犠牲基底であり、アジアの民族解放民主主義社会主義革命の波の防波堤である「韓」国での79年春以降の革命の高揚・十月の朴射殺事件等維新体制の危機は、決定的衝撃となった。

我々はここで79年から80年代への日本資本主義の分析をやり、80年代に向けての革命的労働者の基本任務を明らかにする。

(1)79年から80年代への日本資本主義

日本政府は、79年度「経済白書」で「企業収益の改善―増収増益」等を理由に、73年以降の長期の不況を脱して安定成長の軌道についたと宣言した。

しかし日本経済のこの「安定成長」は極めて不安定な内外の政治経済体制の上に成立していた。

73年石油危機・75年ベトナム革命勝利は戦後米帝一元体制を解体し、資本主義世界は戦後最大の過剰生産恐慌におそわれた。この間隙をついて、ソ社帝による全世界での米帝市場へのなぐりこみ・ソ米覇権争奪・世界戦争の危機が増大し、ソ社帝主導で「三つ巴」「三つの世界」が現出した。

米帝カーターは、この事態に中国の反社帝闘争の前進に便乗し〈対ソ主敵・第三世界宥和〉人権戦略をとり、ソ社帝に一時的であるが政治的優位を確保した。これを軸にイランパーレビ体制にてこ入れし、ペルシャ湾の警察とし、イスラエルと枢軸させつつ中東の安定支配を確保し、その上で膨大なドルのタレ流しで大量で安価な石油の収奪をやり、米帝等の景気浮揚の保証として来た。

日本資本主義は、米帝の景気の回復と、ドルタレ流し政策による円高不況圧力の中で、天皇制ファシズム権力再編をてこに総需要抑制の不況政策を基調に産業構造の再編―合理化・賃金抑制攻撃を徹底し労働生産性を高め、国際競争力を強化し米帝やECへの集中豪雨的輸出攻勢をかけ、輸出主導型で〈景気の上昇〉局面に入った。

しかし77年末からのドル全面安の国際通貨危機、IMF・GATT体制の崩壊、78年からの今回の景気浮揚の最大の犠牲集中点であるイラン革命・中東第三世界人民反覇権の政治経済攻勢、再度のソ社帝―キューバ・ベトナムによるアフリカ・カンボジア等全世界での覇権侵出の強化等その政策自身の矛盾が爆発して解体した。

米帝はイラン革命勝利以後の中東―世界支配の動揺を、米中国交樹立をやり、エジプト―イスラエル平和条約・東京サミットを起点に再攻勢にうって出んとした。しかし6月OPECの原油大幅値上げ・第二次石油危機・イラン・中東の反米闘争の激化で失敗し、資本主義世界はインフレの加速の中で米帝を筆頭に景気後退局面に転落してしまった。

日本資本主義は78年～79年の米帝のまきかえし戦略を支持し、貿易戦争―帝間矛盾が激化する中で78年79年予算で赤字国債の大量発行を基礎に超大型景気刺激策をとり、財政危機を内包しながらであるが一息ついた。

これが内需主導型安定成長路線の確立という79年度「経済白書」の内容である。

しかし79年に入り日本資本主義も、ソ社帝の南侵威迫―北方四島軍事基地化―にさらされ、「韓」国革命の高揚、第二次石油危機の到来の中で、財政危機が一挙に表面化し、物価の高騰を引きがねに暮から来年にかけて景気の後退が確実視されるなど「安定成長」路線がふっとんでしまった。

大平は10月衆院選において、78年から79年にかけての一時的な景気の安定を基礎にした「保守復調」政治傾向に乗じ、自民党の安定多数を確保し、天皇制ファシズムの一挙的展開をてこに、財政危機・景気の後退等を「一般消費税」の導入等大衆収奪を強化して乗り切ろうとした。しかし危機の深化の中での支配階級―自民党内部の対立が激化し調整がつかず、結局公民「共」伸張・社会低落・55年体制の最後的解体の中で敗退し、一挙に自民党内部抗争が激化し、新自由クラブとの野合で大平はやっと政権の座についた。

これに追いうちをかけたのは日本資本主義の相対的安定期の〈安全弁〉であった「韓」国の民主革命の高揚―朴射殺事件「南北分断固定化・維新体制」の解体的危機である。

この衆院総選挙と朴射殺事件は、日本資本主義にとって70年代の相対的安定期・その解体期の政治体制の崩壊と、80年代への危機の深化を予感させる象徴的な政治事件である。

この事態に日本資本主義の政治経済政策は以下である。

部落民・「障害者」等被差別人民、山谷・三里塚等革命的大衆行動への差別・排外主義・テロリズム弾圧の強化と一体となった金融資本のテロ独である天ファ権力再編の強化。

これを実際的力とし、議会での自民党一党独裁体制の解体の一層の進行の中、自公民の連合政権も含む部分連合路線をとり、社会党の分裂を更に促進し、協会や日「共」等社帝を孤立・社帝化をうながし、山谷・三里塚等の革命的大衆行動を孤立させる、なし崩し天ファ―中間連立策動を更に強化する。

これと連動しつつ労働戦線においても、同盟JC・総評民同の社会排外主義者の連合―天皇愛国労働運動を育成。

以上なし崩し天ファの布陣をてこに公定歩合の引き上げ―財政危機による超緊縮予算等不況政策をとり、インフレと大増税・賃金抑制・倒産・首切り・合理化・労働強化・職業病の増大等一切の矛盾の労働者人民の犠牲転嫁で乗り切ろうというものだ。

そしてこれら総体を米帝の世界戦略に従属しつつソ社帝の南侵威迫・「韓」国人民民主

主義革命の高揚に対し、日米「韓」軍事同盟を強化し、対ソ覇権争奪―朝(ア)侵略反革命戦争体制を徐々に構築しようとしている。

(2)革命的労働者の任務

79年初頭のベトナムのカンボジア侵略は国際共産主義運動の分裂を一挙に促進させた。ソ社帝や第四インター系トロツキズム等最も反動的社会排外主義的潮流は、ベトナムのカンボジア侵略・植民地化攻撃を社会主義の前進と考え支持し、ソ社帝の全世界覇権侵出―ソ米世界戦争の危機を世界革命の前進として支持する極悪の戦争挑戦発分子である。

他方これに対抗し中国党・朝鮮労働党等革命的潮流は第三世界人民の〈民族の自決〉の戦いを無条件に支持し、ソ米覇権争奪―世界戦争に反対し〈平和を擁護〉する反覇権闘争を前進させ、これを基礎に資本主義から自立した農業基礎・工業主導・自力更生・有無相通じる社会主義経済関係をつくり上げ、世界革命・世界社会主義・共産主義実現の戦いを着実に前進させている。

そして伊共産党・ユーゴ・ルーマニア等中間的潮流は、ソ社帝の帝国主義・覇権主義の強化に反発し、中国等と連合を強化している。

80年代に向けての革命的労働者の第一級の任務は、この国際共産主義運動の分岐に際し中国党・朝鮮労働党を支持し、〈民族自決〉〈平和の擁護〉を旗印に、日「共」・協会・第四インター、の社会排外主義・侵略・戦争挑発分子を打倒し、日本型反スタトロツキズムの中核派やブント系の中間的潮流を批判・変革し、マルクス・レーニン主義・毛沢東思想を支持するプロレタリア単一党建設の戦いを前進させることである。

このような単一党建設の前進を軸に、「韓」国人民民主主義革命と連帯し、対ソ覇権争奪、朝(ア)侵略反革命(戦争)、社帝を左足とするなし崩し天ファの権力再編に反対し、三里塚・山谷等革命的大衆行動を激発・連合させ、これに広範な民主主義勢力を引きつけ反帝反ファシズム社会主義の隊列を発展させゆっくりと着実に〈武装蜂起―臨革樹立〉に向けて〈正規の攻囲〉を組織してゆくことだ。

(3)80年代に向けての労働戦線の方向

十月の衆院総選挙での社会低落、公民伸張は右より労戦統一にはずみをつけた。

総選挙以後の最大の特徴は、社会・総評の〈社公〉中軸路線への傾斜と、総評・民同の〈国際自由労連加盟問題〉を軸とする同盟労戦統一条件への飛躍的接近である。

次にこの労戦統一問題にあらわれた階級的性格と、それと対抗する革命的労働運動の基本方向を明らかにする。

イ79春闘は総評・民同の右傾化―同盟JC主導の労戦統一・天皇愛国・社会排外主義労働運動形成への飛躍となった。

79春闘は、都知事選の社「共」統一候補・太田の敗北、賃上げも五・九%の超低額・目玉としていた「雇用創出機構設置」要求等制度政策要求もみるべき成果もなく春闘五連敗に終った。

このような春闘五連敗の主体的原因は賃闘の統一要求基準も出さず、産別自決を無媒介に強調し、合理化を容認し、職場生産点でのスト等実力決起には弾圧し、ストなし春闘を策動するなど、労働者間の対立・差別をあおり団結を破壊する賃闘―反合闘争からの逃亡―日和見主義にある。

日本資本主義は長期の不況―体制的危機乗り切り策としてインフレと「一般消費税」の導入等大増税政策をとり大衆収奪を強化し、他方産業構造の再編・賃金抑制攻撃を強化し、産業予備軍の拡大再生産、中小・日雇い未組織下層労働者・被差別人民を極限的集中点とし、広範な労働者人民への差別と貧困、

生命生活破壊を強化して来た。

総評・民同は、このような資本に屈服し、むしろ資本主義の危機を自己の危機とし一体となり、これを積極的に救済せんと労働者の団結を破壊し、中小、日雇い未組織下層労働者を切り捨て差別し犠牲にし、他方動労千葉・本山等革命的労働運動を除名・弾圧してきた。

この79春闘を飛躍台に一段と右より再編をおしすすめ体系化したのが79総評大会である。〈開かれた総評〉を軸に〈経営参加路線〉の導入・〈社会党一党支持見なおし〉〈反自民勢力の結集―中道批判の撤回〉などを主張し、大会では官公労も含む全的統一を内容とした〈四原則七方針〉を撤回し、〈水割りウイスキーになっても〉〈多数派形成のために〉同盟JCとの労戦統一が必要だと主張した。

総評・民同の言う労戦統一の階級的性格を最も鮮明にしたのが六月労働サミットでの「東京サミットへの提言」である。

これは国際自由労連とかの第三世界を犠牲基底とした米帝一元体制の侵略と反革命の翼賛路線を支持し、今回のイラン革命―OPECの原油大幅値上げにともなう石油危機―不況の長期化に際し、米帝のまきかえし政策を支持し、中東・第三世界の一層の犠牲の上で石油問題の解決・資本主義の救済を要求する代物である。

総評民同はこの提言でもって春闘等にみられた戦後労働運動の主流を占めた小ブル民主主義平和主義を解体し、帝国主義超過利潤の伴食者たるAFL・CIO等国際労働貴族の仲間入りをはたし、同盟JC主導で天ファ―侵略戦争の社会的支柱となる〈産業報国会〉的社会排外主義的労戦統一へと一段とはずみをつけた。

ロこのような天ファの攻勢・総評民同の社会排外主義的労働統一策動に対抗し、動労千葉・本山、山谷等中小・日雇い未組織下層労働者・官公労―民間の下部労働者の中から、社会主義をめざす革命的労働運動が着実に成長している。

山谷統一労働組合の戦いは、このような戦いの一つである。

山統労は79山谷春闘―夏祭りを、天ファの攻勢・総評民同の労働者間の差別をあおり団結を破壊し、中小―日雇い未組織下層労働者被差別人民を切り捨て犠牲にする賃闘―反合闘争からの逃亡・日和見主義・社会排外主義の労戦統一と対抗し、天ファの差別・分断・侵略と抑圧の強化に反対し、十三万六千円の最低賃金要求を軸に、山谷労働者の生命・生活を守るために独自の社会・経済的要求を掲げ、山谷労働者をはじめ多数の労働者の結集で戦われた。

現行の最賃法はその第八条(「障害者」の除外)にみられるように、むしろ日本の差別―低賃金構造の制度的保証になっている。

最賃法八条差別条項の撤廃・最賃闘争を軸とした山統労の政策は山谷労働者の生活と生命を守るだけでなく、この最賃の底上げを基礎に社会福祉関係費の一般的全般的上昇と日本の差別・低賃金構造を打破することができるものであり、これは同時に労働者間・下層被差別人民への差別・分断を克服し、官―民、組織―未組織を問わず、広範な労働人民を地域・産別・全国的に団結させうる実践的武器である。

このような戦いこそが民同・社帝・労働貴族どもの組合支配を打倒し、賃金奴隷制廃絶―社会主義実現に向けた政治的団結と戦闘能力を身につける〈てこ〉になる。

ハ79～80山谷越冬闘争が始まっている。

だから全労働者の八〇%にもなる日雇い―中小未組織下層労働者の生命・生活を防衛する戦いに、総評や同盟の下部の革命的労組―労働者の戦いに支援、結合させ、革命的政策

をうちだし、これを基礎に、極少数の労働貴族の利益を代表する社会排外主義的労戦統一との闘いを再編すること、これこそが真に戦う労働者の大団結の思想的＝実践的内容である。

79～80山谷越冬闘争の任務は山谷労働者の生命・生活の破壊・差別と貧困の集中的強制が進行する中で〈共に戦い、めしを食い、社会主義をつくっていく〉戦いだけでなく、広範な労働者の思想的＝実践的結合をつくりだし、天ファとその社会的支柱・社会排外主義者の連合と対決し、80年代に向けての社会主義を実現する革命的労働運動の統一をつくりだす橋頭堡とすることである。

ニこのような総評民同と革命的労働運動の分裂の深まりの中で総評民同・社帝の本質を隠蔽し、この社会主義と資本主義の分裂を和解させようという第四インター等の中間的潮流がある。

かれらの基本的立場は今回の労戦統一の本質を天ファの社会的支柱＝侵略と反革命の戦争準備・社会排外主義者の連合として把握できず、総評民同と同盟の主導権争いの〈対抗関係〉に過度の期待を寄せ、他方山谷等日雇い・中小未組織下層労働者・被差別人民の差別と貧困に反対し社会主義を要求する戦いの中に空洞化した小ブル平和主義民主主義の「国民春闘」路線をもちこみ、解体・分裂・歪曲し、賃金奴隷制廃絶・社会主義の方向でなく、総評民同の社会排外主義的労戦統一の左からの補完物として再編しようというのだ。

結局、これはカウツキー中央派的誤りであり、かれらとの党派闘争は革命的労働運動の防衛団結・発展のための不可欠の戦いである。

(4)プロ単一党建設についての若干の問題

――連赤再総括論争と党内闘争について――

イ連赤再総括論争

まず「無産階級」誌の諸君は、塩見の路線転換にこれ幸いとばかり、連赤は「亡国政府のスパイ謀略政策の結果である」と断じた。

これに便乗した塩見も、同誌に「連赤敗北同志殺し」は「反ソ反侵略民族自衛戦争路線をもたず」「自分と結合しなかった」から「必然的だ」といつまでも変わりもせず傲慢な総括をやっている。

かれらの連赤再総括と路線転換の階級的性格は永田の言動が充分暴露している。

曰く「連赤総括の核心は民主主義革命の不徹底により封建思想を克服できず、これに解体したこと」とした。その舌の根が乾かないうちに「女が共産主義者となるためには男の共産主義者の援助がなければだめだ」とつぶやいている。

実際永田は、自分の小ブル急進主義的リブ的女解論を自己批判すると称して指導部派的夫唱婦随的封建思想に解体してしまっている。

結局かれらの連赤再総括が、連赤全面清算の下での指導部派への回帰・同志殺し居直り論にしかすぎないことが明らかである。

他方今やブント（革命の旗）に合流した高原君等も「ML主義を獲得できず、小ブル急進主義だから連赤敗北は必然だ、全面清算せよ」と主張している。

かれらのいうML主義が「剰余価値の搾取」を否定する反マルクス主義の代物だから自分で言う程大したことではない。

しかし大事なことは、塩見も同様であるが「対立・統一」を主内容とした唯物弁証法を基礎にすえ、連赤の発展＝正しい路線の獲得は連赤自身の実践とその総括論争の中にあること、ML主義とか自称天才の塩見の存在は「玉子にとっての太陽」の副次的なものにすぎないことを無条件に認めることなのだ。

事物の発展のための原動力の主副をこのように転倒するのは、ML主義とは無縁な連赤指導部派と同様の皇国＝英雄史観である。

連赤敗北＝同志殺しは決して〈必然的〉ではない。

かれらのこのような立場は労働者人民の〈武装闘争〉を恐怖する天皇資本家・社帝の階級的・政治的立場である。

ロ党内闘争と組織思想について

塩見はいたるところで、同盟からの脱走＝天ファ小松川署の手をかりた組織解体策動を〈路線転換だからしかたなかった〉と居直っている。

意見が分かれたり、路線転換の度に脱走したり、警察の手をかりて組織を解体したりしていたら、大衆に依拠した、情勢に応じて柔軟な戦術が駆使でき、鉄の規律をもったプロレタリア党がどうして建設できるだろうか？

ML主義・毛沢東思想は組織こそ資本と戦う労働者の最大の武器と教えている。我々は意見の相違・路線転換は組織を堅持し、民主集中制の原則でもって解決し、一層団結を強化していくことができると考えている。

しかし実際塩見のこのような弁解も余り説得力がない。

実のところは、78年春からの三里塚の爆発が予想され、これで自分の保釈が不可能になるのを恐れ〈自分が保釈しなければ階級闘争はすすまない〉等天才論を主張し、三里塚から撤退を命令し、党内闘争では、路線転換以前の路線を「完璧な綱領」とよび、自分を「天才」とし自由恋愛事件の居直りで批判されていた〈妻〉を〈議長代行〉に就任させ、夫婦を組織の上におき、やりたい放題の自由主義をやり、一切の批判を許さず、批判した同志を大量に処分し、自分の保釈のために党が邪魔だとわかるや、さっさと議長自ら突然に脱党声明をだし、あとは小松川署に同盟の秘密をもちこんで多数の同志を逮捕させ、組織解体策動をやる。これである。

今回の党内闘争＝天ファの手をかりた組織解体策動、その言い訳等にみられるのは塩見の7／6以来の一貫し、更にとめどもなく発展しつつある小ブルの絶望と自惚れとの間を動揺する無政府主義・自由主義的体質である。

プロ単一党建設を前進させる、もう一つの大きな戦線は、連赤再総括＝今回の党内闘争の総括を正しくやり、反動的な小ブルメンシェビキ・自由主義と戦い、マルクス主義の原則的資本主義批判に基礎づけられた組織思想を獲得することである。

創
The Tsukuru 1980
2月号 350円

●特別企画＝提言シリーズ第一弾
首都圏農地を宅地に開放せよ 結城三郎
値上がりを待ち、〝見せかけの農地〟で税金のがれを計る〝都市農民〟たちの土地を住宅困窮者たちに開放し、少しでも職場近くにサラリーマン用住宅を建設することが必要ではないのか。

「翔べ！無実の死刑囚たち」－松山事件再審開始決定
「真実はただ一つ」－富士茂子さん死去を悼む
「象をよこせ！」デモの子ども達 ある家から見た戦後史 鎌田忠良

綜合評論社
〒104 中央区銀座1-14-13 東誠ビル
TEL (03) 562-0871 振替133422番

自国帝国主義打倒＝プロレタリア国際主義の旗幟を鮮明にし、建党建軍＝非合法体制の構築に勝利せよ

共産主義者同盟蜂起派

世界革命綱領

世界同時革命戦略とプロレタリア国際主義

我々の世界革命綱領は、世界同時革命・世界プロレタリア独裁・世界社会主義である。

我々が打倒すべき権力は、帝国主義権力とソ連国家官僚権力および中国華＝鄧政権であり、その他の資本主義権力および新植民地・後進国の軍部反革命権力である。

我々が樹立すべき権力は、帝国主義とソ連および中国におけるプロレタリアート独裁であり、その他の資本主義および新植民地・後進国におけるプロレタリアート独裁および勤労者農民ソヴィエトであり、かつまた、全権力を統合する世界プロレタリア独裁である。

世界革命綱領が最後的に樹立せんとする権力は、世界プロレタリアートの独裁である。

世界同時革命戦略は、この世界革命綱領の権力打倒を実現する世界戦略である。そして世界革命戦争は世界同時革命戦略の貫徹形態である。

世界同時革命戦略を実現する共産主義者の主体的力の根拠、即ち、過渡期世界の世界同時革命の思想は、過渡期世界のプロレタリア国際主義の三原則――三ブロックの国際主義の原則――である。

三ブロックの国際主義の原則とは、①先進国プロレタリアートにとっては、レーニン『帝国主義論』によって確定された帝国主義の一切の「祖国擁護」に反対する革命的敗北主義と自国帝国主義打倒の原則であり、②ロシア革命以降の植民地・後進国人民にとっては、レーニンのコミンテルン二回大会における『民族問題と植民地問題についてのテーゼ原案』および『民族・植民地問題小委員会の報告』で確定された植民地・後進国の農民勤労者ソヴィエト論と飛び越し論の二つの命題に基づく後進国革命――民族解放・社会主義革命――の原則であり、③労働者国家のプロレタリアートにとっては、前記『原案』で確定された〝権力を掌握した党とプロレタリアートは世界革命のために最大の犠牲を払わなければならない〟という原則である。

要するに、先進国のプロレタリアート人民は、自国帝国主義の行う如何なる戦争にも反対しあくまでも革命的敗北主義の立場を貫いて自国帝国主義打倒の階級的立場を堅持することが国際主義の原則であり、植民地・後進国の被搾取勤労人民は、レーニンの農民勤労者ソヴィエト論と飛び越し論に立脚して帝国主義の新植民地支配を打倒するために自国民族ブルジョアジーの階級支配を打倒する後進国階級戦争から帝国主義の侵略反革命軍を殲滅して民族解放・社会主義革命を勝ちとる後進国革命戦争を貫徹することが国際主義の原則であり、労働者国家のプロレタリアート人民は、世界革命戦争の利害に国内経済建設の利害を従属させて最大の民族的犠牲を払うことが国際主義の原則であり、この三つの原則が結合されることが、過渡期世界の三ブロックの国際主義の原則なのである。

この三ブロックの国際主義の原則こそ、過渡期世界の国際主義の三原則であり、世界同時革命戦略を共産主義者が現実のものとするための主体的な力の源泉なのである。

それ故、共産主義者が共産主義者であるかぎり、すべての共産主義者は、この過渡期世界のプロレタリア国際主義の三原則――三ブロックの国際主義の原則――を絶対不可欠の実践的原則として承認し、世界同時革命戦略の立場に立ち、この原則に反する一切の党派と国際党派闘争を貫徹しなければならないのである。

国際階級闘争とコミンテルンの総括

この原則こそ、ロシア革命以降の過渡期世界の国際階級闘争とコミンテルンの指導方針を総括しうる唯一の基準であり、同時に、「スタ・ブハ綱領」と「三つの世界論」と「反帝反スタ主義」を批判して、第二次大戦後の現代過渡期世界における世界革命綱領を確立しうる唯一の基準なのである。

即ち、戦前のドイツ共産党の反ベルサイユ闘争に民族の大義を与えてレーニンが強く反対した「ナショナル・ボルシェヴィズム」を肯定し全面化したスターリンの民族共産主義、帝国主義を善玉と悪玉に分けて良い帝国主義と連合するスターリンの「二つの帝国主義論」、そして、ソ連一国社会主義の国防利害と一致する良いフランス帝国主義に対しては独占ブルジョアジーに国防と開戦の大義まで与えておきながらフランスプロレタリアートに対しては社会主義革命への転化とプロレタリア独裁の樹立とを固く禁じて祖国擁護と愛国主義を押しつけ、スペインにおいては私有財産を否定して資本の生産管理を行ったアナキスト、およびプロレタリア独裁を樹立して社会主義革命に進まんとしたPOUM（マルクス主義統一労働者党）に銃弾をあびせて殲滅したスターリンの人民戦線路線、これら戦前の国際階級闘争に対するコミンテルンの指導方針の誤謬を根底的に総括し、更に、ロシア革命の勝利から市場狭隘論と一般的危機論しか導き出せず一国革命論と一国社会主義論しか体系化できない「スタ・ブハ綱領」、現代世界の矛盾を悪い「社会帝国主義」と良い資本主義的帝国主義と後進民族国家との三つの民族矛盾に還元し、二流帝国主義の独占ブルジョアジーとプロレタリアートに祖国擁護民族防衛戦争の大義を与え、一切の階級矛盾を民族矛盾に従属かつ解消する「三つの世界論」、現代世界の基本矛盾を帝国主義とスターリン主義の相互依存・相互反発としてしか把えられず反スタを反帝と同義または第一義にすえる「反帝反スタ主義」、これら戦後の現代世界把握と綱領の誤謬を根底的に批判し、第二次世界大戦後の現代過渡期世界における世界革命綱領を構築しうる唯一の基準は、この三ブロックの国際主義の原則以外にないと言うことなのである。

かくして、戦前の国際階級闘争とコミンテルンの総括および「スタ・ブハ綱領」「三つの世界論」「反帝反スタ主義」の批判から導き出された結論、戦後現代過渡期世界における世界同時革命は、世界戦争の開戦前に階級決戦を挑む、前段階決戦戦略に帰着する。

前段階決戦戦略と反帝国際統一戦線

帝国主義の侵略反革命を世界革命戦争へ！

これが戦後現代過渡期世界における前段階決戦戦略のスローガンである。ロシア革命の勝利は階級闘争の性格を一変させ、ボルシェヴィズムの登場はファシズムを呼び出した。ファシズムは、過渡期世界の階級危機を最も鋭敏に反映し帝国主義戦争の開戦前段で革命党と戦闘的大衆組織を壊滅させ、総力戦戦争体制の下に諸階級諸階層を強制的に同一化させることを機能的政治目的とした過渡期世界の尖鋭な反革命である。我々は、このファシズムの前にコミンテルンの〝社会ファシズム論〟〝ナショナル・ボルシェヴィズム〟〝人民戦線路線〟がことごとく惨敗した現実を直視し、帝国主義・後進国・「労働者国家」の階級闘争を統一して世界同時革命を勝利に導くには、あくまでも三ブロックの国際主義の原則を堅持して、この原則をファシズムに階級決戦を挑む前段階決戦戦略へと発展させなければならないという結論に達したのである。

そして、帝国主義の侵略反革命を世界革命戦争へ！ の前段階決戦戦略スローガンの下に自国政府打倒へむけた三ブロック階級闘争を統一する戦略的任務が、安保・ＮＡＴＯ粉砕、ワルシャワ条約軍解体である。

戦後現代過渡期世界の帝国主義諸列強は、資本主義の最後的死滅という恐怖感にかられ米帝の常時侵略反革命戦争体制を軸とする安保・ＮＡＴＯに恐怖の団結を求め、この侵略反革命軍事同盟としての安保・ＮＡＴＯを通して相互の対立を深めつつ、各国帝国主義がそれぞれ独自の利害を追求して侵略を貫徹しているので、三ブロック階級闘争とりわけ先進国プロレタリアートの自国帝国主義打倒と後進国人民の自国軍部反革命政権打倒の闘争は、直ちに安保・ＮＡＴＯ粉砕へと連続的に発展せざるを得ないのである。

戦後現代過渡期世界におけるソ連は、既にスターリンによってソヴィエトが解体されて党国家官僚独裁へと変質させられ、赤軍も官僚軍に変質せしめられ、過渡期経済としての国家社会機構も労働の質による分配と差別賃金の原則に基づくスターリンの一国社会主義論によって、最早、「堕落せる労働者国家」とさえ言えないまでに歪曲され、国営企業の独立採算制（ホズラスチョート）と労働賃金の出来高払制を二本の柱とする「官僚制＝搾取国家」として固定化されており、戦後においては、コメコンを組織して東欧経済の収奪機構を確立し、ワルシャワ条約軍を編成して東欧諸国軍をソ連軍の指揮下に統合しており、このスターリンの遺産を相続してフルシチョフとブレジネフが熱核軍拡競争と対外膨張政策に乗り出しているので、三ブロック階級闘争とりわけソ連・東欧プロレタリアートの自国党国家官僚打倒闘争は直接ワルシャワ条約軍解体闘争とならざるを得ないのである。

かくして、帝国主義・後進国・「労働者国家」のすべてのプロレタリアートと被搾取勤労大衆の闘いを、自国帝国主義打倒・軍部反革命政権打倒・党国家官僚打倒から安保・ＮＡＴＯ粉砕―ワルシャワ条約軍解体へ組織することが、前段階決戦戦略の具体的任務となるのである。

自国帝国主義打倒・軍部反革命政権打倒・党国家官僚打倒！ 安保・ＮＡＴＯ粉砕―ワルシャワ条約軍解体！

このスローガンこそ、帝国主義の侵略反革命を世界革命戦争への戦略スローガンを具体化した反帝国際統一戦線スローガンである。」

日本革命綱領

日本革命戦略と戦略的闘争スローガン

我々の日本革命綱領は、日帝打倒・安保粉砕・社会主義革命である。

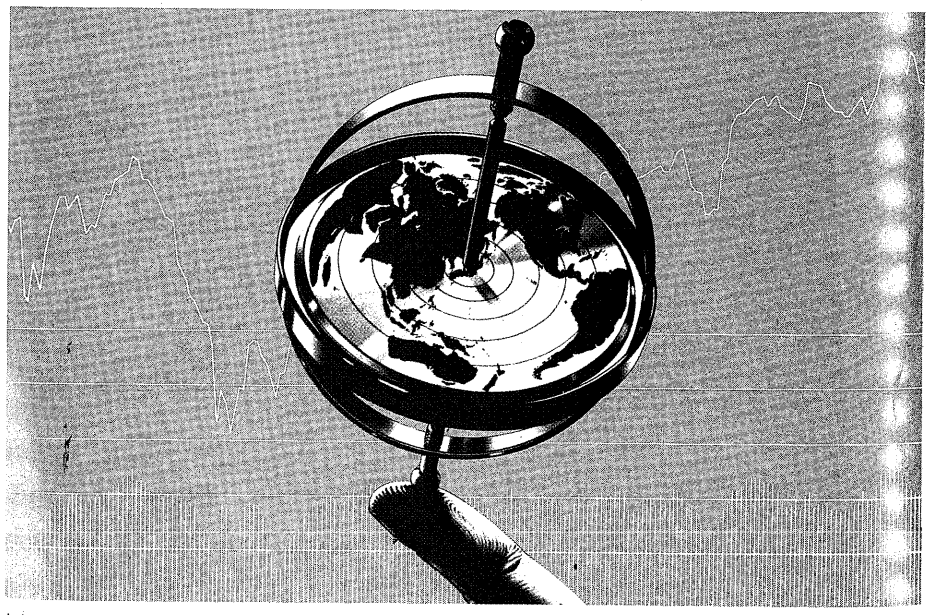
我々が打倒すべき権力は日本の独占ブルジ

NOMURA, JAPAN'S LEADING SECURITIES HOUSE AND ACTIVE INTERNATIONAL FINANCIER, INVITES YOU TO THE ACTION CENTER...

Nomura, a leading securities house in Japan, offers complete financial services. Our long history of brokerage and underwriting – plus ever-growing, integrated financial services – can be a definite advantage.

We invite you to call on our extensive experience to help solve your financial needs. Just contact Nomura Headquarters in Tokyo or one of many worldwide Nomura offices located in major financial centers.

Efficient Nomura men will quickly make *you* the center of action.



International securities and investment banking

NOMURA

The Nomura Securities Co., Ltd.

THE NOMURA SECURITIES CO., LTD. TOKYO HEAD OFFICE: 9-1, 1-chome, Nihonbashi, Chuo-ku, Tokyo 103, Japan
Tel: 03-211-1811 Telex: J22392 Cable: NOMURASHIN TOKYO OVERSEAS OFFICES: Paris, Toronto
SUBSIDIARIES and AFFILIATES:
NOMURA SECURITIES INTERNATIONAL, INC. / New York, Los Angeles, San Francisco, Honolulu NOMURA EUROPE N.V. / Amsterdam, London
NOMURA EUROPE GmbH / Frankfurt NOMURA (SWITZERLAND) LTD. / Geneva, Zurich NOMURA INTERNATIONAL (HONG KONG) LTD. / Hong Kong
BANGKOK NOMURA INTERNATIONAL SECURITIES CO., LTD. / Bangkok SINGAPORE NOMURA MERCHANT BANKING LIMITED / Singapore
D & C NOMURA MERCHANT BANKERS BERHAD / Kuala Lumpur ASSOCIATED JAPANESE BANK (INTERNATIONAL) LIMITED / London
TRIDENT INTERNATIONAL FINANCE LIMITED / Hong Kong UBAN-ARAB JAPANESE FINANCE LIMITED / Hong Kong
PHILIPPINE PACIFIC CAPITAL CORPORATION / Metro Manila P.T. FINCONESIA / Jakarta JAPAN AUSTRALIA INVESTMENT COMPANY LIMITED / Sydney
BANCO BOZANO, SIMONSEN DE INVESTIMENTO S.A. / Rio de Janeiro INVESTMENT AND FINANCE BANK, S.A.L. (INFI) / Beirut

ョアジーが掌握する日本帝国主義権力であるから、日本革命の性格はプロレタリア社会主義革命である。しかし、日帝打倒の内戦は必ず安保粉砕の国際的内戦に発展せざるを得ないし、日本における総蜂起と国際的内戦の開始は世界統一市場の分断と全世界的な階級激動と中ソの軍事介入を惹起するので、日本の社会主義革命は、決して一国革命として自己完結することはなく、必ずや世界革命として勝利しなければならない歴史的宿命を背負っているのである。従って——

日帝打倒・安保粉砕・社会主義革命！

これが日本革命の綱領スローガンとなる。

世界同時革命を切り開く自国帝国主義打倒としての日帝打倒は戦後現代過渡期世界の侵略反革命軍事同盟を撃ち破る安保粉砕と一体的に貫徹されなければならない。それ故——

世界同時革命・世界プロレタリア独裁・世界社会主義の世界革命綱領を実現する世界革命の戦略スローガンが、帝国主義の侵略反革命を世界革命戦争へ！ であるように、日帝打倒・安保粉砕・社会主義革命の日本革命綱領を実現する戦略スローガンは、**日本帝国主義の侵略反革命を蜂起・内戦＝世界革命戦争へ！** でなければならない。そして、日本帝国主義の侵略反革命は、新植民地支配とファシズム攻撃として貫徹されるので、我々の戦略的闘争スローガンは、**日本帝国主義の侵略反革命と対決し、新植民地支配とファシズム攻撃を粉砕せよ！** でなければならない。

日帝打倒・安保粉砕の一体性と社会主義革命

日本には敗戦後から一貫して独自の国家権力が存在しており、現に日本帝国主義の政治権力を掌握しているのは日本の独占ブルジョアジーである。そして、この国家権力の実体を政治的に担っているのが、政治・行政・司法・警察・自衛隊の国家官僚であり、独占ブルジョアジーは自民党の議会支配を通して野党・人民戦線派を操作し国家官僚を通して現実的な階級支配と抑圧を貫徹しながら労働者階級を搾取し諸階層を収奪している。従って、日帝打倒の内容は社会主義革命であって民主主義革命ではないのである。

安保体制は、戦後現代過渡期世界の三ブロック階級闘争に対する帝国主義列強間の恐怖の団結であり、不均等発展の法則に規定され相互対立をはらむ侵略反革命軍事同盟である。

戦後現代過渡期世界の日本帝国主義は、この侵略反革命軍事同盟としての安保体制を堅持しつつ、五〇年の朝鮮戦争を契機とする日本独占資本の復活と成熟にともない、六〇年安保改訂を米帝に要求して帝国主義としての自立性を確認し、日本帝国主義としての独自の利害に基づく侵略を安保体制を通して貫徹するに至った。このように、不均等発展の法則にしたがって米帝の戦後一元支配は崩れ、安保体制内における日米両帝国主義間のバランスも大きく変化し、日本独占資本は安保の再編をともないつつ復活し、日本帝国主義は自立してなお安保体制を堅持かつ強化したのである。

換言すれば、日米安保体制は、戦後現代過渡期世界の三ブロック階級闘争に対抗する必要性から生み出された侵略反革命軍事同盟であり、就中、ベトナム敗退後は米帝にとって不可避であるばかりでなく日帝にとっても不可欠となっているので、米帝の戦後一元支配の崩壊と日帝の自立にも拘らず、両者は安保体制を維持し強化しているのである。

事実、安保、NATO、ワルシャワ条約が示すように、今日の戦争体制は、一国的な総力戦戦争体制としてではなく集団的な軍事同盟の陣形をとっている。これは、過渡期世界が階級闘争の性格を一変させ熱核ミサイル兵器の登場が戦争の技術的性格を一変させたことに由来している。その昔、第一次帝国主義

毎日の暮らしに
サンワをじょうずにご利用ください

●本店/大阪市東区伏見町4丁目
●東京本部/千代田区大手町1丁目
●店舗網/国内220余 海外19

みなさまのお役に立つ——
三和銀行

戦争は純粋に帝国主義間で戦われたが、第二次帝国主義戦争では対ソ反革命戦争を組み込まざるを得なくなり、戦後の今日では朝鮮戦争とベトナム戦争が如実に示したように後進国革命を圧殺せんとすれば「労働者国家」と戦わざるを得なくなり、「労働者国家」に対する反革命戦争も中ソの軍事戦略を無視しては構えられなくなっている。従って、日帝打倒は安保粉砕と一体にして不可分なのである。

対米従属論とソ連対日抑圧論の粉砕

以上の事実から次の結論が導き出される。

コミンフォルムの安保をめぐる日米関係の「半占領」規定、この「対米従属論」に基づく日本共産党の「民族解放民主革命」（五一年『新綱領』）と「民族民主主義革命」（六一年『綱領』）また、「自立・従属論争」における自立論者の不均等発展の拡大解釈に基づく「日米敵対→安保自動分解→日帝中立→構造改革」論、更に、中国系民族共産主義者の「対米従属論」的発想を拡大した「ソ連対日抑圧論」に基づく「反ソ祖国擁護民族防衛戦争論」、これらがことごとく間違いであり、日本革命を必ず敗北させると言うことである。

即ち、米帝主敵論に基づいて、まず反米民族解放闘争で安保を廃棄し、民主連合政府を樹立して、しかる後に日帝独占を打倒するという日本共産党の民族的二段階戦略は、必敗の空論であり、また、不均等発展に日米敵対と安保自動分解と日帝中立化の夢をたくす自立論者の構造改革路線も、日和見主義的観念論であり、ましてや、日本独占資本主義に民族自決権を与え「二流帝国主義論」に基づいて日本帝国主義に民族防衛戦争の大義を与えて自衛隊の増強と安保の強化を承認し、まず米軍と組んでソ連を追放し、次に米軍を追い出し、そこで初めて日本の独占に手をつけるという民族共産主義者の民族的三段階戦略に至っては、最早マルクス・レーニン主義の原則と無縁であり論外だと言うことである。

我々は、安保に支えられた日帝の侵略反革命――新植民地支配とファシズム攻撃――と闘い、日帝打倒＝自衛隊解体と安保粉砕＝米軍解体の総蜂起・内戦を貫徹して日本に世界プロレタリア独裁の樹立に向けて世界革命戦争を切り開く臨時革命政府を樹立し、自衛隊を支援しこれと連合せんとする軍隊は、それが中国軍であっても解体するし、日本共産党を支援し一九三〇年代のスペイン内戦のように我々に銃口を向け世界革命戦争と世界プロ独裁樹立の敵となるソ連軍も解体する。

日帝の侵略反革命を蜂起・内戦＝世界革命戦争へ！ の日本革命戦略を支えるのは、三ブロック階級闘争を自国帝国主義打倒・軍部反革命政権打倒・党国家官僚打倒から安保・NATO粉砕―ワルシャワ条約軍解体へ！統合する反帝国際統一戦線の闘いである。

日帝打倒・安保粉砕・社会主義革命！ この日本革命綱領の大道こそ、世界革命戦争への血路を切り開き世界同時革命の勝利と世界プロレタリア独裁の樹立への展望をも獲得しうる唯一の道である。

以上が我々の日本革命の綱領戦略である。

プロレタリア政治路線の骨髄

我々の綱領戦略を、戦略的闘争スローガンをもって、政治的・軍事的・組織的に貫徹する路線こそプロレタリア政治路線である。

プロレタリア政治路線の骨髄は、人類前史総決算の思想に立脚して、階級支配の最底辺に組みしかれ差別・抑圧・分断支配されている被搾取勤労大衆と階級苦を共有し、この階級深部の怒りの中から党を武装してプロレタリアートを党に組織し、日帝の新植民地支配の民族差別・人種差別と闘い軍部反革命政権の階級的抑圧と闘う後進国人民の民族的・階級的な苦悩と怒りをわがものとして、日帝の刑法改「正」攻撃と天皇イデオロギー攻撃と自衛隊の核武装・治安出動クーデター攻撃を

三位一体とするファシズムを粉砕し抜く党―軍―統一戦線の下に蜂起の陣形を構築し、先武闘＝共産主義政治を展開し総蜂起を指定しうる「軍を組織する過渡期世界の非合法党」の党建設に圧倒的に勝利することである。

相対的反動期とファシズム攻撃

現局面の基本性格は、社会主義革命の勝利と資本主義の敗北の時代における相対的反動期――すなわち、ベトナム革命戦争が勝利し帝国主義諸列強がファシズムへの転換を開始した時に民族共産主義が国際階級闘争の前に桎梏として立ちはだかった時期――である。

現局面における帝国主義の特徴は、IMF体制が崩壊した段階の諸列強間対立の調整と常戦体制が敗北した段階の諸列強権力のファシズムへの転換および後進国軍部反革命政権のこれへの連動である。

日帝権力は、外に「韓国」新植民地支配の崩壊的危機におびやかされ、内に自民党の議会支配を通した統治機能の喪失に動揺しつつ、米中ソ三角核均衡に助けられカンボジア・ベトナム・中国の民族共産主義「労働者国家」間戦争を福音を迎えるが如くに受けとめてファシズムへの転換を目指している。これが日帝のファシズム攻撃の国際的国内的基本動向である。

従って、戦略的闘争は、日帝の侵略反革命と対決し、新植民地支配とファシズムを粉砕する闘いとなる。

総蜂起を指定する党建設に勝利せよ！

我々は、諸階級諸階層の闘いを刑法・天皇・自衛隊の闘いに糾合し、建党建軍＝非合法体制を軸とする党―軍―統一戦線で蜂起の陣形を構築し、先武闘＝共産主義政治を展開して最後の総蜂起・内戦をもって自衛隊を最後的に解体し、日帝打倒・安保粉砕・社会主義革命から世界革命戦争を切り開く。従って、我々の労働運動・学生運動等のすべての方針は、日帝の侵略反革命と対決し新植民地支配とファシズム攻撃を粉砕する党―軍―統一戦線の下で蜂起の陣形構築へ向けた方針となる。

我がプロレタリア政治路線は、階級苦から出発し、階級に対する責任を党建設の勝利においてとる。総蜂起を指定しうる不抜の党建設に勝利すること、これが我々の綱領・戦略・政治路線の結論である。

マスコミ評論
300円

朝日新聞論説主幹岸田純之助って、意外にダメね
妙に気になる……防衛庁が電通に研修生派遣
異色座談会最終回「女・おんな・オンナ」羽仁五郎他
マスコミの不勉強が放置している、原発の方が経費高に
テレビドラマ作りから去った男の考察論文　林秀彦
疑士迷々伝・大橋巨泉の巻　巨泉か？虚泉か？
へいんたびゅー〉岡本喜八「四、五年は土方をするか」

好評連載
新聞考査室　片岡正巳
肌絵まんだら　凡天太郎
書肆探訪　猪野健治
筆投筆打　茶本繁正

4月号 第一線記者匿名座談会

東京都渋谷区桜丘14－5
(株)マスコミ評論社
振替口座（東京）942682

廃港決戦勝利を解放の〈根拠地〉の創造へ！

共産主義労働者党全国協議会

はじめに

日本の革命的人民は、七八年三里塚開港阻止決戦――三・二六空港包囲・突入、管制塔占拠闘争の勝利をもって、新たな一時代へ進撃する橋頭堡をしっかりと確保した。

六〇年代中葉にはじまり、七〇年代を闘い抜いた三里塚闘争は、既成の尺度をはるかに越える深さと拡がりをもって、日本人民闘争史の一時代を画した。今、三里塚闘争は廃港決戦の段階へせり上る中で、現代世界と解放としての革命の根本的課題を浮び上らせ、それへのあくなき挑戦と格闘の中で、新しい社会と人間の創出をめざす日本革命の〈根拠地〉へと不断に進転し続けている。始まろうとしている世界史の新たな一時代は、日本における三里塚廃港決戦を一つの渦心としながら、近代ブルジョア世界を打倒し、変革・止揚する革命的人民主体の生成を通して人類史が新たな段階へ――世界共産主義の段階へ移行する偉大な過渡期の幕開けとなるであろう。

日本人民は、その中で六〇――七〇年代の歴史的蓄積を、三里塚廃港決戦のルツボに投げ込み、世界的な共感・共鳴を能動的に再生する最前線にしっかりと立ち上らねばならない。

一、七〇年代前半の格闘

六九年秋期安保政治決戦の敗北を経て、日本の革命的人民は七〇年代に入ってそれまでの日本の新左翼運動の限界の克服――革命の人民的根拠の形成を目ざす長征に出発した。この長征の緒戦が、七一年三里塚第一次、第二次強制収用阻止闘争であった。その拠点で実現された九・一六人民武装闘争――東峰十字路における機動隊一個中隊殲滅戦の勝利は、七〇年代の幕開けにふさわしい偉大な一地平を画した。

「天の時・地の利・人の和」を最大限に発揚し、人民が生産・生活・闘争を一体のものとして武装して立ち上るならば、近代ブルジョア的人民支配の体制・その暴力装置を打ち破り勝利をわがものとすることができる。六〇年代後半、とりわけ六八年のテト攻勢以来、ベトナム解放革命の勝利的前進が確証したこの時代的真理を、日本人民は自らの闘いによってわがものとしたのである。

しかし、この勝利は、その歴史的限界・制約に直ちに直面することになる。七一年十一月、沖縄返還協定粉砕闘争の戦術・方針をめぐる対立を直接の契機とする共産主義労働者党の三分解をはじめとして、七二年前半まで日本新左翼運動は、内部の対立・分散を露呈し、六〇年代後半、日本の革命的人民の自己表現の形式であった〝反戦・全共闘派〟としての統一性が歴史的終焉を遂げていく。また三里塚闘争自体も、国家権力の全重圧をかけた大弾圧をうける中で数年にわたる回復期間をおくことを余儀なくされるのである。

特に問われたのは、三里塚闘争の持続・高揚を引き金として噴出してきた様々な形態での人民闘争がもつ深く豊かな固有の根拠・性格に真正面から向き合い、それをその深さ・豊かさ・拡がりを保持しつつ単一の階級的・革命的人民主体へ止揚し、もって権力の問題を射程に収め新たな社会編成の原理を創出する主導力のあり方であった。

一方、六〇年代後半の〝反戦・全共闘〟運動が自らの闘いをもって導き出した重要な結論の一つである日本革命の国際的世界的性格についても、とりわけ直接の連動関係にある朝鮮統一解放革命主体との連帯・団結のあり方をめぐる新たな模索が開始されていった。

七二年からの模索・試行錯誤は、七〇年代中葉に一つの結実を迎える。七四年、今は亡き戸村一作・三里塚芝山連合空港反対同盟委員長をおしたてた参院選闘争において、初歩的ではあれ最大限の党派・知識人、あるいは労働・市民運動、そして全国各地の自立した地域住民闘争を包括した〝三里塚闘争と戸村一作氏に連帯する会〟運動としての統一戦線が形成され、また同年十一月には米大統領フォードの来日訪韓を阻止する闘いが新左翼諸党派を中心とする共同行動として貫徹され、政治闘争における大衆的実力闘争の再生がかちとられる。

七二年以降最終的勝利段階にあったベトナム解放革命は、七五年四・三〇サイゴン解放によって完結する。ベトナム・ラオス・カンボジアにおける社会主義政権の成立によって世界、とりわけ東アジア地域の階級的・政治的関係に重大な変動が生じたのである。このことによってもたらされたアメリカ帝国主義の世界支配体制の再編――後にカーターによって「人権外交」として定式化される――は、日本においては政権中枢部の金権・腐敗に対する体制内部の告発に端を発する〝ロッキード事件〟という独特の形態で現象することになる。しかし、支配的階級内部の抗争をともなう支配体制の手直しは、増々腐朽の度を深める戦後日本資本主義に対する人民の広範で根源的な怒り・告発・糾弾を呼び起こさずにはいなかった。世界的な連鎖の結び目において日本の政治生活全体の活性化・流動化が生まれる。七〇年代中葉のこの時期、日本の革命的人民は、それまでの新左翼運動の狭さを大きく打ち破り、人民自身が権力になることを目ざす真に人民的な政治のあり方をわがものとするうえでの得がたい経験を積んだのである。

二、三里塚決戦の三年間

七七年から日本の革命的人民は、七〇年代前半の苦闘の蓄積をもって三里塚決戦を主戦場として三年間を闘い抜く。

七七年前半の鉄塔決戦、七八年三・二六、五・二〇を頂点とする開港阻止決戦、そして現在に至る廃港決戦を経る中で三里塚決戦は六〇年代後半――七〇年代前半の日本・世界の人民闘争が蓄積した成果と課題をその中に保持し、解放と革命の根本的諸問題を解く重要な手がかりを日本の革命的人民に与えてきた。

第一に、ベトナム革命を先導力とする〝「第三世界」解放革命に結合、合流する〟綱領的・戦略的立脚点に立って、近代ブルジョア

世界総体を批判する視座をうちたて、帝国主義本国内における革命的主体の形成を目ざしてきた日本の革命的人民が、新たな革命的人民闘争の世界史的同時代性の中で解放と革命の根本的課題を世界の人民と共有し、共同で新たな社会編成の原理を獲得するための視座と規準をわがものとすることである。

七五年四・三〇ベトナム解放革命の勝利以降、革命的主体の国際的連帯はその中心的結び目を失う。さらに中国華・鄧政権のプロレタリア文化大革命の地平の清算・抹殺を伴う資本主義の後を追う「近代化」路線の〝定着〟、七九年初頭に勃発したベトナム・カンボジア・中国の社会主義国間戦争、あるいは全く近代世界の原理と異質な内容と性格――イスラム教を基軸とする宗教革命の形態によって頑強を誇ったパーレビ「近代化」王制の打倒を果たし回教共和国を現出したイラン革命、さらに遂に十八年の長きにわたった朴独裁体制を内部から瓦解せしめた韓国民衆蜂起と、これまで世界史の前線にあったものが後方に退き、後景にあったものが前面に躍り出る世界の革命的激動・大乱の様相が深まる中で、各々の国・民族における革命的人民的主体は一層きわだった個性を顕在化させ、分節化の方向に進んでいる。

ヨーロッパ・アメリカの帝国主義本国内では、近代ブルジョア的生産様式の推進力たる科学技術の巨大化がもたらす環境破壊、管理・抑圧の強化に対して、その極点としての原子力・原子力発電を人類の生存と相いれないものとして拒否し、自然と人間の生態的循環の再建を目ざす反原発・エコロジイ運動が、他の多くの差別、抑圧に抗する抵抗運動を包括した大運動として展開されている。

三里塚決戦は、農地を潰して建設される巨大空港を拒否する農民の抵抗闘争をその原基として、近代ブルジョア世界に共通の価値規範としての「近代化」を生産・生活の全側面で拒否し、その中から〝闘う農業の建設〟などの試みを通して新しい人間・社会・自然・文明のあり方を創出する途を歩もうとしている。

社会主義国間戦争の勃発によって、人民がその形式を借りて自らの抵抗と建設の正義性を表現してきたマルクス主義が、すでに既成の形態においては解くことのできない諸問題を累積させてきていることが明らかとなった。

三里塚決戦は、この中で農民・労働者・学生・知識人・市民等々、既存の社会形態が押しつけた各々の分断された自己規定性と価値観を相互の闘いの中での一体化によってはぎとり、もって、アジアで唯一「近代化」の極点に昇りつめた日本社会という極めて「個性的」な対象の全般的変革をかちとり、世界へ拡がる共感の策源たりうる日本革命の固有性を創出するのである。

第二に、三里塚決戦は十四年間の実力闘争の蓄積のうえにたって人民革命の根源性・暴力性を照らし出す。

七八年三・二六闘争の勝利から、五・二〇出直し開港阻止決戦を経て、廃港決戦に至る過程で、これまでの戦闘的大衆闘争の〝常識〟とされてきた事がらのことごとくが覆されてきた。地域・現場においては相対的に少数派であるにもかかわらず、その全人民的な拡がりの深さ・豊かさを確保し続け、しかも大闘争の後に訪れる長期の沈静・停滞を経ず、三年間にわたって大小様々な実力闘争が継続され、「単一の強固な指導部」の介在を必ずしも必要とせず闘争の局面局面において可変性・屈伸性に富んだ団結の形態が創造される。

十四年間の三里塚闘争の伝統的な個性が、この三年間の決戦の過程で増々みがかれ、豊かに発展させられている。

三里塚決戦は、一方で単一の主体としての資本が自らの姿に似せて世界を均質の運動原理・価値観で被い、他方でそれに対抗する主体を極限的には〝個〟に至るまで解体・分断し尽してきた近代ブルジョア社会に抗して人民闘争がその固有の性格・根拠を相互に対象化し発見し合いながら、単一の普遍的な主体へ自らを形成する過程を媒介する。つまり、闘いの中で「天の時・地の利・人の和」によって結ばれた人民が一つになって敵にあたり、勝利をわがものとする〈人民の戦争・人民の軍隊〉の形成を三里塚決戦は推し進めるのである。

第三に、三里塚決戦は、その中で不断に新たな課題に挑戦し、豊かな力能を蓄積する革命的主体の生成を通して〈革命の現実性〉を照らし出し、又、同時に人民の解放が達成される諸条件と可能性を産出する解放の〈根拠地〉として、七〇年代の日本の人民闘争の限界を超克する現実的な場となるのである。

七〇年代の日本の人民闘争が提起した中心的問題は、単一の階級的革命的人民主体の形成の問題であった。三里塚決戦三年の過程はこの問題にこそ、豊かな経験と成果を蓄積し新たな結実を生み出さずにいない段階へと自らを押し上げている。

六〇年代後半、自らを〝反戦・全共闘派〟として定立し闘い抜いた日本人民は、七〇年代前半を、統一的な主体としての規定性の喪失、多様でありながらも相互に無関心な様々な自己規定性をもつ諸運動・闘争の並存という状態の中で各々がおちいる停滞・沈滞を打開する方向を模索しながら苦闘し続けてきた。

七七年からの三里塚決戦、特に七八年三・二六、五・二〇に至る開港阻止決戦の過程で日本人民は、様々な矛盾・格闘を通して〝三里塚派〟として自らを定立する意識的な努力を開始したのである。

三、〈根拠地〉と〈党〉の創造

この様な革命的人民の自己変革の本格的開始は、人民と相互変革・緊張関係において自身をたて、律すべき〈党〉にも、そのあり方、の全般的変革を不可避の課題として突きつけているといわなければならない。

伝統的な「マルクス・レーニン主義」の革命観・党観・人民観の全般的な克服はさし迫った課題である。単一・絶対の「真理」である「科学的世界観」としての「マルクス・レーニン主義」が自己を世界史に実現する契機としての「社会主義革命」、「真理」の体現者・独占者としての「党」と、「真理」に高められるべき対象としての「人民」。どく簡単に要約すると以上の様な図式によって成り立つスターリン主義的な革命・党・人民観は最終的にその生命力の喪失を宣告されているといわなければならない。

この様な図式によって成立する〈党〉が、応々にして闘争の中で代行主義をはびこらせ、又、一たび権力を掌握した時には、新たな国家――本来、死滅へ向かって運動する「半国家」たるべき国家――を社会の全一・万能の主体へ打ち固め、その結果近代ブルジョア国家と同様の、あるいはそれ以上の官僚主義・国家主義が生み出されてきた。

三里塚決戦に即して言えば、本年夏以降表面化した政府の〝話し合い路線〟の攻撃の中で露呈したのは、人民的主体の中にも深く根をはった三里塚決戦を伝統的な大衆運動の尺度で裁断し、終結を見越した「展望」――政府との対話・交渉の場で計られる力関係を基準にした「戦略」の中におしこめようという発想であった。

この発想を基底とする〝主体の危機〟と闘いながら三里塚決戦は、九・一六、四項目の「大会宣言」をはじめとする新たな格闘への挑戦を開始している。単一の人民的革命的主体を形成するうえで、三里塚廃港決戦は、できあいの尺度、解決形態が存在しない地平に

不断に、大胆に踏みこみ、それら自体を――それは「成就されるべき何らかの理想状態」ではなく、闘争の中で生成する新たな解放の原理・人民的な共感を形成する〈希望〉そのものであるが――を創造する闘いとなっているのである。

その中で創造の最前線にたち続ける人間の集団、即ち〈根拠地〉と人民の〝指導的核心〟としての〈党〉の創生こそが、八〇年代を展望する日本人民闘争の第一義に解かなければならない課題となっているのである。

四、最後に

わが共産主義労働者党全国協議会は、七一年の旧共労党の三分裂以降、七〇年代を何よりも人民に一個の政治勢力として承認され、〝指導的中核〟たるにふさわしい資質・力量を獲得することを目ざして闘い抜いてきた。

七〇年代のトバロを飾った三里塚闘争は、七〇年代最後の三年間の激闘の中で、人民の革命闘争の主導力として新たに再生し、十四年間の蓄積と到達点を、今や日本国内のみならず「第三世界」から帝国主義本国まで世界へ向かって開こうとしている。

七八年三・二六闘争は、ブルジョア政治と人民の集中的対決点を人民の側が攻勢的につくり出し、勝利することを通して日本の人民革命の原像を創出した。さらに、この勝利は五・二〇以降廃港決戦への移行の中で、世界の激動と響き合いながらより豊かな、高次の段階で再度実現されなければならない。

我々は、七八年三・二六――五・二〇闘争廃港決戦の中で、解放の〈根拠地〉の創造をめざして、又、新たな社会編成の原理を獲得することをめざして共同の営為を積み重ねてきた多くの革命的人民との結合をより一層強化し、新たな〈党〉を創生する現実的諸条件を確実に形成していきたいと考えている。

政府・空港公団は〝話し合い〟路線攻撃をはじめ、既成事実としての現空港の安定的確保、継続使用をもって、闘う主体の内部に無力感とあきらめを植えつけ、闘争勢力の内部瓦解を狙っている。我々は、三里塚決戦が三年間の激闘を通して蓄積してきた人民の創造物――最も主要には闘いの中で形成された反対同盟を中心とする革命的人民の歴史上かつてない独創的な結合様式――を、一層強固な、豊かなものへと変革するために、〝現空港攻撃、再度の巨万の人民による空港包囲・突入・占拠・破壊〟大闘争を、八〇年代初頭何としても実現するべく全力を集中する。

この闘争の勝利こそが、日本人民闘争の歴史を真に総括し又、革命党としてのわが共産主義労働者党がその中で果たした役割りを明確に対象化し、真に人民的な一大政治勢力が登場する画期となるであろう。

廃港決戦勝利の八〇年代へ！　共に進撃せん！

前田建設工業株式会社

東京都千代田区富士見町2―10―26
TEL. 265―5551（代表）

For Beautiful Human Life

美しいシルエット、おしゃれな透明感、
脚を疲れさせないベルパワーシリーズ。

●美しい脚線は、女性の心に誇りとひそかな勇気を与えます。
●カネボウのベルパワーシリーズストッキングは、
〈サポーティング効果〉
〈透きとおるような薄さ〉
〈ひっかかりの少ない丈夫さ〉
〈ソフトガードル機能〉
など、今までにないすばらしさを持つ、理想的なパンティストッキングです。

カネボウ
ベルパワー
パンティストッキング
カネボウストッキング株式会社

KANEBO 美しきヒューマンライフをめざすカネボウ

自民党政府打倒！アジア革命の勝利めざし
八〇年代階級闘争の高揚をきりひらけ

日本革命的共産主義者同盟
（第四インターナショナル日本支部）

今日、世界・東アジア・日本の情勢が大きく流動し、まさに「全世界に赤旗が翻る時代」の到来を告げ知らせる中で、わが同盟は日本階級闘争の金字塔として輝く三・二六闘争を党として主体化することによって、八〇年代、強大な革命党建設と労働者統一戦線の形成に向け闘い抜くことを明らかにしたい。

八〇年代攻防の路線を確定した同盟第九回全国大会は、①東アジア革命の前進②〝国家をめぐる階級闘争〟の勝利③総評を主戦場とする階級的全国分派闘争の貫徹④三里塚全国政治闘争＝二期着工阻止・廃港に向けた闘いの四つの重大な課題に断固挑戦することを宣言した。

□東アジア情勢の歴史的変動
―スターリニズムの衰退と新たな前衛―

ベトナム・インドシナ革命の勝利と、それ以降の経過をつうじて明らかになった東アジア情勢の歴史的変化を把えようとする時、われわれは「第三次アジア革命のための新しい諸要素や可能性が確実に登場しつつある」と規定しなければならない。

東アジア情勢の歴史的変化の第一は、アメリカ帝国主義の力の歴史的な後退、ならびにその中で追求されてきた東アジア情勢の現状凍結構造の破たんの開始である。それは、英雄的なベトナム・インドシナ革命が、多くの犠牲を払ってひき出したものであることは、いうまでもない。「軍事的には、米・ソ二極間の均衡、経済的には日本の積極的な進出、政治的には、中・ソ対立を利用した中国の抑制力としての利用」を骨格としたアメリカの新たな戦略は、この現状凍結構造の有機的一環を構成するポル・ポト独裁政権の劇的崩壊によって音をたてて崩れはじめた。中国は又、ポル・ポト政権を防衛することができなかったばかりか、中国内における大衆的な反官僚闘争と官僚内部の矛盾を拡大することになったのである。

こうして、アメリカ帝国主義は、再び東アジアに〝復帰〟しようとしなければならない事態がつくり出されている。それが、彼らの矛盾やジレンマを、いかに拡大し力を衰退させようとである。インドシナ「難民」キャンペーン、タイ独裁政権への全面的テコ入れ、

在韓米軍撤退の中止、フォートレス・ゲール作戦などによって、それはすでに実際におしすすめられつつある。第三次アジア革命は、アメリカのこの東アジアへの〝復権〟を粉砕し、インドシナ革命を徹底して防衛しぬくことである。そして、韓国労農人民の「維新体制」の最後的打倒と民主共和制を実現し、南北協商に向けた闘いを全面的に支持してゆく闘いなのである。

第二の歴史的変化は、スターリニズムの国際政治へゲモニーの衰退と分解がすすみ、この中から新しい前衛的勢力が成長しつつあることである。

第二次東アジア革命を主導した政治へゲモニーは、いうまでもなく国際スターリニズムであった。だが、今日その分解と衰退は、ポル・ポト政権の崩壊に端的なように極点に達しつつある。ソ連邦は、中国官僚の反動的な親帝路線によって東アジアに占める政治的比重の増大にもかかわらず、この地域における階級闘争に大きな影響力をもつことができない。そればかりではなく逆に国際的位置の高まりは、国際的な危機の要素をソ連邦内部にとり込むことになっていくのである。一方中国は、帝国主義に依存した「近代化」を求めて平和共存のための直接的な力を行使しようとしたその瞬間に、危機をむかえるのは官僚体制であることが、ベトナムへの軍事侵攻によって実証された。また毛沢東主義のイデオロギー的統制力は、もはや決定的に弱体化しており、内部における官僚と大衆の深い矛盾は、尖鋭に発展しつつある。

また第三次東アジア革命への橋渡しの役割を担ったベトナム共産党は、今日様々な困難によって立ちどまっている。インドシナ三国の経済建設の土台となるべきベトナム工業力の端緒的段階、米・中からの直接・間接の軍事的圧力、ASEANにおける階級闘争の端緒的段階による平和共存の追求などベトナム共産党は、ますます官僚的政策の選択を強めざるをえない。ベトナム共産党が東アジア革命の国際センターを引きうける可能性は今の所ない。確実なことは、ベトナム共産党の政治的前進とインドシナ革命の永久革命としての発展は、インドシナ革命を防衛し、その勝利をひきつごうとする東アジア階級闘争にますます強く依存するのであって、その逆ではないということである。

中・ソ対立とインドシナにおける軍事衝突が、社会主義やマルクス主義の崩壊ではなく、第二次東アジア革命を主導した国際スターリニズムの政治へゲモニーの崩壊に他ならないことを現実の東アジア国際階級闘争をもって証明していくのは第四インターナショナルの八〇年代の任務である。

第三の変化は、東アジア各国における新植民地的工業化に基づく都市プロレタリアートの登場と、その社会的・政治的比重の高まりである。第二次東アジア革命の担い手が圧倒的農民であったのに比べて、プロレタリア的性格が強く第三次東アジア革命を規定する。東アジア規模での労働者統一戦線と労農同盟の基盤が与えられることになったのである。

第四に把えておかなければならないのは、莫大な工業的生産力を保持する日本帝国主義の位置の変化である。東アジアは、日本ブルジョアジーにとってはすでに国際的経済圏の一部となっているのみならず、日本帝国主義は、この地域における軍事独裁政権を意識的に防衛し、支える役割を担っている。したがって日本階級闘争は全東アジアにおける国際階級闘争の直接的一部となったのである。

われわれは、すでに開始された第三次東アジア革命の胎動を、新植民地諸国における独裁権力の打倒、労働者国家における政治革命、帝国主義国におけるプロレタリア革命が、有機的連動性をもち、世界革命の一環としての第三次東アジア革命の完遂へと闘いを

前進させなければならない。

□国家をめぐる階級闘争の開始
―日帝の危機と労働者階級の任務―

日本帝国主義をめぐる新たな情勢の特徴は、国際・経済・政治的上部構造の関係の総体を貫いて〝国家の再編〟が進もうとしている所にある。しかも、この〝国家の再編〟は、ひとつひとつの現実の階級闘争を通してしか実現されてはいかない。

第一に日本帝国主義は、米帝の後退に伴って、部分的補足の形ではあれ、ソ連邦との極東における政治・軍事的対抗関係の最前線に引きずり出された。ソ連邦の軍事力と自衛隊との関係は、巨人と赤ん坊との関係のようなものである。しかも日本帝国主義は、その位置と役割において全面的に国際化されたが、国内における階級的足場は全く出来ていない。労農大衆との現実の階級闘争を通じて、これから手に入れていこうとしなければならないはなはだ中間的で不安定な状況の下におかれている。ここに、日米共同軍事体制の実戦化と自衛隊の実戦的強化の動向、〝有事立法〟体制の確立を求める軍事問題の新しい段階、そして〝北方領土返還〟のスローガンの階級的意味がある。

第二にアメリカ・EC・日本の激しい国際的経済の対立と競争の激化は、各国工業生産部門の対立・競争のみならず、帝国主義各国における総体としての国民的経済構造と階級関係の現実の推移を媒介として全面的に貫徹されていく。したがって、経済闘争は、経済闘争としての枠内にとどまることが不可能となっている。経済の問題は、国家の問題として必然的にたてられざるをえない。

日本ブルジョアジーにとって、その国家財政を収支の全構造にわたって〝改革〟し、全般的スタグフレーション化において、日本経済を新たに主導し、国家財政の新しい構造をうちたてることは、いまや直接的に〝国家をめぐる階級攻防〟へと突入せざるをえないことを示している。

第三には、民族的平和主義と民族的経済主義によって中間的に成立していたブルジョア議会制国家の危機の構造が全面化していることである。衆院選後の一ケ月半の〝政治空白〟が示しているように自民党政府体制の危機と自民党自身の政治的分散化は拡大しこそすれ、決して終わることはない。労働者階級にとって、それは帝国主義国家から独立し、様々な分断をこえて階級的統一をかちとり、農民との同盟をかちとっていく時代の始まりなのである。労働者統一戦線と労農同盟の形成は、いまや現実に実践的課題として提起されている。

したがって、第四に国家の問題を軸として、様々な闘いが一つの階級闘争として展開されていく時代の始まりは、日本大衆運動の主流をなしてきた総評労働者運動の動向をめぐる攻防に帰着する。企業内改良運動、自治体改良主義運動、そして改良主義的平和運動は、国家とゆ着するのか否かをめぐる激しい攻防がはじまっている。

□総評を主戦場とする闘い
―階級的全国分派闘争の貫徹―

日本ブルジョアジーとその国家が労働者階級との関係において新しい支配の構造を確立することは、具体的には総評・民同、社会党ならびに共産党の六〇年代以来の労働者大衆との関係を全面的に解体し、官公労を中心とする労働組合官僚機構を右翼社民的に再編し、労働者大衆の独自的な抵抗や戦闘的大衆運動に対する国家権力と労働官僚が一体となった全面的鎮圧・抑制体制を確立することなしにはありえない。プロレタリアートの階級的闘いもまた、総評労働者運動を中心的な戦場とする。官公労を主軸とする総評労働者運動の

内部に組織された新しい階級的労働者左翼の全国的イニシアチブと国家と対決するその政治へゲモニーだけが、民間産業におけるJC派労働官僚の基盤の分解と農民大衆の政治的流動化に積極的に介入することができるといわなければならない。社共・民同の改良主義指導部は、内部分解の要素をはらみながらも、全体としてブルジョア国家とのゆ着への道をひた走っている。にもかかわらず、大ブルジョアジーとその政府は、自らの危機の深さゆえにそれをかかえ込むことができない。既成改良主義指導部は、ただ一方的に労農大衆に対する裏切りとブルジョアジーに対する屈服を強制されている。

ブルジョア国家から独立した階級的労働者左翼の流れは一九七七―七八年の三里塚全国大衆闘争の発展を軸として明白に階級情勢の中におどり出てきた。七三春闘の上尾国電暴動から始まり七五年、スト権ストの敗北で構造的に定着化した改良主義の国家とのゆ着と大衆運動の麻痺状況は、七七年、三・二六闘争の勝利を決定的転機として、基本的に終わった。既成改良主義指導部と労農大衆との間の矛盾と危機が、尖鋭に発展しはじめた。昨年の「むつ」闘争、〝有事立法〟闘争、全逓越年闘争、三里塚闘争の持続する高揚、そして今年の統一地方選と衆院選挙の結果は、そのことをはっきり示した。

総評労働運動を舞台とし、その総体を貫く階級的分派闘争が、三里塚全国大衆闘争の前進を基礎として、いまや開始された。三里塚反対同盟と連帯し、ジェット燃料貨車輸送阻止の闘いを展開してきた動労千葉地本に対し、政研・革マル派は、統制処分攻撃をもって応えなければならなかった。「貨物安定宣言」に見られる当局＝国家とのゆ着とそれに必然的に伴う労働組合の官僚化をおしすすめるためには、階級的労働運動に対して、暴力的官僚統制でのぞまなければならなかったのである。だが、そのことによって「独立」した千葉動労は、総評を貫く階級的全国分派闘争の拠点としておどり出ることになり、逆に政研・革マル派は不断の動揺と危機をはらまざるをえない。

同様に全電通においても、官僚と大衆の対立は、一方では宮城の除名処分、横浜支部の三里塚処分に示される尖鋭化の拡大を伴いつつ、他方では、沖縄県支部解散―再登録の官僚統制に示される大衆規模での対立を生みだしている。福島県支部大会では、全電通中央の合理化承認案がついに否決され、あわてふためいた全電通官僚は、県支部執行部を辞任させ、組合員の「再確認」署名攻撃を開始した。全電通民同は、三里塚闘争に対して公然と「反社会的闘争」と規定し、あらゆる反対派傾向を露骨に排除している。だが、ここにおいても、動揺と危機を深めているのは、全電通民同に他ならない。

今や、労働戦線の右翼的再編・統一に対抗する闘いは、単に「労戦再編反対」にとどまるものではない。「労戦再編阻止」から、さらに労働者のあらたな階級統一にまで前進しようとして展開されなければならないのである。それは、一九七七―七八年の三里塚全国大衆闘争の発展、三里塚反処分・就労闘争の前進を基礎とし、その飛躍をかちとる闘いに他ならないのであり、開始された第三次東アジア革命の中に、日本労働者階級の巨大な隊伍を登場させる闘いなのである。

□三里塚全国政治闘争の展開
―八〇年廃港決戦に勝利せよ―

七月十六日に大平自民党政府によって画策された対話攻撃を中心とする二期着工策動と、九・一六、十・二一全国結集による二期着工策動粉砕―対話攻撃粉砕の全国三里塚闘争の攻防は、新たな段階に入りつつある。この三里塚闘争の新たな段階は、衆院選での敗

北に示される大平路線のゆきづまりを示すものである。七・一六対話攻撃をしかけた大平自民党政府は、衆院解散—総選挙を前にして、三里塚に対する対話攻勢を一つの目玉とし、三里塚闘争をも階級協調主義の構造の中に引きずり込み、もって政府の命運を危うくすることなく二期着工を実現せんともくろんでいた。

しかし七月対話攻撃は、大平自民党政府の衆院選全体に向けた総路線とはなりえなかった。そもそも大平の対話攻撃は、公団・警察当局の反発に見られるように矛盾にみちたものであった。さらに一般消費税導入を頂点とする重税攻撃、公企体合理化、食管制度の改悪などの国家財政再建政策は、衆院選での自民党の大敗北をつくり出すことにより、大平路線そのものの破たんへとむすびつき、政府の主導性を決定的に弱体化させてしまった。

われわれの当面する三里塚闘争の基本方針は「のたうちまわる自民党政府危機を三里塚全国政治闘争を最先頭とする政府打倒闘争で追撃せよ」でなければならない。今日おちいっている国家財政の危機の下で、五十五年度予算は大幅縮小予算とならざるをえない。多額の投資を要する二期着工は、きわめて困難にならざるをえない。ましてや、羽田沖移転や、新関西国際空港と比較しても、経済メリットの少ない成田二期着工は、一層政策的にも困難性を増大させている。しかし、今日三里塚闘争は、すぐれて政治課題であり〝国家をめぐる階級攻防〟の頂点に位置しているがゆえに、財政的見地のみでは判断できない所に、敵の攻撃は、一層困難にみちたものにならざるをえないのである。三・二六～五・二〇を通じて形成された対峙から攻勢へ進撃する時が到来した。

いまや、三里塚闘争とその戦闘的労働者闘争勢力は、総評労働者の中に徹底的に〝突入〟し、総評労働者運動の中に真の〝管制高地〟を何としてもうち立てなければならない。総評労働者の反合理化と反失業の闘いへの自然発生的可能性を、ブルジョア国家権力と対決しうる社会経済闘争として組織化してゆく実践的主体として飛躍してゆかねばならない。

こうした闘いを軸として、労働者を階級的主軸とする三里塚廃港決戦のための強力な全国イニシアチブをつくり出してゆかねばならない。

われわれは、三里塚闘争を最先端とし、官公労を軸として総評労働者運動を貫く階級的全国分派闘争の貫徹を基盤とする闘いの中に一切の闘いを包摂しながら、自民党政府打倒—労働者・農民の政府樹立に向けた全国政治闘争の巨大な前進をかちとらなければならない。その闘いの中から、労働者統一戦線と労農同盟の巨大な隊伍を築き上げてゆくことをわれわれは宣言する。

自民党政府打倒・二期着工阻止・廃港をめざす一〇〇万人署名運動を突破口として、八〇年廃港決戦にせめのぼれ!!

□インドシナ・中国・朝鮮・日本を貫く第三次アジア革命を切りひらけ!

□帝国主義国家とゆ着する労働組合官僚指導部の攻撃をはねかえし、労働者の階級的統一をかちとれ! 労働者統一戦線—労農同盟をうちたてよ!

□全国労農人民の攻勢で、三里塚二期着工阻止—廃港へ! 自民党政府打倒—労働者・農民の政府へ!

□アジア社会主義連邦万歳!

□世界社会主義革命万歳!

□第四インターナショナルに結集せよ!

激動する国際＝国内情勢と八〇年代の革共同・革マル派の基本路線

日本革命的共産主義者同盟
革命的マルクス主義派

Aスターリニスト国家間戦争の勃発と朴暗殺・五五年体制の終えん

一九八〇年、あるいは〈八〇年代〉を展望するにあたって、われわれは七九年の世界を揺るがした三大事件の歴史的位相をとらえかえしておかなければならない。七九年一～二月のインドシナにおける二つのスターリニスト国家間戦争の勃発と、イラン動乱を頂点とする中東の政治的構図の地殻変動。そして十月二十六日の朴暗殺を転回点としてやがて必然的にもたらされるであろう〝東西対立の谷間〟としての極東・東アジア情勢の変動。これら三つの事件は、〈帝国主義とスターリン主義の相互依存、相互反発〉をザッヘとする現代世界の矛盾を集約的に表現すると同時に、七〇年代に形成されてきたその現実形態の新たな転回を画す結節点としての位相をもつものにほかならない。それらの歴史的意義を真に把握しうるかいなかは、こんにちの左翼戦線をふるいにかける思想的意味をも持つ試金石をなすのである。

かの三大事件は、もちろんそれぞれに固有の位相をもっている。現代世界の矛盾をいかなる次元において映しだしているかによってその意義を異にしているからである。この点を見おとすならば、三つの事件の有機的連関を構造的に把握することもまた不可能となるであろう。

インドシナにおける二つのスターリニスト国家間戦争の爆発は、疑いもなく、戦後世界史の転回を画す結節点として決定的な意味をもつ事件であった。七八年十二月に宣言された米・中国交樹立にたいする政治的反撃をねらうクレムリン官僚の援護射撃を受けつつ、七九年一月にハノイ官僚がベトナム正規軍を投入して、純粋毛沢東主義の遺産としてのカンボジア＝ポル・ポト政権を打倒した。これにつづく二月には、「自主独立」の看板を投げすててソ連派へと転向したハノイ官僚への「報復」を企図した北京官僚が、中越国境戦争にかこつけてベトナム侵略を強行した。このような過程構造をもつ、二つの自称「社会主義国家」同士の戦争は、まさしく中・ソ代理戦争という本質的性格を有するものとしてとらえかえすことができる。

こうして、代理戦争をひきおこすまでにエスカレートした今日の中・ソ両スターリニストの対立は、五六年のスターリン批判とハンガリア労働者蜂起とを本質的契機として開始されたスターリニスト陣営の内部分裂を基底とする中・ソの路線的対立を歴史的前提とし、その極限的エスカレートを示すものではあった。だが、その単純な延長線上に位置するものではない。ソ連中心体制の内部における分裂・抗争ではなく、すでに国家的に分裂した中・ソ対立の発展を前提とし、かかる分裂の動力が北京官僚をしてアメリカ帝国主義権力者との政治的・軍事的結託に走らせたという七〇年代の歴史的与件を媒介として、それが「社会主義国家間戦争」という形態をも必然化させたのである。また、ドル危機とスタグフレーションに悩み、ベトナム敗退後の対ソ軍事力の後退を余儀なくされているアメリカ帝国主義は、中国の政治的、軍事的抱きこみに走らざるをえなかった。この意味において、インドシナにおける二つのスターリニスト国家間戦争は、七〇年代において形成されてきた、中・ソ対立へのアメリカ帝国主義者の介入―米中結託という過渡期の再編成を経て、いまや〈米―中―ソの三極構造〉へと〈帝国主義陣営とスターリニスト陣営の外的対立による現代世界の分割―支配〉の構図を転回させる新たなインパクトとなった。

ここでみのがすことができないのは、クレムリン官僚が一定の内部対立を孕みながら、総じて軍事を積極的に位置づけた対外政策を展開するに至って、インドシナ三国のソ連圏への編み込みをも狙った追求が顕在化したということである。「平和共存」戦略の左翼的解釈を基底とするかかる路線の採用は、アンゴラ、エチオピア、アフガニスタン、南イエメンへの「スターリニスト革命の輸出」という反プロレタリア的形態において、すでに七五年から七八年の過程で次第に明瞭になっていた。これは、国家権力をスターリニストが掌握した国家を「社会主義を指向する国家」と称してソ連圏にくみこみ、アメリカ帝国主義の対ソ核軍事包囲網を各所で寸断しつつ、逆にそれを包囲してゆく陣型をつくりだす。また、これらを拠点とした〝砲艦外交〟の展開によって、ASEAN五か国などに「中立化」を要求した圧力をくわえてゆくというものであった。このようなクレムリン官僚の新たな追求を前提として、インドシナにおけるスターリニスト国家間戦争が勃発したのであり、その結果はインドシナ三国のソ連圏への編入として現出したのである。

スターリニスト国家間戦争の勃発は、スターリニスト圏の内部分解に新たなインパクトをもたらし、ユーロ・スターリニズムの歩調の乱れと亀裂拡大をよぶ。のみならず、その波紋は「非同盟」諸国の内部に及び、その分解をもひきおこした。中・ソの対立を根底にして開花した「自主独立」や「非同盟」の徒花が急速に再編の渦中にのみこまれているのである。そして、これらにもまして重大な問題は、スターリニスト陣営の分解の極限化と新たな展開に規定されて、帝国主義陣営もまたその再編成を迫られたということである。

――イラン動乱と朴暗殺事件は、実はこの脈絡のなかでのみ真相を明らかにしうる問題にほかならない。

イラン動乱は、七〇年代にアメリカ帝国主義が展開してきた、〈石油戦略〉を織りこんだ中東支配戦略の破綻を表現するものにほかならなかった。ワシントン―リヤドーテヘラン枢軸の形成をテコとして〈アラブ穏健派〉を育成し、〈アラブ強硬派〉とその背後に控えるソ連の影響力を削りとることによって、〈イスラエル対アラブ〉という政治的構図を転換してゆくところに、「中東和平」の戦略的目標があった。それは同時に、価格カルテルとしての性格を帯びたOPECに楔をうちこみ、メジャーの権益維持を実体的内容とする石油戦略の展開にとって不可欠な中東の政治的安定化を実現しようとするものであった。パーレビ王制という形態をとった軍事ボナパルチスト権力は、このようなアメリカの戦略に従属した「近代化」政策をつうじて己れの基盤を固め、〝中東の憲兵〟として登場しようとしたのである。

だが、この「近代化」のもとでの金融資本的蓄積は、パーレビ王家と一部の特権官僚層が尨大な石油収入を独占しつつ一握りの資本家層として成長するにすぎず、農牧業を基礎とする産業構造と結びつく零細な小経営（バザール商人）の中から民族ブルジョアジーが成

長することをも防げる形で進行するという畸型性をあらわにした。この畸型的な政治経済構造を物質的基礎とした社会的矛盾こそが、「近代化」政策に媒介された資本蓄積の〝買弁的性格〟に反発するバザール商人層を基盤とする民族主義的小ブルジョアジー、農牧業の荒廃のもとで貧困化した大多数の農牧民ならびに都市失業者を基盤とするシーア派教会、一部の太工業資本のもとで搾取される労働者階級と彼らを基盤とする社会民主主義者ならびにツデー党（スターリニスト）を基本構成とする諸階層および政治勢力がパーレビ打倒の社会的合力を形成する源泉となったのである。このゆえに、イラン動乱は「王制」の形態をとった軍事ボナパルチズム権力を打倒し、それぞれの社会的―階級的基盤に根ざした諸政治勢力がその妥協としての「共和制」を実現するという形態において、国家の統治形態の転換をもたらした。したがって、それは現存の政治経済構造に一定の偏倚をもたらすとはいえ、生産様式の変革＝社会構成体の転換を必然化する社会革命として実現されたわけではない。イラン動乱を「第三世界」の西欧的「近代」にたいする「革命」としてとらえる一部の見解は、〝イスラム・ルネサンス〟を語る手合いと同質の社会学的通俗化ではあっても、決して社会科学的把握たりえないのである。

それはともかくとして、中東の一角において噴出した矛盾の風穴は、アメリカ帝国主義にとって重大な意味をもつものとなる。インドシナ三国のソ連圏への編みこみをつうじて軍事を積極的に位置づけた対外政策の展開に拍車をかけたクレムリン官僚が、シベリア―インドシナ―アフガニスタン―南イエメン―エチオピア―アンゴラを結ぶ対米軍事包囲網をもつくりだしつつあることに根本的に規定されて、アメリカ帝国主義の中東戦略＝支配体制の最重要の一角の崩壊という問題も帝国主義陣営の内部分裂に弾みをつける要因へと転化したのだからである。すでに米・日・西独（EC）間での激化していた通貨―通商戦争に示される帝国主義諸国間の争闘は、変動相場制の鏡に絶えざるドルの減価を映していたが、それはイラン動乱を契機としたOPECの石油価格大幅引きあげ―第二次石油危機を必然化させる前提となった。ここに石油危機→インフレ悪化→スタグフレーションという危機のサイクルが、程度の差こそあれ、帝国主義諸国を同時に襲来するという事態として生みだされる。この危機の波をかわそうとする西ドイツを〝盟主〟としたECは、通貨ブロックとしての結束を固めて、アメリカ帝国主義からの相対的な〝自立化〟の動きを強めるわけである。さらに、日本帝国主義の内部でも、すでに、〝資源・エネルギー自立派〟（田中派）や〝自主国防強化―軍事タカ派〟の動向が顕在化していた。これらにたいしてアメリカ帝国主義主流・東部エスタブリッシュメントはロッキード・日韓・ダグラス・グラマン・ボーイング疑獄の暴露をつうじて、そのつど彼らの擡頭を抑えこんできたのであるが。

こうしてアメリカ帝国主義は、他の帝国主義や同盟国との利害調整を含む関係の再編成をつうじて、その世界支配戦略上の風穴を補修していかなければならなかった。朴暗殺の決行も、この流れのなかに位置する。それは、アジア支配戦略の核心的目標をなす南北朝鮮の分断固定化にむけて、アメリカ帝国主義が根回しした謀略にほかならない。

もともと朴政権はアメリカ帝国主義が「中国封じこめ」政策にもとづいて反共軍事ボナパルチスト国家・韓国を「反共の防波堤」として育成し強化してゆくという旧来の戦略に沿って機能させられてきたのであったが、この朴政権は、アメリカが「中国封じこめ」政策の転換をつうじた世界支配戦略の転回を明らかにした十年前のときから、本質的に再編成を迫られていた。だが、米・日内の韓国ロビーと結託した朴政権の抵抗に直面してアメリカ東部エスタブリッシュメントは、中国を抱きこみつつ南北朝鮮の分断固定化をすすめるという新たな対中・対韓政策の物質化を妨げ

られてきた。日韓疑獄暴露をつうじた朴の政治的失脚の工作、あるいは「人権抑圧批判」をつうじた朴の円満退陣の工作も、これまで貫徹しなかった。それどころか、朴政権は七九年夏以来、ポスト朴の受け皿の一角としてアメリカがテコ入れしてきた新民党、金泳三に弾圧を集中し、カーター政権に泥をなげつけたのである。経済的危機の深刻化を基底にした社会的諸矛盾の噴出に対応するには朴の官僚軍事専制体制の継続をもってしては危険であり、より安定した政治支配体制の創出が不可避であるとみていた東部エスタブリッシュメントは、この期に及んで朴暗殺の引き金をひいたのであった。こうした経緯からしてポスト朴の支配体制は「朴なき朴体制」として朴の影となりつづけるものではなく、軍事ボナパルチズムの統治形態の転換を措定するものになるといえよう。

B既成左翼の右傾化に抗した八〇年代階級闘争の指針

七九年の三大事件のなかに浮き彫りになった〈八〇年代〉を予見させる国際的構図のなかで、日本帝国主義も新たな胎動をみせている。その特徴は、第一に〈五五年体制〉の崩壊以降の過渡的再編を経て、中道ブロックの一定の伸張を前提にした「保革連合」への動きがいよいよ顕在化していることである。しかも総評右派執行部の「社公」中軸路線の選択をも契機とした労働戦線の右翼的再編成に重大なエポックがつくられようとしているのであり、政治支配体制の再編成はその〝下部構造〟にまで波紋をひろげているのだ。第二に、アメリカ帝国主義との軍事同盟の飛躍的強化を基礎にした軍事・戦争政策の本格的展開。「ソ連脅威」論の一大鼓吹をもつうじて、その国民的地ならしが進むと同時に、底流においては〈経済の軍事化〉をおしすすめる独占資本の胎動が強まっている。第三に、「米・日・中協力」の現実的態様をめぐっては日・米間に一定の対立がこの先も生みだされるだろうが、いずれにしてもこの政治的枠組みの強化を前提とした日本独占資本の活動をつうじて「円建て貿易、円決債圏」というかたちでの一定の経済圏づくりが進行するであろう。それは、スタグフレーションの泥沼化というかたちでいよいよあらわになる〈資本の過剰〉を基底にした矛盾の表現であり、その外的転化としての意義をもつものにほかならない。そして第四に、このような経済的危機を対内的には搾取、収奪のいっそうの強化によって労働者・人民に転嫁する体系の確立が模索される。現に政府・支配階級は、代替エネルギー開発を一契機とした産業構造の再編成や、それを媒介するための財政、金融政策面からの大衆収奪の強化に訴えつつある。

さて、こんにち、日本の労働者・人民は、政府・支配階級の政治的、軍事的かつ経済的な諸攻勢のまえで、いよいよ苦難を強いられている。にもかかわらず、既成指導部社会党、共産党は、政治支配体制再編成の暴風雨にまきこまれ、労働者階級にたいして呪うべき武装解除を説いているのである。

いうまでもなくわれわれは、現代世界が提起する諸課題にたいして、①反戦闘争＝B_1（帝国主義とスターリン主義によって分割支配されている現代世界の特殊性のゆえにうみだされる、帝国主義者とスターリン主義者の軍事＝戦争政策および戦争に反対する闘い）②反合理化闘争＝B_2（国家独占資本主義のもとでの直接的生産過程の技術化をめぐって提起される諸課題をめぐる闘い）③政治経済闘争＝B_3（国家独占資本主義のもとでの政府の社会・経済政策や労働市場を含む流通過程から提起される闘い）④経済の軍事化阻止の闘い＝B_4（国家独占資本主義のもとでの過剰資本の処理の一典型形態をなす「経済の軍事化」――それにむけた軍需独占体の兵器生産、兵器輸出に反対する闘い）⑤新植民地主義的進出反対の闘い＝B_5（国家独占資本主義のもとでの商品＝資本輸出の構造変化を基礎とする新植民地主義的経済進出から提起される諸課題をめぐる闘い）などの特殊的運動＝組織路線にもとづいて、その時々の大衆闘争を組織化しつつ、日本階級闘争のただなかに反スターリン主義革命的共産主義

運動の実体的基礎を強化、拡大してきたのである。七〇年代後半において、社共既成左翼の闘争の歪曲と裏切りに抗し、それを革命的にのりこえつつたたかいぬいてきた反戦＝反安保闘争、中・ソ代理戦争反対の闘い、物価値上げ反対の政治経済闘争、原発、核開発反対闘争などの闘いは、右のような運動＝組織路線の適用において創造されてきた。そしていま、われわれはこれらの闘いの地平にふまえ、〈八〇年代〉においてすでに問われている諸闘争の大衆的＝革命的な組織化をおしすすめていこうとしている。

日帝・自衛隊の参戦態勢強化を図る八〇年リムパック＝合同演習参加を粉砕する反戦闘争の創造、そして原発、核開発反対の闘いの革命的組織化、さらに大平政権による一大増税攻撃に反対する政治経済闘争の創造。――いま切実に問われているこれらの闘いの組織化において、わが同盟はいよいよその真価を発揮し、八〇年代闘争の新たな地平を切りひらいてゆくであろう。

C権力の謀略攻撃に反撃し一切の走狗集団の解体へ

われわれはこれらの諸闘争の組織化を媒介にしてわが革共同・革命的マルクス主義派の組織的強化を実現していくものであり、またこれを実体的基礎にして、日本階級闘争の左翼的転換をかちとっていくものである。政府支配階級はその物的基礎＝根深い経済的危機に規定されて、政治支配体制の動揺を深めている。とりわけ、いわゆる五五年体制の崩壊期における政治エリート間の抗争が激化している現時点において、既成左翼の著しい体制内化と階級闘争の右傾化のただ中で、この現実に抗するわが同盟の任務はいよいよ重大なものとなっている。日本階級闘争の左翼的転換をきりひらく理論的、思想的内実と組織的実体的基礎をもちえているものはわが同盟をおいては皆無であるというのが日本階級闘争のいつわらざる現実であろう。

それゆえにまた、わが同盟にたいする国家権力の公然たる弾圧と謀略的手段をもちいた組織破壊攻撃が激化しているのである。すなわち、わが同盟が推進してきた党派闘争によってブクロ＝中核派ならびに社青同解放派が追いつめられ、組織的瓦解が著しく進んだ。この段階で特定政治エリート（田中角栄一派）と結びついた権力内謀略グループ、ならびにこれらの実体と直接的に結びついた公安警察官僚の一部のものは自己のイニシアティブの下に警察機構とその権限をフルに活用しつつこの党派闘争に介入し組織的危機に瀕したブクロ＝中核派や社青同解放派にたいして陰に陽にテコ入れを行なった。

そればかりか、わが革マル派を破壊するために権力内謀略グループは①権力（内謀略グループ）の権力（内謀略グループ）としての襲撃②権力内謀略グループがその走狗（中核派や解放派）を偽装した殺人襲撃③権力内謀略グループと走狗どもとがいりまじった合作襲撃④権力内謀略グループならびにこれと結びつく特定の公安警察から情報の提供をうけた権力の走狗による革命的左翼ならびにわが革マル派シンパとみなされた労働者、学生、市民への襲撃⑤警察権力と資本当局とが日共や民同を利用し、かつ権力の走狗どもを活用して（直接的な襲撃や組織暴露の攻撃を契機とした）革命的、戦闘的労働者をパージする攻撃など、各種の謀略襲撃を企て実行してきた。

だが、わが革マル派は微動だにせず、逆に権力の謀略を粉砕し、権力の走狗を一掃する闘いを階級的、大衆的に組織化してきた。この闘いは社会的な拡がりをみせ、今や、「警察権力による〝内ゲバ〟を偽装した革命的左翼への襲撃」という事態は社会的常識とすらなっているといえよう。多くの労働者、市民、知識人が〈現代の謀略〉について、昨今社会的な焦点となっている数々の冤罪事件とともに注目しはじめている。

七九年十一月二十日に水本事件の真相を究明する会（注1）が主催し、「平沢貞通氏を救う会」と「新居浜人権を守る会」（財田川事件の被告の救援団体）が共讃団体となって「あらゆる冤罪、権力犯罪を告発する11・20国民大集会」が開催された（於大田区体育館）。集会には平日であったにもかかわらず八千人の労働者、学生、市民、知識人が結集した。この事態からも権力の謀略に抗議し、冤罪を告発する人民大衆の関心の拡がりと憤激の深さを見てとることができる。われわれは「水本事件の真相を究明する会」の呼びかけに応え、11・20集会の成功のために努力した。と同時に謀略を追認する権力の走狗どもの存在が、権力内謀略グループによる数々の謀略殺人襲撃や謀略ゲリラ（三里塚ゲリラやサミットゲリラの殆どのもの）が可能となる政治的、社会的根拠となっている、という現実認識にふまえ、権力の走狗を社会的に包囲し、一掃する思想的、組織的闘いを強めてきたのである。こうした闘いを基礎にしてスパイ集団ブクロ＝中核派の領袖、本多延嘉を打倒し（七五年三月十四日）、最近においてはブクロ派軍事組織の（かつての）最高責任者清水丈夫の思想的、組織的打倒を実現してきたのである（清水丈夫は七九年初頭に、ブクロ派内で失脚し、蒸発した。その客観的証としてわれわれの目の前に出されたものが、ブクロ派のエセ『共産主義者』四一号の〝津久井〟論文である。この〝津久井〟論文は清水丈夫＝津久井良策の「理論＝妄想」の体系をことごとく否定している。たとえば、清水の理論的トレードマークである日米争闘戦の激化→日米戦争の勃発、朝鮮侵略戦争の勃発という情勢認識の否定ならびに〝侵略戦争を内乱へ〟という基本路線の放棄など）。

また、われわれは権力の走狗・社青同解放派を解体する闘いをも最終的段階におしあげた。わが全学連戦士は、七九年十一月二十一日に解放派の軍事＝情報拠点三か所を摘発し、解放派軍事委員会のキャップをはじめとする最高幹部六名に革命的＝教育的鉄槌をあびせた。そうすることによって、準備されていた謀略殺人襲撃（注2）を未然に防ぎ、わが反スターリン主義運動とその担い手を防衛したのである。右の三か所から、埼玉県警の内線電話番号まで記入したメモ（特捜本部への連絡を指示）ならびに七九年十月十日の三里塚の鉄道謀略ゲリラをめぐって解放派幹部が、〝桜田門〟（警視庁）へ電話をして〝軍報〟なるもののデッチ上げに窮々としていた模様を記したメモや七九年の六・九事件（専修大生二名虐殺謀略）の追認をめぐって事件後の調査をしたためたメモなど多数の文書を改造ガンや日本帝国陸軍の軍事教典とともにわが全学連戦士は奪取したのである。それゆえに、われわれは、権力の謀略を追認するための権力との連絡拠点であるところの解放派の軍事＝情報アジトを粉砕したのであり、いわば、謀略追認本部を摘発し解体したのである。とうしてわれわれは、権力の謀略を粉砕し、走狗集団を一掃する闘いを決定的に前進させたのである。

われわれは、八〇年代においても吹きすさぶであろう暴虐の嵐に抗してわが反スターリン主義運動の革命的飛躍をかけて全力をあげて奮闘していくものである。

（注1）一九七五年七月九日に上智大学構内で発生した「内ゲバ」事件（中核派が追認）で、日大生水本潔君は起訴され、公判中の七六年十一月二十一日の早朝、下宿先を出たまま行方不明となった。翌年一月十七日、彼の両親は、市川警察署からの電話で「一月六日江戸川で発見された水死体は指紋照合の結果、水本潔と判明した」という連絡をうけた。市川署を訪れた両親は、水死体の写真に息子の面影をみいだすことができず、また水死体の興奮数本にかぶせてあったというプラチナ冠もあきらかに潔君の歯型とはちがうので遺骨や遺留品のひきとりを拒否した。あきらかに水死体は水本君とは別人の死体であることが判明したのであった。わが同盟と全学連は、水本君の謀殺・遺体すりかえを弾劾する闘いを全国の職場、学園から組織化した。その後左翼知識人によって「真相を究明する会」が結成された。

（注2）早稲田大学、東京大学（駒場）東京工業大学、国学院大学、専修大学などの各構内において、あきらかに（襲撃）準備と思われる動きが（七九年八～十月に）キャッチされ、全学連の学生諸君は敏速に行動し、組織防衛の措置を講じた。

大武思想の旗のもと革命的前衛党を再建し日本革命を勝利させよう！

日本共産党再建準備会議

はじめに

内外の情勢は真の革命的前衛党の再建とその指導ぬきには、闘いが一歩も前進できない段階に到達している。一九七九年七月十五日、日本共産党再建準備会議が東京で発足した。

この会議は日本革命と日本共産党の偉大な歴史の唯一・正統の継承者であり、現代におけるマルクス・レーニン主義としての大武思想の完成者である大武礼一郎議長によって召集されたものである。日本マルクス・レーニン主義運動、共産主義者同盟（国際主義派）、関東地方階級的・戦闘的労働運動研究会、関西地方階級的・戦闘的労働運動研究会、明治大学レーニン主義研究会、日本人民青年同盟、日本民主主義婦人同盟、民主主義経営者連合、の八団体が参加した。そして、一年後の一九八〇年七月十五日に「日本共産党再建第七回大会」を開催し、日本における革命的前衛党を正式に再建することを内外に宣言した。

「われわれの手によって再建されるべき党は、第一に思想建設のうえからはマルクス・レーニン主義の理論上の原則（①国家学説②階級闘争③プロレタリア独裁）にしっかりと立つこと。第二に政治建設のうえからは日本革命の主力と指導力は労働者階級であり、彼らの大事業であるというプロレタリア的実践綱領の立場にしっかり立つこと。第三に組織建設のうえからは「左」右の清算主義（小ブルジョア思想）に反対し、国際共産主義運動と日本共産党の革命的伝統（①徳田球一の獄中十八年、権力に屈しない不屈の革命精神②渡辺政之輔・市川正一に代表されるプロレタリア革命派が堅持したブルジョアジーに対する階級的憎悪と死を恐れぬ革命的英雄主義③はじめから宮本修正主義打倒の闘いを展開してきたわれわれの初期における追放と孤立と飢えに耐えた革命的戦闘性）を断固として継承しなければならない」（『日本共産党再建準備会議声明』）

われわれが歴史と人民の要請に応えて創出せんとする革命的前衛党の三原則は以上の通りである。

一、日本革命についての綱領的見地

日本革命に関するわれわれの綱領は『生活と権利・自由と民主主義・独立と平和を要求するすべての人民は固く団結せよ！ ―民主主義革命をめざす日本人民の綱領―』である。

内容の骨格は次の点である。

（一）国際情勢

現代世界の基本情勢をひと言でいえば、現代帝国主義と資本主義は全面的危機の段階に到達している、まさに帝国主義陣営の大動乱と、民主主義と社会主義の陣営の大勝利の時代、ということである。

主要な情勢は、米・ソ二つの帝国主義が、米帝の主導する戦略的同盟・戦術的対立の関係を通じて世界の共同支配をめざしていること。世界の労働者階級と人民、諸民族を苦しめている国際上の主要原因は、米・ソ帝国主義による世界支配と収奪、そしてこれに追随し、隷属して反動政策を推し進める各国反動勢力の存在である。これが戦争と帝国主義、反動と反革命の陣営である。

これに対立して闘っているのが、全世界の労働者階級と革命的人民である。これが一方の革命と民主主義、平和と社会主義の陣営である。生活と権利・独立と自由・平和と社会主義という基本的要求をかかげて闘う国際的な階級闘争の指導力は、プロレタリア国際主義とその共同戦略であり、次の四項目である。

第一に、自国における階級闘争の発展と勝利、民主主義と社会主義をめざす人民闘争の発展と勝利。第二に、国内および全世界にわたる米・ソ二つの帝国主義に反対する国際統一戦線の強化と拡大。第三に、国際的規模におけるもっとも激しい矛盾の集中点に対する国際主義的共同闘争の強化と、ここでの勝利を外線へと拡大させること。第四に、一貫して国際主義を強化・発展させ、国際革命勢力を強化・発展させ、各国の革命勢力・人民権力との結合を強化・発展させること。以上である。

（二）国家権力の規定

現在、日本の国家権力をにぎって日本を支配しているのは、金融資本を頂点としたひとにぎりの独占資本である。独占資本はその権力をほしいままにしている。日本は独占ブルジョアジーによるブルジョア独裁の国家である。日本に人民の民主主義は存在しない。

この独占資本は、第二次世界大戦後の特殊な事情から米帝に日本の国土と民族の主権の一部を売りわたしてすがりつき、米帝の力をかりて支配権を守ってきた。米帝は日本独占資本を目下の同盟者にし、アジアにおける手先の役割をひきうけさせることによって、支配と収奪の帝国主義的欲望を実現している。ソ連社会帝国主義もまた日本独占資本の弱みにつけこんで、北方領土と北洋を略奪している。

戦争と帝国主義陣営に属し、日本において人民抑圧政策を行っている主敵・独占資本と正面から対決し闘争しているのが日本労働者階級と人民である。生活と権利・自由と民主主義・独立と平和という人民の要求実現をめざして闘っている。人民はいま、国の政治と経済と社会のすべての面において根本的な変革、民主主義革命の勝利を切望しているのである。

（三）日本革命のコース

われわれの当面の段階における革命的任務は〝生活と権利・自由と民主主義・独立と平和〟という、労働者階級と人民、民族と国家が求めている最大の、しかも切実な焦眉の、主要で根本的な要求を実現することである。

この要求はすべての人民の要求であり、民主主義的な要求である。したがって労働者階級の指導のもと、人民の団結にもとづく民主主義革命と、民主主義革命の過程において実現されるプロレタリアートと人民による革命的民主主義的独裁・人民の権力（本質にはプロレタリア独裁）によってのみ、人民的要求・民主主義的要求は実現し、達成される。

党とプロレタリアートは、民主主義革命を実現するやいなや、ひきつづき革命的人民と共に、全人民を固く統一させ、つぎの目標、

すなわち、偉大な社会主義に向かって前進する。党の最終目標は人類にとって最高の社会制度である共産主義社会を実現することにある。

(四) 日本革命の戦略課題

民主主義革命を闘うわれわれが、その勝利のために実現しなければならない戦略的課題とは何か。

大武礼一郎議長とわれわれは、日本労働者階級と人民がブルジョア独裁と正面から対決した貴重な三つの体験と闘争を総括し、革命の戦略課題を定式化した。日本人民が独占支配と戦略的に対決した三つの偉大な経験とは、①一九四七年の「二・一ゼネスト」②一九六〇年の「安保闘争」③一九七〇年代の青年・学生を中心とした武装闘争を含む諸闘争である。

「主敵たる独占資本とブルジョア独裁を打倒して革命を勝利に導く戦略課題、それは、第一に労働者階級を主力として実現される人民闘争とゼネストであり、第二にゼネストを防衛しゼネストと結合した革命的統一戦線＝人民戦線であり、第三に反革命を粉砕する革命的暴力・人民の権力である。

これが日本における三つの戦略的武器であり、戦略問題（課題）である」

日本人民の階級闘争が生み出した偉大な成果と教訓であるこの戦略規定を正しく掌握し、忠実に実現させなければならない。ここに人民革命、民主主義革命の勝利と、人民権力樹立への道があるのである。

(五) 日本革命の主体的条件

革命を勝利させる決定的な条件、これこそ主体的条件であり、この主体的条件こそ次の三つの条件である。これがプロレタリア独裁の権力である。

第一に、前衛としての日本共産党の革命的再建を闘いとり、その建設・強化・拡大、その指導力である。第二に、プロレタリアートを中核とする全人民の団結・革命的統一戦線＝人民戦線である。第三に、工場と生産点、大衆組織と大衆の生活点に樹立された闘う人民の権力諸機関と革命的暴力である。

以上である。

われわれはすべての行動と闘争をこの主体的条件の確立のためにささげ、このために奉仕させる。革命とは権力をめぐる争奪である。革命の根本問題とはつまり権力の問題である。すべては権力が決定する。

この点で「プロレタリア独裁の権力は革命をなしとげてから樹立される」との誤った主張について留意しておきたい。理論的には、レーニンがプロレタリア独裁の権力、人民の権力はブルジョア独裁の「旧権力とならんで、旧権力と対抗して、旧権力との闘争のなかで発生し、成長するのだ」（『独裁の問題の歴史によせて』一九二〇年）と述べていること。実践的には「ブルジョア権力を打倒してから」というとき、敵を打倒するには少なくともすでに敵権力をしのぐだけの〝力〟がわれわれにそなわっていなければいけないことは当然である。すなわち、われわれのこのときにおける力、これがプロレタリア独裁の権力なのである。

いたるところに人民の権力を！

以上、右の五項目が日本革命に関するわれわれの基本的観点である。

二、学生運動について

明治大学の二部政経学部自治会は一九七九年四月に「明治大学における学生運動と学園民主化綱領」を発表した。われわれはこの内容を全面的に支持する。ここに学生運動についての路線はすべていいつくされている。

第一に、内外情勢を分析し、階級対立と階級闘争のなかで学生は労働者階級と人民の側にしっかりと立ち、民主主義革命をめざして

闘うこと。その宣伝行動隊、突撃隊となること。

第二に、明治大学に代表される日本の大学の現状を分析し、人民と人民の利益に奉仕する大学をつくるという〝建学の精神〟を今や大学は投げすて、独占資本の下請・末端機関に完全になりさがっていること。このなかで学生は建学の精神を復興させ、学問と研究、思想・政治活動の権利と自由を実現した人民のための大学をめざして闘わなければならないこと。

第三に、階級的・戦闘的学生運動の路線にもとづき、人民闘争・人民戦線・人民権力を一歩一歩前進させること。特に自治会、教授、研究者、職員が一体になって学園評議会という人民権力を断固としてうち立てることが最後の勝利を保障する要である。

三、労働運動と大衆闘争に関する階級政策

大武礼一郎議長は再建準備会議の席上『思想方法論に関する五項目の実践スローガンとわれわれの階級政策』という活動指針を提起された。この階級政策こそ労働運動をはじめとするすべての大衆闘争に対する基本方針である。

「われわれの闘いにおける日常活動の基本政策は、第一に一般的呼びかけであり、第二に個別工作と実践闘争の正しい政策指導であり、第三に中核の組織化である。

運動と闘いにおける勝利の決定的な要因は中核組織の強化と拡大にある。中核組織を強化・拡大させるために必要な第一は、思想工作・政治工作を系統的に追求すること（政治報告、理論学習の制度化）。第二は、実践活動を追求すること（政策討議、実践課題の討議を制度化）。第三は、人間的・個人的な結びつきの強化（生活問題も含めた人間的な信頼関係）、である。

長期にわたる日常活動の蓄積は法則として必ず広野を焼きつくす炎となる。闘いは個別の闘いから大会戦となる。これらの全闘争にわれわれの階級的・戦闘的大衆運動（階級闘争）の戦略・戦術・組織問題に関する基本政策を実践し、貫徹しなければならない。

(一) われわれの戦略思想と戦略方針は何か

第一に、主敵は独占資本であり、国家権力（とその手先）であることを確認し、すべてを階級闘争として闘い、いたるところに正しい路線を樹立する。第二に、生活点・生産点からの闘いを基礎とし、ここに権力を樹立し、この権力を基礎にしてすべての闘いをすすめ、

新日本文学 全頁特集 中野重治・人と全仕事
79年12月発売中！ 特別増大号 特価960円
◆絶筆原稿「返事・お礼・間に合わせ」中野重治 ◆講演記録「文学運動について」中野重治 ◆座談会「楽しき雑談」金達寿、佐々木基一、栗原幸夫、菊池章一 ◆中野重治作品案内（一四篇）◆年譜（松下裕）◆中野重治研究文献・抄（米田義一）
◆評論 寺田透、栗原幸夫、久保田正文、丸山静、国分一太郎、亀井秀雄、いいだもも、小田切秀雄、菊池章一、尹学準、石毛拓郎、竹内実、針生一郎、円谷真護、木村幸雄、土方鉄、秋山清、内田博
◆エッセイ 佐多稲子、石堂清倫、尾崎一雄、上林暁、本多秋五、渡部義通、水上勉、杉山産七、小野十三郎、佐木隆三、日高六郎、森山啓、筒井敬介、浅田光輝、中薗英助、大原富枝、関根弘、土本典昭、湯浅芳子、南雲道雄、しまねきよし、大井正、高田博厚、石田郁夫、錦米次郎、山田今次 他
新日本文学会
東京都中野区東中野1-41-5
TEL.03(362)8771

闘争を通じて権力をいっそう強化する。第三に、統一行動、統一闘争、人民闘争をめざし、これを展開し、人民戦線と人民権力をいたるところにうち立て、その機能を拡大させる。

戦略問題の根本は人民闘争、人民戦線、人民権力であり、すべては人民権力だ、という思想であり、闘争を通じて権力を樹立しこれを強め拡大する、ということであり、あらゆる活動と闘争をこの基本的任務の実現という観点からとりくむということである。

(二) われわれの戦術思想と戦術方針は何か

第一に、生活点と生産点における権力（プロレタリア独裁）を基礎とした三段階到達闘争を一貫して推し進めること。第二に、拠点を構築し、ここをまず固め、ここから一点突破全面波及を闘いとること。第三に、局部を全局に従属させ、戦術を戦略に従属させ、必ず戦術上の決戦（当面する環の突破）を通じて戦略的（基本的）勝利を闘いとること。

戦術問題の基本は、情勢と条件と力量、および闘争の発展段階に応じた戦術スローガンを正しく設定し、この一環を突破して闘いを前進させること。そしてこの闘争を通じて戦略問題と基本的勝利（思想上・政治上の勝利を優先させつつ、組織上・経済上の勝利を獲得する）を闘いとるという根本目標を実現することである。

(三) われわれの組織問題とは何か

第一に、生活点と生産点における権力機構に正しい幹部配置を実現すること。第二に、闘いを横に広げ、連帯と交流を拡大し、中核と幹部、活動家を獲得し、育成し、全戦線に配置すること。第三に、共同行動、統一闘争、人民闘争を強め、一歩一歩権力の機能を上部に拡大すること。

組織問題で重要なことは、闘争にあたっての幹部配置と、闘争の終結と総括にあたっての幹部配置とを厳格に実現することである。すべては幹部が決定する。

(四) 敵の包囲下と孤立のなかでいかに闘うか

ブルジョアジーと右翼日和見主義の包囲下にある革命的幹部と活動家は一貫して三段階循環方式にもとづく活動と闘争を追求することである。第一に、情勢をよくつかみ、分析し、大衆の要求を組織し、われわれの路線と階級政策を正しく樹立する（正しい政策と路線の確立）。第二に、これを組織と機関に提起し、論議を広め、広く大衆に知らせる（一般的呼びかけ）。第三に、われわれの政策と方針をまず拠点にうち立て、拠点を基礎に中核を形成し、ここに権力を樹立する（個別工作、一点突破）。

以上の三つの段階をくりかえし実践しつつ、各段階を運動のなかでひきあげることである。この面での闘いで重要なことは、大衆組織と大衆団体における民主主義の三原則（①批判の自由②行動の統一③思想・政治活動の自由）を徹底的に運用すること。民主主義と権利と自由をあらゆる機関を利用して運用することである。こうして三段階循環方式をくりかえしつつ、組織と機関を根本的に刷新するか、または独自に大衆を組織することである。

(五) 幹部の思想建設を一貫して追求せよ

マルクス主義哲学と階級的人生観を断固として自己の内部にうち立てよ。人類の歴史と社会発展の法則に完全に合致している正統マルクス主義の理論と思想への深い確信。革命的伝統への誇りとその偉大な党への限りなき忠誠。人民への深い愛情と階級敵への憎悪。革命的共産主義者たる自己への確信と光栄ある任務に対する責任感。すべては階級闘争であり、生活と権利と自由への闘いである。徹底した理論と実践の統一、そして指導の芸術性。目前の一時的利益や勝敗におぼれず、いかに正しく闘いぬくかに徹せよ。機が熟するまでの忍耐、機を失うことなき決断と勇気。闘争の非情さに耐えうる思想的強靱さ。組織への信頼と同志愛、そして正しい私生活。学習せよ、実践課題を追求せよ、そして定期的に自己を総括せよ。

人類の未来は社会主義と共産主義であり、歴史は偉大であり、それは到達すべきところに必ず到達するであろう。

輝ける革命的共産主義万歳！」

むすび

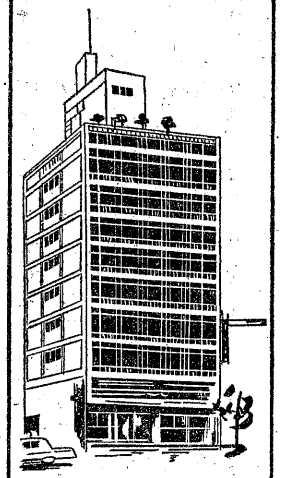
現在、新左翼党派諸組織の総括運動が前進している。ここに八〇年代の明るい展望が示されている。新左翼は、第一に一九五〇年代に台頭したフルシチョフと宮本修正主義の右翼日和見主義に断固反対し、第二に敵権力に対して一貫して死を恐れぬ闘いを展開し、第三に宮本修正主義にとって代る前衛党を創出せんと闘ってきた。この革命的精神、戦闘的精神、前衛党創出への意欲はまったく正しいものであった。しかし今日、願望とは逆の結果に陥り、混迷の極にあるといってよい。

新左翼にとっては、今こそマルクス・レーニン主義の理論上の原則にもとづき、自らの実践を思想と政治、組織にわたって全面的に総括し、戦線を再整備することが求められている。この点で、共産主義者同盟（国際主義派）が一九七八年八月に『今こそブントの総括運動をはじめなければならない！』と呼びかけ、自らも中心点たる五項目の課題（①日本帝国主義規定②一段階社会主義革命論③プロレタリア独裁権力論④プロレタリア国際主義と世界革命⑤トロツキズムと反スターリン主義）について総括を展開してきた。われわれは一九七九年十月八日に『日本における新左翼運動を理論的・政治的に総括せよ！』としてまとめて発表したが、これこそ新左翼二十年の血の結晶であり、内容は完全に正しく深いものである。

われわれは新左翼運動を闘うすべての人びとが、真剣に学習されることを心より期待するものである。

日本人民の解放と日本革命の勝利のために偉大な前衛党・日本共産党再建大会の勝利をめざし、すべての革命的共産主義者は偉大な大武思想の旗のもと、固く団結しよう！

株式に…
国債に…
公社債に…



堅実投資でわが家の幸福
極東証券
本店
東京都中央区日本橋茅場町1-6
電話 (667)大代表9171
支店=新宿・平塚
日比谷・築地・立石

思想の復興をかけ、肉体の死滅を辞さず歴史創造へむけ、戦時の人間的変革活動に起ちあがれ！

マルクス主義青年同盟

力尽さずしてとりこんだものは必ず失い、力、及ばずして失ったものは必ず奪回することができる！

戦時の様相を深めていく八〇年代を前にして復党運動が、わが党・マル青同から提起されている。復党運動という聞きなれない概念の前で第三期の諸政党の人々が「マル青同がまた我々には理解の及ばない何かをはじめるらしい」と、その磨滅し切った人間的理性と感性で、わがマル青同に注目しているようだ。

復党運動とは何なのだろうか?!

復党運動とは八〇年代に何をなし得る運動なのだろうか?!

復党運動とは誰に対して提起されたのだろうか?!

復党運動とは、文字通り、党に復帰したいと思っている人々、党に復帰すべき人々を組織する運動である。第三期の諸政党にはまだこういってもまったくわからないようだ。マル青同は、その建党の大義と七〇年代の党史によって、党に復帰させなければならない同志を多数かかえている。第一は、六十年になんなんとする日本共産主義運動が、その過程の何回かの結節をなす諸闘争の中で、真剣に闘いながらも一敗地にまみれて、共産主義者としての自覚と信念を持ちながらも自分が結集するべき真のレーニン主義の確固とした党の未形成ゆえに、共産主義運動そのものから脱党せざるを得なくなった多数の同志を生み出しているのである。第二は、マル青同の結成以降の七〇年代の、日本共産主義運動五十有余年の歴史的断絶を埋め尽し統合する真に確固としたレーニン主義の党、革命的情勢に応じた組織をつくりだす義務へ自らに課すレーニン主義の党、これを建設しなければならないという建党の大義に基づく闘争の遂行の中で、平時から戦時の政党活動への飛躍を闘い取ることができずやはり一敗地にまみれて、日和見主義の誤りを犯し、脱党せざるを得なくなった数百人の同志がいるのである。これらの人々が、一定の政治的な質をもった層として現在の日本社会の中で現に存在している。彼らは、敗北を喫し、その敗北の原因をレーニン主義的に把えることのできなかった者特有の諸傾向—主に第三期的な、すなわち指導部活動と被指導部活動の根本的差異を承認できないところからくる。指導部活動に対する軽信、無知、無自覚、という諸傾向—を持っているが、しかし同時にまじめな信念に基づいて生きた人々なのである。僭称マルクス主義者の俗物には理解できないかもしれないが、投機のためでなく、単なる思いつきのためでなく、まじめな信念に基づいて闘った人々の多くは、現実的な結果としては党に残っていないが、その心情では、であるがゆえにより一層真のレーニン主義党を求め、また擁護するという気分を保持しているのである。数百数千という小集団の利益においてしかものごとを考えられないセクト主義を排し、真剣に労働者階級の解放を指導する革命的な党のことを考えるならば、こういうことを闘争に生きた複雑な人間の問題として理解することができるのである。

ひとつ例をあげよう。すでに多くの人が知っている通り、マル青同の指導幹部はその九〇%以上が脱党している。彼らは確かに戦時の政党活動を確立し得るレーニン主義の党建設の中で日和見主義という誤りを犯したが、しかし、このような闘いに赴いたこともない俗物活動家と彼らとには、その気概においても能力においても一線がある。彼らは第三期的な反マル青同分派をつくれるくらいの力はあるがついぞこれまでそのようなことはなかった。何故か、彼らの大部分には、俺は敗北した、だが腐っても鯛、党はひとつマル青同のみ、という信念があるからである。マルクス読みのマルクス主義知らずでは、この客観的な現実を深く理解できないであろう。

いずれにせよ、日本共産主義運動が生み出さざるを得なかったこれらの同志を組織する、組織できるのだ、という思想—政治路線の無い政党はレーニン主義とも無縁なのだ。だが同時に、個々の元活動家の復帰ではなく、戦術として展開される運動としての復党には、それなりの理由がなければならない。何故七八年ではなく七九年暮だったのか、何故八二年では駄目で七九年暮でなければならなかったのか。

理由は簡単である。七〇年代、レーニン主義の党を建設する闘いの中でマル青同は、多大な犠牲を払ってレーニン主義の指導部活動を確立し、確固たる党の主体的基礎をつくりあげてきたからであり、一方、第三次再分割戦が激化し、同時に三無的奇型的な日本帝国主義が衰退期へとむかう中で、八〇年代は戦時の情勢をますます深め、「愛国」翼賛—三無ファシズムが日程の問題ではなく具体的な現実として推進されはじめたからであり、それが七九年の情勢を通して労苦人民にも一定理解されるところまできたし（わが党は、この情勢の移行を党内闘争の局面の推移との関連で分析できるのである）、さらに日本共産主義運動の歴史的断絶が現実的に埋められ、一本の系統的な六十年近くにわたる党史として統合され、必死になっている敵の陣営に対して救国済民の陣営—党が形成されなければならなくなっているからである。主体的条件と客観的条件との結合の端緒が八〇年代を直前にして射程に入ってきた。わが党・マル青同は、第三期の諸政党ではないから、歴史と階級が、すなわち事実がそれを要請してきた以上、これまでも常にそうしてきたように、これに応えるべき責務があるのである。こうして、わが党・マル青同は、第三期の諸政党の不可知を尻目に、八〇年代にむけて救国済民の重要な一戦線として復党運動を全党全労苦人民、共産主義者に提起したのである。

ところで、筆者は、言って見れば、その復党運動の中で党に復帰した第一号とでもいうような者である。私は、七五年マル青同の建党の大義にしたがって闘っていながら、革命的なレーニン主義的なありとあらゆることを口にしながら、レーニン主義の党建設の決定的な環である非合法党の確立のための指導部（活動）の分業の問題が問われた時、カウツキーばりの背教をやってのけ脱党したのである。あれほど嫌悪していた、労働党に流れた旧ML系の指導幹部と、政治的には等しい誤りを犯したことを知った時、そのショックたるや、……絶句である。だが、思想的にはすでに述べてきたように、六〇年代後半の革命的大衆運動への決起以来、真剣に真理を求めて闘い、とりわけマル青同に結集してからは、これこそ真理を食って生きていく闘いの日々であったがゆえに、脱党したとはいえ、まさに腐っても鯛、党はひとつマル青同、と

いう信念は一時たりとも崩れることはなかったのである。復党運動に参加し、党への復帰をかちとるまで、大衆的な次元における一般においていえば私はそれなりにまじめに真剣に生きてきた。だがそれは矢張り、共産主義者としては痛恨の年月であることに変わりはない。日常生活の中から情勢の戦時への推移が見えるようになった時、マル青同・党中央は復党運動を提起してきた。マル青同から脱党した同志諸君！　そして日本共産主義運動五十有余年の歴史の中で、やむなく建党の道につくことができなかった共産主義的な信念を堅持している同志諸君！　歴史と階級が、わが党・マル青同をして同志諸君が再び共産主義者としての栄誉を担うべく、「愛国」翼賛―三無ファシズムと闘う戦場に、反帝、反社帝の旗の下に、社会主義の旗の下に、救国済民の党の下に結集することを要請している!!　これが、わがマル青同・党中央が提起している主旨である。私は、この提起を受け入れ、そして今、再び共産主義者として闘いを開始している。中央指導部の指導の下で、数年間の空白を埋めつつ救国済民の一部署を担って闘っている。

八〇年代は、歴史に次のことを刻印するであろう。

力尽さずしてとりこんだものは必ず失い、力及ばずして失ったものは必ず奪回することができる!!

第三期の諸政党が、七〇年代とりこんだものは必ず八〇年代に失うであろう。

我々が失ったもの―党と党規律、革命の理論と戦術、そして英雄主義、同志―は、救国済民の復党運動の中で必ずや奪回することができる!!

まじめな信念ある共産主義者は、真理の前でちゅう躇するものではない
人類史の後史へむけてよりシッカリとそれを把まなければならない

私は前節で、復党運動に参加する中で数年間の空白を埋めつつあると書いた。ここで是非ともこの空白の過程でわが党・マル青同がつくりあげたものについて触れなければならない。

私が脱党したのは七五年であり、復党運動に参加したのは七九年秋期の党建設参加運動が提唱されてからである。空白の期間はわが党、マル青同の七〇年代後期の党史にあたる。

七〇年代後期、わがマル青同・党中央は何を党史として闘い、打ちたててきたのだろうか?!　この七〇年代後期の党史と私の四年間にわたる脱党生活の空白の間には何が生み出されていたのだろうか?!

わが党・マル青同が七〇年代に確立していったものの大部分は、第三回大会路線の内実として七〇年代後期の闘争の中で打ちたてられていったのである。

わがマル青同・党中央が七〇年代後期確立したものは、レーニン主義の党と党規律―レーニン主義の綱領―組織―戦術を不断に質的に拡大再生産していく指導部活動に他ならない。日本共産主義運動五十有余年の中でレーニン主義者たらんとしたものが全身全霊を賭けて闘いとらんとし、ついに徳球ですらがなし得なかったものに他ならない。

レーニンが、そしてレーニン死後のレーニン主義者が不断に追求してきたのは、「数千年にわたる人民運動抑止・寸断―人民分裂をやることによって成り立っていた多種多様な有産階級の指導部活動に終りをつげ、プロレタリア階級の組織者としての役割を高め上げて歴史の後史を切り開いていく」というそれまでとは質的に飛躍した歴史創造のための指導部活動を、いかに首尾よく確立し、それを常に革命的に深化させていくのか、ということであった。歴史の前史から後史へと移行していく闘いは、レーニン死後の国際共産主義運動の苦難の歴史を見てもわかるように俗物の想像を越えた断絶と飛躍があるのである。この闘いの困難さは、前史の指導部活動と後史の指導部活動との根本的差異をしきつめる闘いの困難さばかりではなく、前史の被指導部活動と後史の被指導部活動との根本的差異のしきつめ、さらにこの後史の指導部活動と被指導部活動との根本的差異をもしきつめる闘いなくして、真に人類を後史へと移行させていくことが不可能である、という複合された困難さにあるのである。日本共産主義運動の過去の歴史は、この課題の前で日本のレーニン主義者が刀折れ矢尽きて一敗地にまみれて、指導部活動をその都度断絶させてきた歴史だったに他ならない。同じような苦闘を国際共産主義運動も経験している。だがこの面でいえば、その最終的な闘いは、わが党・マル青同・党中央に引き継がれたとはいえ、スターリンも闘ってきたし、スターリン主義批判以降は毛沢東がそのあとを継いで闘ってきた（人類史が総体として発展しているのは、これらの献身的なレーニン主義者によってレーニン主義の指導部活動がそれなりに堅持され、その活動の下で被指導大衆が歴史を進展させてきたからに他ならない）。

わがマル青同・党中央は、六〇年代後半のあの偉大な「反帝国際主義、自国帝国主義打倒！」の革命的大衆行動の、党としての敗北の総括からこの課題が二〇世紀の歴史的な人類の課題であることを理解したのである。以来、七〇年代をかけてこれを追求し、そして七五年のこの課題を担う上での日和見主義との闘争に勝利を納めてから、この課題を全党全人民に提起してきたのである。その歴史的に普遍性をもった特異な戦術こそが、七〇年代後期闘われてきた、指導部活動に対する軽信、無自覚に酢と胆汁を注ぎ込み、もって指導部活動と被指導部活動との根本的差異をしきつめよ！　という闘いであった。

こうして七〇年代後期、わがマル青同・党中央は、意識的・民主主義的・プロレタリア的中央集権制の強化をはかる統合活動としてのレーニン主義の指導部活動を確立していったのである。

レーニン主義の指導部活動が確立されたことによって、当然のことながら被指導部活動も変革されざるを得ない。意識的・民主主義的・プロレタリア的中央集権制の強化をはかる統合活動によって、何よりも根本的に変革されたのはその組織生活である。この組織生活は二十四時間の党生活として七〇年代後期打ちたてられていった。言葉は便利であるがこのような問題を語る時、それは全く力とならない。この二十四時間の党生活とは、第三期の諸政党の諸君が理解できないばかりではなく、少なくとも七五年まで党員として活動してきた我々復党者にあっても理解するのに（しかも、それは単にまだ論理の範疇でしかない）数カ月を要したほどである。

わが党・マル青同の二十四時間の党生活とは、第三期の諸政党の一部が内ゲバのために行なっているダンゴ生活としての二十四時間のアジト生活ではない。かの勇名をはせた党内闘争が、このマル青同の二十四時間の党生活の中味を厳格にかつ鋭く貫徹しているのである。全ての同志がこの二十四時間の党生活を主体的に扱えているわけではない、しかし、主体的に扱えない同志もまた、二十四時間の党生活―党内闘争を通して、もはや、指導部活動を対象化しなければ一歩もやっていけないのである。

こうして七〇年代後期を闘い抜いてきた同志と我々復党者の間にあるのは、絶句するばかりの数年間の質的に異なった（我々は二十四時間の脱党生活を数年間積み重ねてきたのである）、一方同志たちは二十四時間の党生活の数年間の積み重ねがあるのである）人間としての生き方の積み重ねによってつくりだされた巨大な断層である。我々はちょっとした嵐―階級闘争の―にあっても風化してしまいそうな積み重ねでしかないことを、この同志たちの前で理解しないわけにはいかなかった。そして同志たちはこの巨大な断層の内部でダイヤモンドさえつくり出せそうな生き方をしているのを理解しないわけにはいかなかった。

今、我々はこの断層の高さと広さ重さをヒシヒシと感じつつ復党運動を展開している。我々は脱党の誤りをそれなりに深く総括し、新たな任務を得て闘っているが、その活動の

全過程を通じて痛感するのは、わが党・マル青同が党中央の指導によってどこまで前進したのかその到達地平は認識し得ないということである。我々はただ、その階級的本能で―脱党してもそういう心情はあったが、それとは比較できないくらいに―ますます強く、党中央に律していく以外に真剣に信念ある人間として生きていくうえでの活路はない、お荷物でしかないかもしれないが泥まみれの葛藤をしながら三無泥沼河の大渡河作戦に参加しなければならないという意味を感じているところである。

四年間の空白の中で、わが党・マル青同はレーニン主義の党として綱領―組織―戦術の質を戦時の政党のそれにまで高めあげた。六〇年代後半から脱党するまで常に先進的部分として八年間闘い抜いてきた自負をもつ元幹部会員の私が、一年ほど前に入党した二〇代そこそこの若い党員に一時間ほども論争すればウムもいえぬほどヒヤ汗がでるほど追いつめられてしまうことを、私は驚嘆を含めて承認しないわけにはいかない。しかし、これは悲しむべきことだろうか?! そう、否である。これほど喜ぶべきことはない。まじめな信念ある共産主義者たらんとして復党運動に参加した者であれば、ありとあらゆる活動の中で歴史創造のために少しでも力を出したいと真剣に考えている自分が結集せんとしているのは、本当に死生を賭して闘うにふさわしいレーニン主義の党であることを思い知らされるのは嬉しいことなのだ。率直に誤りを認め、常に少しでも進歩の側に、歴史を後史へむけて指導せんとしている側にありたいという意欲と自覚さえあるならば、党内闘争の中で自己の政党活動家としての旧世界の残存物を明らかにされるのは、是非ともそう願いたいものですらある。

私がこれから埋めていかねばならない空白の過程でつくられた断絶は広く深い重い。しかし、この断絶と飛躍をわがマル青同・党中央はほとんど自力でやりとげてきたのだ。そして今やその党中央の後に続いて多くの同志たちがこの飛躍を闘いとりつつある。それがレーニン主義の指導陣型として現に私の前にある。困難ではあろうがちゅう躇するものではない。この方向でうまずたゆまず闘っていく以外にはない。

三無に安住の地なし、
背教者に希望の道なし、
決断せよ！ 救国済民の党への再結集を！
向かえ、勝利・進撃・救国社会主義建国革命闘争の八〇年代へ、と!!

七九年は象徴的な年であった。七九年は、平時から戦時への移行期という七〇年代の歴史的性格を遺憾なく刻印した年であった。歴史と階級が警告を発している。もはや口先だけで国家と革命・戦争を語ることはこの七〇年代で終りにしなければならない、と。

七九年は、全ての社会主義の旗の下で闘う自覚ある誠実な先進分子に、もう一度七〇年代の自分の活動を、その綱領、思想―政治路線を深く総括し、八〇年代を新たな政治決断を下すことをもってむかえるべきであることを告げ知らせている。

『流動』の紙面をもって、私がわがマル青同・党中央の委託を受けて読者諸君に明らかにするのは、現状の諸君の立場がどうであれ、諸君が戦時の八〇年代にむけて、新たな気持で、言ってよければ初めて政治活動に踏み込んだ時のように清新な、天をも衝く気概と真理の戦場に赴く軒昂な決意をもって、まじめな信念ある人間としての政治決断を行うことを促すためである。

わが党・マル青同は、どうして諸君にこんな大それたことを提起できるのか?! そう、それは諸君自身が気がついているように、第三期にしがみついてきた諸政党と、七〇年代を通して第三期を打破してきたわが党マル青同との決定的な党派性の違いにこそ、この根拠があるのである。第三期の諸政党の党派性とは、一言でいえば分裂者・分裂主義的な指導部活動によって貫徹されている党派性である。事実が何よりもそのことを良く証明している。第三期の諸政党が、七〇年代一貫して発揚してきたのは三大分野（党内闘争、党派闘争、大衆闘争）での分裂主義である。連合赤軍事件、革共同両派と革労協をもまき込んだ殺人レースと化した内ゲバ、ブント系諸派の際限のない細分化、一大衆闘争をもっての他の大衆闘争の否定、等々、彼らは闘えば闘うほど敵をつくり出し分裂をまき散らしていくのである。彼らの理論と戦術の特徴は、他人の弱みや遅れを叩いて自己の優位性をその経済主義的な綱領の裏返しとしてのテロリズムでもって補強せんとするものである。一方では、思想・政治上の分界線の基準の曖昧な団結一般である（これは論理的に任意の象徴的な敵を―例えば反ソのように―設定し、この敵と闘うものは皆仲間という類のおよそ党的立場があるとは言えない代モノ）。これとて実は分裂主義の直接の裏面でしかない。

ではわが党・マル青同の党派性とは何なのか?! それは、真の統合者、レーニン主義の党派性である。わが党中央が、六〇年代の総括を踏まえて第三期を革命的に清算せよ！として七〇年代に首尾一貫して闘いとってきたのは、他でもなく真に統合する活動としてのレーニン主義の指導部活動である。多種多様な社会主義への接近、その分離過程を把え、一切それに拝跪することなく、その延長には革命も社会主義もないことを不断に鮮明にし、しかし単にそうしてそれらを突き離すのではなく、分離過程とそれを統合する活動、思想との間にある断絶・飛躍の問題を具体的な処置・方策をもって理解させ、準備させ、それらの成長的・発展的要素に統合活動からの視野を与え、労苦人民を人類史の後史の主体、社会主義革命の主体として改造していったもの、これこそがレーニン主義の指導部活動であり、わがマル青同が七〇年代をかけて確立していったものなのである。そして具体的処置・方策が、他ならない三つの条件（①戦争と革命の時代を闘い抜くことによって〝飛躍〟があること、②自国の階級闘争と国際階級闘争の実践的教訓を思想―政治路線の問題として総括すること、③日和見主義・経済主義・組合主義等々のあらゆる新旧修正主義との日常不断の闘争）を踏まえた三大分野においての闘争で、指導部活動に対する軽信・無知・無自覚に酔と胆汁を注ぎ込む、という戦術だったのである。こうしてわがマル青同は、全部署全戦線で指導部活動と被指導部活動、すなわち統合活動と参加（分離過程）活動との根本的差異をしきつめてきたのである。一時期、マル青同の党内闘争の厳しさ激しさ故に連赤以上の恐怖マル青同説が流布されたが、諸君が現に目撃している通り、その当の死刑宣告されたはずの本人が、光栄にも党中央の委託を受けてこの文章を書いているのである。私ばかりではない。党内には第三期の諸政党であればとても扱い切れないような諸欠点をもっている同志が相当数存在しているのである。党中央は何故あえてこんなことをするのか。それは、反帝・救国・社会主義革命に勝利するためには、九五%の労苦人民を組織しなければならないからに他ならない。このような観点をもつことができたからこそ、その出身階級を問わず、経歴を問わず、その個別的現状の欠点を恐れず、全ての生き生きとした社会主義への多様な接近と、その分離過程を見すえて、それを一つの政党活動として統一した思想的政治的性格をもった活動に就かせることができるのである。これを可能とするためには、真の歴史的意味における統合活動たるレーニン主義の指導部活動が確立されていなければならないが、わがマル青同・党中央は指導部としての二十四時間の政治的緊張を七〇年代ずっと持続させ、もってこの未開・未踏の地平を闘いとったのである。この指導部活動の確立があって、現実的な党派性を各部署で発揮するレーニン主義的な二十四時間の被指導部活動があったのに他ならない。

わが党・マル青同が、八〇年代にむけて、まじめな信念ある誠実な先進分子―そうだ諸君だ！―を救国社会主義建国革命闘争の中で統合することができるのは、首尾一貫して分裂主義―戦時の排外主義―第三期の党観、革

命観と闘い（私もその典型として七五年の党内闘争の中で批判され、不貞腐れて党中央に脱党の脅かしをかけてみたのだが、それすらも四年間で見事に粉砕され、今は少し謙虚になって真理の道に再びつけた喜びと解放感で生き生きとしているところである）、レーニン主義の指導部活動を確立したという主体条件を整え得たからであり、一方、戦時の情勢の深まりゆく中で労苦人民大衆が、従来通りの被指導部活動ではやっていけないということを感じ出すほどに三無奇型帝国主義制度の諸矛盾が噴出しはじめているからである。そして現在にあっては、何よりも諸君自身が新しい決断の時期が迫っていることを深刻に感じ出したからである。諸君は、そういう意味では矢張り、六〇年代後半の革命的大衆行動の過程で登場してきた先進分子なのだから！

「反帝国際主義・自国帝国主義打倒！」という金字塔を歴史に刻印した六〇年代後半の革命的大衆行動の栄誉を担ったのはＭＬ・中核・ブント諸派であったが、この栄誉を担った共産主義者たらんとした者の共通の時代認識があった。それは、この闘争の高揚を戦争と革命の時代にむけて、蜂起を闘いとるレーニン主義党建設へと転化していく責務を、もっとも良く闘ったからこそ我々が担わなければならない、という認識であった。我々はこの認識をもって七〇年代―平時から戦時の移行期に出陣した。だが八〇年代を目前にして、この責務を果たして帰陣できたのは、わが党・マル青同・党中央だけであった。わがマル青同・党中央は共に出陣した六〇年代の先進分子が責務を果たせずに未だにさまよっている事態を憂慮している。しかも戦時の八〇年代が迫っているのである。苦闘せる先進分子よ！　諸君にまだまじめな信念と誠実さが残っているなら、もはやちゅう躇をせずわが党・マル青同に帰陣すべきであろう。

だが（諸君が心底求めてきたレーニン主義党へ）帰陣するにあたって、諸君は謙虚になって、すでに述べてきたレーニン主義の指導部活動、この指導部活動に自己を律してきた被指導部活動、こうした陣型を確立していった七〇年代後期のわが党・マル青同の党史を無条件に承認しなければならない。マル青同の党史が示しているのは、指導部活動の苦闘とともに徹底してこの指導部活動に律し、これを支え援助してきた被指導部活動の苦闘の問題が解決されてきたということでもある。諸君はだからこそここに帰陣できるのである。

わがマル青同・党中央は、私たち復党者と同様、諸君がこの党史を―すなわちその苦闘の意味するものを―無条件に承認するのであれば、八〇年代における救国社会主義建国革命闘争の中で、諸君に栄誉ある共産主義者として、しかるべき部署に赴かせ、任務を課すべく指導するであろう。

諸君！　歴史的に活路なき、分裂者の陣営にとどまり「愛国」翼賛―三無ファシズムにとり込まれるのを是認するのか?!　それとも、統合者としてのわが党・マル青同に再結集して後史を切り開く栄誉ある闘いの戦士となるのか?!

諸君！　七〇年代の総括をもって決断せよ！

救国済民の党への再結集を！

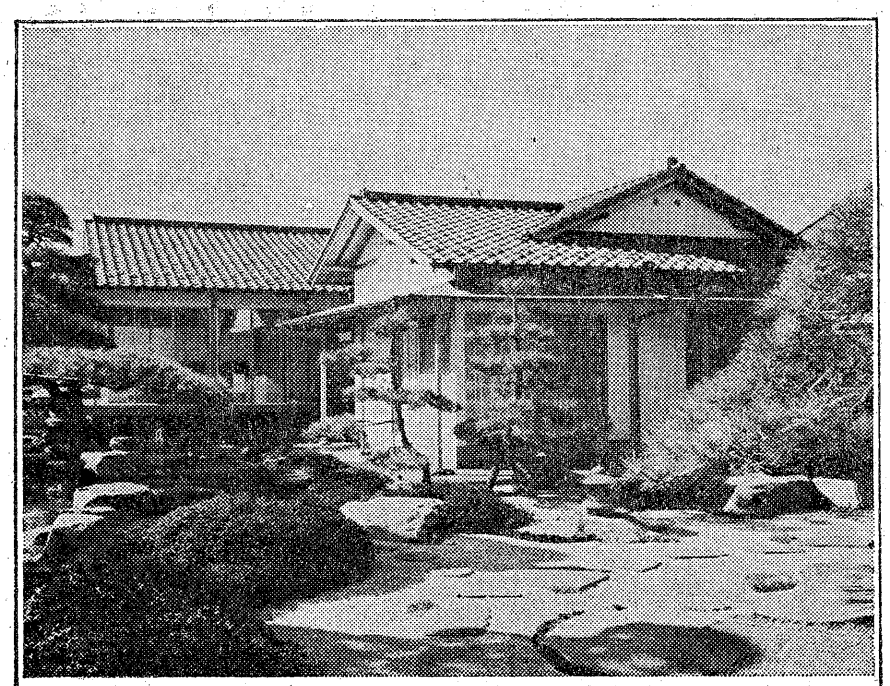
決断をひきのばす待機主義―三無に安住の地なし、

口舌の徒―背教者に希望の道なし、

向かえ、勝利・進撃・救国社会主義建国革命闘争の八〇年代へ!!

（文責＝前幹部会員　平田勝生）

小粋（こいき）なワイン
●200㎖＝200円（赤・白・ローゼ）●500㎖＝500円（白）
サントネージュ　ポルカ
協和醗酵


快適・堅固・建てやすさ
殖産住宅の注文建築
快適な住み心地、どっしりとした造りを求めるなら、やはり注文建築です。殖産住宅は注文建築ひと筋、すぐれた技術と豊かな経験を活かし、住む人のあらゆるご要望にお応えした、快適で堅牢な住まいをお建ていたします。さらに資金づくりのお手伝いから、設計・施工、アフターサービスにいたるまで、建てやすさ万全の体制を整えております。建築に関することなら、ぜひお近くの殖産住宅におまかせ下さい。
孫子の代まで
殖産住宅
本社（〒151）東京都渋谷区代々木2-11-17☎03(370)1211
（国鉄新宿駅南口下車徒歩3分、甲州街道沿）

社共にかわる革命的社会主義党の建設をよびかける！

マルクス主義労働者同盟

(一) 強大な新しい労働者党を！

プロレタリア社会主義派の「八〇年代戦略」の第一の課題は、いうまでもなく、社共や新左翼（〝左〟右の日和見主義）に反対する労働者の新しい政治的闘いを発展させることである。

周知のように、六〇年代、七〇年代を通じて、この二つの日和見主義的潮流は急速に頽廃し、腐敗してきた。

社共の実践的な破産は、今年の春の統一地方選における彼らの決定的敗北によって明らかであろう。資本の政府や政党のおそるべき腐敗堕落と、その政策的行きづまりの中で、自民党政権が依然として存続しているだけではなく、「保守回帰」とさえいわれ、〝革新〟（社共）自治体が全国の多くの主要地域で崩壊した事実ほど、社共の政治の無力さと破綻を教えるものはないであろう。社共は、六〇年代後半から数多く生れた〝革新〟自治体をもちあげ、地方政治の〝革新〟を〝国政革新〟の出発点、その第一歩として位置づけ〝革新〟自治体をふやして国政を包囲し変革する、と強調してきた。しかし現実には、地方政治の〝革新〟は国政革新どころか、地方政治の〝革新〟さえほとんどなしえないで挫折したのである。地方版〝民主連合政権〟が、そのみじめな内容をさらけ出して崩壊したとするなら、労働者は一体、国政版の〝民主連合政権〟にいかほどの期待を寄せることができるであろうか？

今、社共は地方版民主連合政府の残骸の一切れでも救おうと「少なくもそれは福祉政策をやったではないか」と口惜しそうにつぶやいている。〝革新〟自治体の〝福祉〟、否、福祉一般の偽善的側面や限界はさておくとしても——自民や中道が〝福祉国家〟の建設を謳うのはなぜなのか。それはこの資本主義体制の護持、ということではないのか、また、革新首長でさえ、不況が深化した一九七〇年代後半には、自ら率先して「福祉見直し論」をとなえたのではないのか——、我々は〝革新〟自治体がわずかな〝福祉〟といったことしかなしえなかったという事実、それ以上のことはほとんど何一つやらなかったし、やろうとしなかったという事実をこそ問題にするであろう。

〝革新〟自治体の敗北は、同時に、この国家独占資本主義の体制の「民主的改良」をとなえ、社会主義を裏切って来た社共の実践的なつまずきであり、決定的な挫折である。このことを彼らが自覚していないとすれば、それは彼らのおそるべき鈍感さと無責任を教えるだけであろう。彼らは、戦後「民族民主革命」をとなえ、〝反米独立〟闘争を強調してきたが、日本の独占資本が力を回復し、自立した独占資本の国家として登場してくればくるほど、その民族主義を卑俗なブルジョア改良主義へと転化したし、せざるをえなかったのである。マルクス・レーニン主義の事実上の放棄、教師聖職論や公務員奉仕者論、ブルジョア的な「自由と民主主義」のたわごと、民主連合政府綱領案と大企業との共存宣言、「経済再建五カ年計画」等々、日本共産党のブルジョア的堕落はとめどもないし、社会党もまた、右派のブルジョア的知識人や組合主義者ばかりがのさばり、いくじのない社会主義協会をおさえこんでしまった事実に象徴されるように、もはや民社党と大差のない党へと転落しつつある。社共のブルジョア的頽廃は〝完成〟の域に達しつつあるのだ。

他方、新左翼＝急進派が、労働者大衆のなかに、労働者大衆と深く結びついた新しい革命的社会主義の党を組織する重要性を理解しないそのにぶさと軽薄ぶりは、驚くべきものである。我々はすでに十数年間新左翼は決して旧左翼を越えるものではなくその補完であると主張してきたが、ここでもこの我々の確信をくりかえさせていただく。

八〇年代の革命的社会主義派の第一の課題が、社共にかわる強大な労働者党を組織するところにある、という点でどんな疑念もありえない。このことなしには、日本における社会主義について百万語を費やそうとも、完全な空語であることを我々は深く自覚しなければならない。

(二) 社会主義的政治新聞の意義

それでは、我々はいかにして、新しい社会主義的労働者党を建設すべきであろうか？

こうした問いに対する回答は、単に、主体的な問題としてだけ考えられてはならない。我我は、全国に、資本の支配と闘っており、かつ闘う必要を自覚している多くの先進的労働者が存在しており、しかも社共にかわる新しい闘いの必然性を痛感している。従って我々の課題は何よりも、こうしたすべての人々の結集と団結の軸を提供し、彼らを一つの党へと組織するところにあるという前提から出発する。

こうした観点からして、我々は機関紙誌による宣伝の活動を重視する。政治新聞がもつ高度な重要性についてはレーニンが「何からはじめるべきか」「何をなすべきか」で触れているが、しかしそれは今では、反体制の諸組織にとっていわば原則となっているといっても言いすぎではない。レーニンは次のように述べている。

「この二つの潮流は、日和見主義者のほうも（社共、と読め）『革命主義者』のほうも（新左翼、と読め）そのどちらも現在支配している手工業性に降伏してしまい、それから脱却できるということを信ぜず、われわれの第一の、最も緊急な実践的任務——政治闘争に精力と確固さと継承性とを保障できるような革命家の組織をつくるという任務——を理解しないのである」

「だが、問題の核心は、全国的新聞以外には、強力な政治的組織を育てる手段がないことにある。……近年わが国では、知識的な労働者もまた『ほとんど全く経済闘争だけをおこなってきた』。一方ではこうである。だが他方では、知識的な労働者のなかからも、インテリゲンツィアのなかからも、政治闘争の指導者が育ってくるようにわれわれがたすけないかぎり、大衆もまた決して政治闘争を行う

ことを学びとりはしないだろう。そして、このような指導者は、もっぱらわが国の政治生活のすべての側面、さまざまな階級がさまざまな動機でおこなう抗議や闘争のすべての試みを系統的、日常的に評価することをもととしてのみ育つのである」

「こういう状態では、人々がこれらすべてのことについて考えるようにしむけること、動揺や積極的闘争のありとあらゆるひらめきを総括し一般化するようにしむけることから『始め』るほかはない。今日のように社会民主主義的任務が低められているときには、『生きた政治的活動』はもっぱら生きた政治的扇動から始めるほかはなく、そしてこの生きた政治的扇動は、頻繁に発行されて規則正しく配布される全国的新聞なしには不可能である」

「新聞は、集団的宣伝者および集団的扇動者であるだけでなく、また集団的組織者である」「そして私はやはり主張する。このような実際上の結びつきをつくり出す仕事は、共同の新聞にもとづいてはじめて開始することができる。共同の新聞は、多種多様な活動の成果を総括し、それによって、すべての道がローマに通じるように革命に通じている数多くの道のすべてにそって倦むことなく前進するよう、人々を駆りたてる唯一の規則的な全国的事業だからである、と」

この種の引用をレーニンからいくらでも行うことができる。そしてレーニンが強調する闘いの道の正当性を、一体誰が否定しえようか？ 現在、社共や急進派も多くの新聞を出しているが、先進労働者の統合の手段とはなっていないではないかというなら、それは彼らの新聞の性格、その内容の問題であって、彼らの側は政治新聞の意義を低めるものでは少しもない、と答えよう。

レーニンにとっては、政党の機関紙は単なる機関紙ではなくて初期の党活動そのものであり、党建設もまた、機関紙を中心とする活動からはじめられなくてはならなかったのである。レーニンの〝組織論〟がロシアの急進派――ナデージヂンら――の「実践による宣伝」といった考え方に対立させられて展開されている点は注目されなくてはならない。

もちろん、レーニン的な組織論は、ツァーリズムの専制支配の下での特殊なものであるという批判は可能であろう。しかし、ブルジョア民主主義体制の下で、広範な労働者を公然と説得し結集していくうえで、ツァーリズム下のロシアでより機関紙誌のもつ意義や機能が小さいと、一体誰が断言しうるであろうか？ 事態はむしろ逆ではないのか？ 現在ほど、組織や組織的力量や組織的闘いが決定的な重要性を獲得した時代はなかったのである。

マル労同はまた、全国の先進労働者を結集する一手段として、さらに政治闘争の一手段として選挙闘争とりわけ国政選挙への参加を積極的に評価する。現代のブルジョア民主主義の社会体制の下では、選挙といった絶好の宣伝、煽動の場は少ないからである。そして、議会はブルジョアジーの支配の一つの機関であるとはいえ、軍隊、警察といった暴力装置や、行政機関とさえちがった内容をもっている。そこでは国政が公然と論じられ、公然たる政治闘争の場となっているし、ブルジョア民主主義の〝たてまえ〟からしてそうならざるをえないのである。たしかにブルジョアジーは労働者党の選挙闘争、政治闘争に大きな制約を課し、宣伝、煽動を切りちぢめるためにいろいろな規制や妨害措置を設けている、しかしそれにもかかわらず、革命的社会主義の党がこれを活用しうる条件は十二分に存在している。

(三) 我々の労働組合政策

現在、組合運動の形骸化が進み、その〝右

傾化〟がやかましく論じられ、〝右翼的な〟労戦統一の策動がくりかえされている。そして共産党――一度として正しい労働組合政策を採用したことのない日和見主義政党――は、組合の政党からの独立とか「要求で団結」とかの日和見主義的なたわごとを並べながら、他方では「新しいナショナルセンター」といったセクト的、分裂主義的な志向をあらわにした。八〇年代のプロレタリア社会主義派の労働組合政策もまた、複雑な情勢に正しく適用することを要求されるであろう。

しかしその根底はすでに明らかであろう。我々は経済闘争、組合の闘いと社会主義的政治闘争を結合し、労働組合とプロレタリア党の活動を接近させ緊密化するのであり、どんな反動的な組合の中でも一貫してねばり強く闘いぬいていくのである。こうした場合、我我は、いかなる「新しいナショナルセンター」も必要としないであろう、というのは全国的な労働者の階級闘争を指導する機関として、我々はすでに党を持っているからである。

もちろんレーニンもいうように、機関紙を軸とした党活動や党の建設と、労働者の現実の大衆的闘いは対立したり矛盾したりするものではない。むしろこの両者は有機的に結合され、相互に強めあいながら、全体として資本の権力の打倒の方向へと導かれなくてはならないのである。何かこの両者を対立させ、党的闘いではなくて組合活動であるとか、あるいは反対に、組合活動でなくて党の活動であるとかいった形で問題をたてることは、根本的にまちがいであろう。同様に、革命と改良の関係という〝古くて新しい問題〟に対しても、両者を機械的に対立させることなく、しかも革命的闘いを第一にすえ、それを貫徹することこそが大切なのである。急進主義の一番の弊害は、口先はともかく、改良を革命に優先させ、個々の改良闘争を至上視し、実践的に第一位に置くところにあるのであり、だからこそ急進派はどんなに左翼的にふるまっても日和見主義であり空虚なのである。

また我々は、労働組合運動における分裂主義的な一切の試みに反対する。我々は、第二インターのシュトゥットガルト大会（一九〇七年）の決議とレーニン的な原則に賛成である。つまり労働組合の中立性や無党派性の擁護ではなく、組合と社会主義政党の緊密な接近、結合こそが労働者党の組合政策の出発点である、と確信している。我々は、民社党＝同盟や社会党＝総評（そして急進派にもしばしば見られる）「一党支持のおしつけ」や組合を政党の〝下請機関〟にするやり方に断固反対である。同時にまた、共産党のような、「政党からの組合の独立」とか、「要求で一致」とかいう自由主義的、メンシェヴィキ的な組合政策を支持することはできないのである。こんなものは、まさに経済主義、組合主義のあらわれであって、革命的社会主義派の組合政策とは何の関係もない。問題は、労働運動と社会主義のかたい結合、融合であり、これをおしつけや強要といったやり方でなく（レーニンのいう「単なる『承認』を追い求め、まちがった考えをもつものを労働組合から追い出す」やり方ではなく）一貫して追求していかなくてはならないのである。本当に自分の任務と責任を自覚し、階級闘争のすべての道行きを正しく見とおした真のマルクス主義労働者党のみが、これをよくなしうるであろう。

(四) 連合の時代と社会主義政党の任務

八〇年代は「連合の時代」といわれ、あらゆる種類の「連合」が、自民党からはじまり、共産党、さらには新左翼諸派によってもも出されている。左翼は「連合」とはいわないで、「統一戦線」というのであるが。

従って革命的社会主義派もまた、この連合の時代をいかに闘いぬくかの展望を明らかに

しなければならない。我々にとって問題となるのは、保守中道や中道や全野党の連合ではなく、左翼連合つまり民主（社共）統一戦線策である（歴史的にいえば、〝人民戦線〟である）。これはトロツキー主義者によってさえもてはやされており、また過去のいくつかの歴史の経験に照らし合せてみると、急進派もまたそれに追随し屈伏しているのであるから、きわめて重大なテーマであるといえよう。

結論的にいって、我々は、民主統一戦線に反対であり、それから独立した労働者の政治的闘いを発展させなくてはならないと強調する。一九三〇年代以来の数十年の歴史の経験――一番新しいものの一つである七〇年～七三年のチリの社共連合も含めて――は〝民主統一戦線〟もまた、結局ブルジョア支配の一つの形式、そのついたてとなったことを教えているのだ。また宮本が〝理想的な〟民主戦線の実例として語ってきたみのべ都政の十二年とその結末はどうであったのか。我々はかつて、みのべ都政の八年間を総括し、社共統一戦線とは、労働者とブルジョア自由主義者のブロックであり、この同盟は「労働者の偉大な事業を破滅させるだろう」として、次のように書いた。

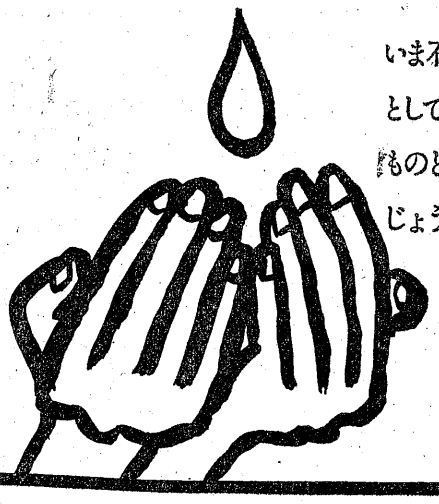
「それは、他ならぬ、この自由主義的な知識人たち――みのべ、黒田、長洲、にな川等々――の本質こそ、階級闘争を最後まで発展させるのではなく〝進歩的な〟空文句のかげで、労働者の闘いを資本の支配と妥協させ、何とかおりあいをつけさせるところにあるからである。彼らは結局、自民党となれあい、取引するであろうし、現にそうしている。彼らの貧弱な改良主義こそ、口先きはともかく実践的に彼らが独占資本＝自民党となれあい、取引契約を結んでいることでなくて何であろうか？　この連中を先頭にたてた運動（統一戦線）が、社会主義革命に行きつくのではなくて、資本の支配とのみじめな妥協に終ることは、絶対的に確実である。彼らはただ改良、漸進的前進、資本とのかけひきや取引によってのみ、資本と闘おうとしているが、しかしこうした立場は、客観的には資本の打倒でなく、せいぜい資本の権力のわずかな修正、制限、規制等々へ行きつくにすぎず、しかもこうした成果さえ、一時的で、限定つきである。ブルジョア的リベラルとのブロックは、労働者の社会主義的な階級闘争の否定であり、労働者の自主的な政策を犠牲にして資本に奉仕することである。われわれは、この命題がみのべ都政の八年間（今では、十二年間、というべきだろう――引用者）の経験によっても、十二分に確証されてきたと信じる」（マル労同政治局発行「破産した革新幻想」序文）。

もし他の党と本当に〝統一戦線〟がくめるなら、それらの党は合同すべきであろう。もし根本的な目的や戦術で一致しないなら〝統一戦線〟ではなくて「別個に進んで一緒に撃て」という、あのレーニン的な原則を採用すべきであろう。レーニンは、なぜメンシェヴィキと対立したのか。その最大の原因の一つが、ツァーリズムに反対する自由主義派（カデット）と〝統一戦線〟＝ブロックをくむべきか否かにあった――メンシェヴィキはくむべきだといい、ボリシェヴィキは反対した――ことを、今のマルクス・レーニン主義者を名乗る大部分の人はお忘れになっているようである。今の〝統一戦線〟論者と、かつてのメンシェヴィキと、一体どこで区別できるのか、我々は大いに疑わざるをえないのである。

我々は八〇年代にむけて〝統一戦線〟ではなくて、プロレタリア社会主義派の、資本の党及び一切の日和見主義者に断固として反対する、公然たる党派闘争、政治闘争を大きく昂揚させ、飛躍させるべきであると強調し、この目的のためにすべての自覚した労働者が団結し力を結集すべきであるとよびかける！安易な連合主義者、統一戦線論者――彼らは日和見主義者であり、改良主義者であるが故に、統一戦線論者である――の反動的な影響から労働者大衆をどんなことがあってもときはなたなくてはならないのだ。資本の支配に反対する大衆的な決起のために！

最後に、我々の国際的立場について触れたい。我々の原則は、全世界の労働者人民との連帯であり、真の国際主義である、しかし我我はこの内容を、共産党のようにソ連支配層との同盟とも、中共派のように中国支配層との同盟とも考えていない。我々は、ソ連、中国をはやくから、国家資本主義社会（一種のブルジョア的生産関係の支配する社会）と規定してきたが、この我々の命題は、六〇年代後半のソ連に次いで、昨年ごろより、中国もまた〝経済自由化〟すなわち公然たる資本主義的諸関係の公認にまで進んだことによって、実践的に（現実によって）確証された、と思う。我々は八〇年代にむけて一切の民族主義やソ連、中国への事大主義に反対し、真のプロレタリア国際主義を昂揚していかなくてはならない、と考える。とりわけ、ベトナムのカンボジアへの進攻、中国のベトナム〝懲罰〟、ソ連の軍国主義、帝国主義的政策の展開という現実の前に、ソ連、中国の〝社会主義〟国という幻想が音をたててくずれつつある現在、我々の任務は一そう重大であろう。国家資本主義（ソ連、中国、ベトナム、カンボジア、アルバニア等々――近年新しく「アルバニア」派なども登場しつつあるので）への大衆の幻滅を、社会主義への幻滅にではなく、本当の社会主義への確信へと転化すること――これもまた疑いもなく、八〇年代の最重要の課題の一つといえるであろう。

石油を大切に使いましょう。



いま石油に新しい時代が始まろうとしています。だれにとっても大切なものとなった石油。ムダを省いて、じょうずに使いましょう。

日本石油

現代帝国主義の体制内統合を突破し
現代革命を組織するあらたな潮流建設へ

労働者階級解放闘争同盟

労働者同盟は、一九七五年七月、第一期同盟（人民の力派）を清算し、あらたな革命的労働者党派としてたたかいを開始した。いらい、日韓、「むつ」をはじめとした政治戦線、郵政や民間中小に代表される闘う労働戦線において、われわれは総力をあげてこれらのたたかいをにないきり、八〇年代をたたかいぬく先進党派へと、その地歩をかためてきた。七九年九月、わが同盟は第三回大会を開催し、八〇年代闘争の陣形をととのえ、先進的労働者の闘う方針をあきらかにした。

われわれは、当面する八〇年代闘争のかぎは、現代帝国主義の体制内統合をつきやぶって前進する闘う労働運動の建設いかんにあると確信している。それゆえ、危機をふかめる日本労働運動に階級派のくさびを打ち込み、階級的労働運動の再建をかちとることが、八〇年代のわれわれに課せられたもっとも基本的な任務である。われわれは、現代革命を組織しうるプロレタリアートの革命主体の形成を射程に、先進的労働者とともに必ずこの任務を達成し、八〇年代を勝利の時代とする決意である。

激化する階級矛盾と現代世界の再編成

現代世界はまぎれもなく、資本主義から社会主義への歴史的過渡期に位置している。八〇年代をむかえたこんにち、戦後資本主義の体制的安定はすでに過去のものとなり、進行する戦後体制の解体過程は、文字通りこの歴史的過渡期に特有の様相をしめしている。

米ソ二大国を頂点に、両陣営の共存体制として成立した戦後世界は、アメリカ帝国主義の世界戦略をついに破綻の淵へと追いやることになったベトナム人民のたたかいと、ソ連社会主義に反旗をひるがえした中国社会主義の台頭によって揺さぶられつつ、七〇年代を通じてドラスティックな再編成に直面するに至っている。戦後世界のこの再編成を規定づける動因は、第一に、米帝の力の低下と日欧帝国主義の台頭によって亀裂を拡大しつつある帝国主義陣営、第二に、中ソ対立によっていっそう深刻化する現代社会主義の内部矛盾、そして第三に、米・中・ソ三大国のヘゲモニー争いに直面してますます動揺をふかめる後進諸国、これら三つの陣営の発展動向にある。

アメリカ帝国主義の「核とドルの傘」のもとで構築された戦後資本主義体制は、IMF体制の崩壊〜「石油危機」を経て、こんにち世界不況—市場争奪戦—保護主義の台頭という、あらたな危機の時代に突入した。アメリカ帝国主義は、米帝戦略の一部を日本・西独に分担、肩がわりさせ、「米・日・欧」三極体制による世界支配の再建に乗り出したが、米帝のかかる防衛策は、かえって世界市場をめぐる列強間の対立に拍車をかけ、市場争奪戦をいっそう激化させる結果をまねいている。だが、各国帝国主義は、事実上三〇年代にもひってきする深刻な経済的危機に直面しながらも、ソ連をはじめ社会主義陣営の圧力と、後進諸国人民の反撃のまえに、もはやかつてのような再分割戦争を演じることができずに、ひきつづきドル体制のもとに身をよせあい、相互依存をふかめている。（くわえて、力を低下させたとはいえ、いぜんアメリカ帝国主義は、先端産業群をはじめとして世界経済にぬきんでた実力を誇り、圧倒的な核軍事力によって資本主義世界の絶対的覇者としての地位を維持し続けている）

かくして、危機に直面した現代帝国主義の再編は、ドル体制のもとでのヘゲモニー争奪戦として展開されるが、それがドラスティックな軍事的再編として実現されない以上、この再編は、各国の国内再編を前提とした不断の「協調と対立」をもってせざるをえない。現代帝国主義は、この国内再編を、労働者階級の体制への組織化による政策展開によってなしつつ、いまや総体として緩慢な解体過程へとむかっている。

七〇年代後半期以降、すでに体制の組織的安定性を失い、労働者階級を国内再編に動員するための物的基礎を喪失しつつある現代帝国主義は、戦後世界の前面に登場した後進国人民のひきつづく反撃と、再び国際階級闘争の前列に立ちあがろうとする労働者階級の強力な抵抗を覚悟しなければならず、その前途はいちだんとせばめられることになっている。

矛盾を拡大する現代社会主義と先進国階級攻防の帰趨

一方、戦後冷戦体制下で米帝に対抗し、ソ連のもとに「一枚岩的団結」を誇った社会主義陣営も、ソ連・東欧の経済建設の混迷や「文革」による中国社会主義建設の破綻、中ソ対立の激化によって内部矛盾を拡大させ、現代帝国主義と同様、こんにちきわめて深刻な全般的停滞状況にある。そして、かかる現代社会主義の全般的停滞が、国際共産主義運動の分裂・混乱とあいまって、社会主義諸国間にたえざる緊張をもたらし、こんにちの社会主義国家間対立の一般的背景をかたちづくっている。しかも、官僚的「変質」をとげたソ連社会主義と、排外主義路線に傾斜した中国社会主義の力の対決が、両大国の周辺に位置する社会主義小国のあいだにさえたえず紛争の火種をまき、社会主義国同士のはげしい抗争をみちびいている。

この結果、解放後のインドシナ地域ではついにベトナム・カンボジア紛争と、中国のベトナム侵攻が引き起こされ、インドシナの社会主義建設はいま重大な破局へと追いやられている。また、戦後いっかんしてソ連のもとへの屈従を強いられてきた東欧諸国でも、ハンガリー、チェコの諸事件にあきらかなように、政治的自由をもとめる大衆の抵抗がたえずソ連東欧関係を緊張させ、ソ連の武力介入という否定的事態を惹起させている。

こんにち、インドシナ、東欧の二つの地域は、現代社会主義の矛盾の集約点、その弱い環をなしており、中ソ二大国の対立を軸に編成された社会主義世界のわくぐみ、秩序を、その内部からつきくずす存在として位置している。いうまでもなく、現代社会主義が、直

面する困難を解決し、「人類の本史」にむけて次の一歩をふみだすには、これら諸国人民が大国への従属をたち切り、国の運命を自分たちでにぎるとともに、すべての社会主義諸国人民自らが、社会主義建設の自立した担い手、社会の真の主人公として立ちあがることが必要である。

他方、アメリカ帝国主義の新植民地支配のもとにくみこまれてきた後進諸国には、「石油危機」を契機にあらたな反帝ナショナリズムがひろがり、民族解放闘争もインドシナからブラックアフリカへと拡大した。帝国主義の反共・反革命支配の要塞として再編された国々にも、中近東の戦略高地＝イランの革命を皮切りに、あらたな地殻変動が開始され、アジアでは、日米帝国主義の支配に深くくみこまれた韓国、ASEAN諸国にはげしく変動の波がおしよせている。石油エネルギー資源の供給をめぐる産油国ナショナリズムの台頭は、これらの資源に依存した先進工業国を直撃し、帝国主義の新植民地主義支配はいまや根底から崩れ去ろうとしている。これら諸国人民と、帝国主義本国のプロレタリアートの闘いが強く結合して燃えあがるとき、帝国主義のこの支配は、完全に息の根を止められるであろう。

戦後世界はこのように、八〇年代にむけ全面的な解体＝再編過程のただ中にある。帝国主義、社会主義、後進諸国の三つの陣営を舞台にして進行する米ソ体制下の世界再編成にとって、社会主義陣営の位置は、世界史的には今後ますます重要となってゆくであろう。だが現代社会主義は、その中心国の社会主義建設の停滞によって、こんにちこの世界の再編成を革命的に推進する動力をもちえない。それゆえ目下のところ世界再編の焦点は、アメリカ帝国主義を主柱とした帝国主義陣営の内部再編と、これを規定づける先進諸国の階級攻防の展開にもとめられる。現代帝国主義を直撃した世界不況とインフレーションの高進は、これらの国々の階級闘争をわきたたせ、その国内体制を動揺させずにはいない。

現代帝国主義の国際的に弱い環をなすイタリア、フランスは、ひきつづきはげしい労働攻勢にみまわれている。台頭した南欧左翼勢力は、先進国革命闘争の今後の帰すうにきわめて重要なかぎを握っている。だが、ユーロ・コミュニズムは、確かな次の一歩をふみだせないまま、支配階級の十字砲火のもとでいぜん一進一退をつづけている。八〇年代の激動でさらに打ち鍊えられるであろうヨーロッパのプロレタリアートは、今日の試行錯誤の中から自らの闘争力によって、現代革命への接近方法を確立するに違いない。

戦後階級闘争のいまひとつの焦点を形づくる東アジアでは、低賃金と強労働に支えられ、類例のない国際競争力を誇る日本帝国主義の経済力が、この地域の反革命的安定を支える重要ないしずえとなってきた。しかし、戦後世界の再編期に突入したこんにち、これまでの経済的、政治的安定を支えた基礎の瓦解とともに、日本帝国主義はアジアへの一層本格的な進出と、国内階級支配の再編にせまられ、国の内外のいたるところでするどい政治的緊張を生み出すに至っている。

危機を深める労働運動

現段階の階級情勢

七〇年代に入り深刻な経済危機に直面し、戦後民主主義体制の動揺からその再編をせまられることになった日本帝国主義は、重化学工業を中心としたこれまでの高成長路線を、「知識集約型産業」など「安定成長」型へと軌道修正し、インフレ・停滞構造からの脱却をめざしている。だが、二次にわたる高度成長をとおして重化学工業化を極限にまでおしすすめてしまった日本帝国主義にとって、かかる産業構造の転換は決して容易ではなく、

その推進には、いっそう全面的な合理化に、労働者、労働組合を動員する以外にない。八〇年代へとむかう日本帝国主義の国内戦略の環は、この面からも、明確に労働者階級の体制内統合に設定されている。

一方、対外関係においては、日本帝国主義は欧米との経済的対立をふかめながらも、米帝戦略にそった日米共同のアジア・太平洋地域の侵略、反革命支配にその命運をたくしつつ、朝鮮半島に軍事的照準を合わせた日米共同作戦態勢の構築と、これに対応した自衛隊軍事力の増強を国内政治反動と連動しておしすすめている。さらに日本帝国主義は、中ソの対立をアジアにおける自己の勢力圏の拡大に利用する目的で、「反ソ」外交をすすめる中国と連携し、米・日・中の政治ブロックの形成へとのり出すに至っている。

七〇年代後半期を通じて日本帝国主義のかかる再編は、国家の権力的統制のもとに強力に推進された。このかん、自民党政府は、春闘＝労働運動に積極的に介入し、日本型所得政策によって賃金抑制をつよめた。また、資本の「減量経営」を支援し、大量の労働者を首切る一方で、政・労・資一体の雇用対策をすすめ、労働者の反体制エネルギーをそらせ、吸収した。一方、たたかう部隊にたいしては、徹底した弾圧体制でのぞみ、労働運動に対する刑事弾圧をつよめ、分断支配をねらってきた。さらに、自民党支配の危機を「中道」勢力で補充し、支配秩序の動揺を逆手にとって、「有事立法」や「元号法制化」など、あらたな政治反動攻撃をつよめた。

われわれは、八〇年代にむかう現局面の階級情勢を、以下のように分析する。

(一) 七四年以降本格化した不況下の大合理化にたいして、日本の労働運動がとった態度と行動様式は、こんにちまでの高度成長過程における体制内統合をとおして戦闘力をまひさせられ、階級意識を喪失してきた日本の労働者階級の階級的主体性の「崩壊」状況を明確にしめすものとなった。

(イ)鉄鋼・造船など「構造不況業種」だけでなく、自動車・電機をはじめとするあらゆる産業部門で吹き荒れた「減量経営」合理化は、民間の労働者、労働組合に大きな打撃を与えた。民間労組を牛耳るJC・同盟系勢力は、この合理化攻撃に全面的に協力し、その最大の推進力となった。

(ロ)民間労働運動の総退却を反映して、総評官公労運動の後退化が、その中心部の公労協をとらえ、総評民同派勢力の指導力の低下と、その基盤の弱体化がいちだんとすすんだ。

(ハ)総評労働運動の後退化から労働運動の右翼的「連合」へと向かうこんにちの情勢局面は、資本ヘゲモニーの強化＝労働運動の退却期の特徴を明確にしめしている。下部組合員は、労組に対する信頼を失い、脱組合、脱政治化の傾向を強くし、労働運動はいまやいっそう深刻な危機的局面をむかえている。

(ニ)不況下の大合理化＝日本帝国主義の産業再編成は、労働組合の合理化協力によってきわめて成功裏に推進され、労資の力関係は資本の側に圧倒的に有利に展開している。春闘の形骸化と再燃した民間先行の「労戦統一」の動きは、この力関係の今日的表現であり、労働者階級のあらたな体制内統合化の完成局面をしめすものとなっている。

(二) 自民党政府は、保守支配の危機を「中道」派との連合によってカバーしつつ、ブルジョア連合政治を展開した。この連合政治のもとで、日本帝国主義の再編成に対応するあらたな攻撃が展開されている。

(イ)この攻撃は、高度成長期の企業へゲモニー＝賃上げ・終身雇用・企業福祉等による利益再配分＝をもってする労働者の統合が、高度成長の終焉によって、その物的基礎を失いつつある現在、これをさらに補強し、労働者階級をいっそうふかく体制の内部にくみこむためのあらたなイデオロギー統合をめざしている点に最大の特徴がある。

(ロ)「日本経済の危機」をかかげた〝国難〟キャンペインは、一方での労資協調主義の鼓吹とタイアップして、安保・国防・資源・市場などをめぐる「挙国一致」路線に諸勢力をむかわせた。労働運動における「参加」路線の台頭は、このような「挙国一致」路線、国家主義、排外主義のまえに労働運動を武装解除する危険な結果をみちびいている。

(ハ)このような国家主義の台頭がみられる一方で、支配階級はいま、高度成長過程でつくりあげた労資協調機構をてことして、国家行政の役割をたかめながら労働者階級を「参加」路線へと再統合すべくイデオロギー攻勢をつよめている。そしてこの攻勢は、労働者階級を全体としてとらえている。

(三)戦後の相対的安定期の終焉とともに到来したあらたな再編期は、このように支配階級の攻勢をもってはじまったが、この支配階級の優勢が、社会主義運動と結合されないまま形骸化をふかめてきた日本労働運動の危機的現実によって維持されてきたのは明白である。それゆえ、かかる事態をまねいた自己の責任に無自覚なまま、社共勢力は、高度成長が破綻しその諸矛盾が噴出する現時期に、労働者大衆の支持を得ることができないでいる。そして深刻な停滞へと追い込まれ、不況下の首切り攻撃にも、あるいは自民党政府のあらたな反動攻撃にも、正面から対決することができないでいる。

ブルジョア連合政治に抗し八〇年代闘争の前進へ

こんにち、労資の階級攻防の全体軸が喪失しているなかでも、いくつかの分野で、はげしい労資のつばぜりあいがくりひろげられている。全国に点在する民間中小労組の反合・雇用闘争や、背景資本に対する地域ぐるみの追及闘争は、こうした闘いの一典型である。また、日韓・三里塚・部落・基地・原発・公害などの諸戦線で持続的な闘いのひろがりがかちとられ、全体からみればまだ少数派にとどまってはいるが、労働者の意識的分子がこの闘いをになっている。階級闘争の先端部に位置するわれわれのこうした闘争は、こんにちの労資の全体的力関係のもとでは、労働戦線総体への波及力を欠き、当面は敵の重包囲下の部分的局部的な闘いにとどまらざるをえない。しかし、われわれが、この八〇年代において、いっそう深化する政治・経済・社会矛盾のもとで敵の攻撃と対峙し、労働者大衆の体制への統合をつきやぶる闘いを強化・拡大し、八〇年代を闘いぬく強固な闘争主体の形成をなしとげるならば、われわれの闘いは労働者の多数派の獲得に大きく前進することができる。

支配階級の攻撃が功を奏し、ひきつづき労働運動の後退化がよぎなくされるのか、それともこの攻撃をはねかえし、労働者階級の体制内統合をつきやぶるわれわれのたたかいがあらたな前進をかちとるのか、当面する八〇年代はこの二つの道をめぐる諸勢力のはげしいせめぎ合いの時代である。そして、後者の道を切りひらくためには、労働者階級の「指導部」たる地位も資格も完全に喪失し、分解と退却をはじめた社共、民同派勢力にかわるあらたな革命派勢力の結集と、闘う労働運動を基盤に形成される革命的統一戦線の構築が、いまや焦眉の八〇年代的課題となっている。

当面する八〇年代労働運動において、われ

われはなによりもまず、全国の職場・地域・産別に闘う労働運動組織を広範に組織し、首切り・合理化をはじめとする資本攻撃に職場闘争をもって対峙しうる闘争主体の構築をめざさねばならない。こんにちの職場闘争は、よく準備され、きたえられた闘争主体を欠いてはけっして成功をおさめることはできない。各職場のたたかいを地域的に結合しつつ、地域共同闘争によって増幅し、政治的課題を媒介に職場労働者の政治意識をたかめなければならない。職場闘争がたんに個別企業のわくにとどまるかぎり、その全面的発展をかちとることは不可能である。

そしてこのような個別資本とのたたかいとともに、現代帝国主義の諸矛盾が不可避的に生み出すいっさいの政治・社会領域に職場労働者の眼をむけ、これらの政治的、社会的運動のにない手として、職場労働者を訓練しなければならない。こうした闘いを媒介に、個別資本に対する職場闘争は、革命主体形成に必要な運動的基盤をもちうるとともに、職場闘争の地域的波及にあらたな展望をひらくことができる。

攻勢期のたたかいでは、われわれは闘争の陣形をこれまでの防御型から攻撃型へと転換し、その攻撃対象を明確に職制機構に向けなければならない。資本の職場管理機構である職制機構を解体・まひさせ、職場のヘゲモニーを労働者の側がにぎらねばならない。このようにして形成される労働者の職場闘争組織は、資本の職場権力と闘争し、労働＝生産過程を統制する組織であるかぎり、職場における労働者の権力組織となることができる。職場を拠点に、地区的に結合された労働者の闘いが、当面する改良的要求をこえて、階級全体の立場にたった闘いへと前進するとき、この闘争は帝国主義と闘う労働運動へと発展することができる。この労働運動の高揚のなかから、金融独占資本を統制―制圧し、日本帝国主義の国家権力装置を破砕する階級的実力をもった、労働者の権力闘争組織――労働者権力もはじめて成長することができる。

当面する八〇年代の闘いは、このようないっそう全面的な先進国階級攻防の一環に、明確に位置している。

わが同盟は、安保・日韓をはじめとする大衆的政治闘争と、職場実力闘争を軸とする闘う労働運動の建設を両輪とした当面する八〇年代闘争を全力で闘いぬき、現代革命を組織しうる革命的主体へと自己をさらにうちきたえゆくであろう。

（文責＝北村登）

復録
日本大雑誌
愛蔵版
全5冊
時代相を集約した「生」の記録！
明治篇
大正篇
昭和…戦前篇/戦中篇/戦後篇
明治・大正から昭和戦後まで4,000種の雑誌を時代ごとに一冊の雑誌にまとめてみました。
A5版上製●1300円（昭和戦中篇のみ1500円）

昭和55年2月1日発行（毎月1回1日発行）第12巻2号　昭和44年12月3日
第三種郵便物認可　昭和54年1月12日国鉄首都特別扱承認雑誌第4216号

KANEBO

For Beautiful Human Life

人生は、
降り積もる悲しみを
払い落しながら
すすむ旅。

長い旅を終え、
それぞれの人生が散ってゆく。
手荷物ひとつの踊り子が、
眼に見えぬ途方もなく重い歳月を背に
帰ってゆく
貧しさから逃れる為に故郷を離れ、
貧しいままで、帰ってきたとか……

一握りの、人生の勝利者になれずとも、
ひとの痛みを知った者の優しさは、
悲しみを払い続ける逞しさは、
やがて人生を、
琥珀色に輝かせるだろう。

琥珀色の香り、バルカン。

VALCAN
Eau De Toilette
For Men

オードトアレ　2,500円・他13品種

カネボウ化粧品

美しき一日一日のライフをめざす
カネボウ化粧品
この看板のあるカネボウチェーン店・有名百貨店でお買い求めください

流動二月号（第十二巻二号）定価四五〇円（送料四十九円）

雑誌コード　09353—2